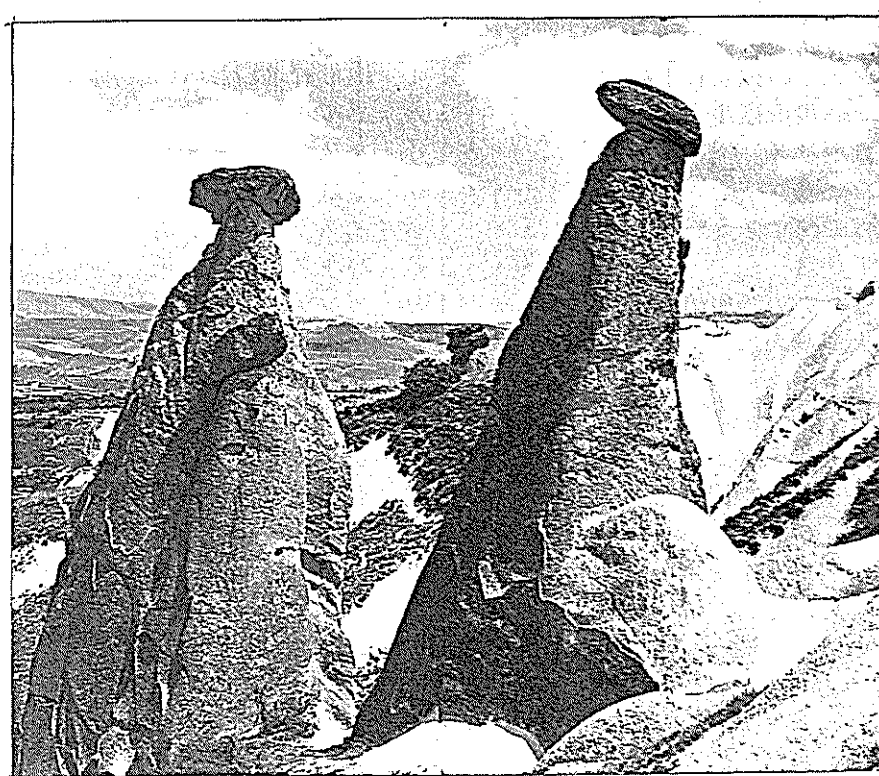


トルコ古代遺跡と ガンダーラ仏教遺跡の 探訪の旅

(下はカッパドキアの妖精の煙突)



平成2年4月13日～23日

寺 前 信 次

トルコ古代遺跡とガンダーラ仏教遺跡探訪の旅

まえがき	・・・ 1	カッパドキア～アンカラ	
4月13日	・・・ 3	寝台列車	・・・ 46
出発延期	・・・ 3	4月19日	・・・ 46
4月14日	・・・ 3	イスタンブール着	・・・ 46
成田～カラチ	・・・ 3	ボスポラス海峡クルーズ	・・・ 48
4月15日	・・・ 5	軍事博物館	・・・ 50
カラチ～イスタンブール	・・・ 5	尚武の心のトルコ	・・・ 52
トルコの歴史の概要	・・・ 6	ガラタ橋の散策	・・・ 52
トルコとトルコ人の由来	・・・ 6	4月20日	・・・ 52
オスマントルコ帝国	・・・ 8	イスタンブール	・・・ 52
オスマントルコ帝国の崩壊と 共和国の建設	・・・ 9	グラントバザール	・・・ 52
イスタンブール～イズミール	・・・ 10	市内観光	・・・ 52
イズミール	・・・ 10	トプカプ宮殿	・・・ 52
ギリシアとの独立戦争経過	・・・ 11	聖ソフィア寺院	・・・ 52
イズミール～ベルガモ	・・・ 13	地下貯水場	・・・ 52
アクロポリス	・・・ 14	ブルー・モスク	・・・ 52
アクレピオン	・・・ 17	イスタンブールを発つ	・・・ 60
ベルガモ～イズミール	・・・ 18	4月21日	・・・ 60
4月16日	・・・ 18	イスラマバード着	・・・ 60
エフェソスの歴史の概要	・・・ 19	パキスタンの概要	・・・ 60
白い大理石のエフェソス遺跡	・・・ 20	ガンダーラ美術と仏像	・・・ 60
考古学博物館	・・・ 25	タクシラ	・・・ 60
4月17日	・・・ 25	タクシラ博物館	・・・ 60
イズミール～アンカラ	・・・ 26	シルスフ遺跡	・・・ 60
アナトリオ文明博物館	・・・ 28	シルカップ遺跡	・・・ 60
アタチュルク廟	・・・ 30	ダルマラージカ仏塔の遠望	・・・ 70
ケマル・アタチュルクの概略	・・・ 32	大唐西域に見るタクシラ	・・・ 70
トルコ料理	・・・ 35	シャー・ファイサル・モスク	・・・ 70
アンカラ～カッパドキア	・・・ 35	ラマダン	・・・ 70
4月18日	・・・ 37	お祈りは場所を選ばず	・・・ 70
カッパドキア	・・・ 37	スンニ派とシーア派	・・・ 70
カッパドキアの歴史	・・・ 37	寝耳に水の果報	・・・ 70
別世界のカッパドキア溪谷	・・・ 39	4月22日	・・・ 70
ギョレメ博物館	・・・ 41	マリ村観光	・・・ 70
妖精の煙突	・・・ 42	空路・帰途につく	・・・ 70
幻の地下都市	・・・ 43	あとがき	・・・ 70

まえがき

旅は精神的な家出である。何時も同じ場所、同じ人間関係、同じような時間の流れの繰り返しでは、精神的に開放されることはない。火の消えた回り燈籠のように役に立たず、墓穴のはたを覗いて日暮れ街道を急ぐ退屈な人生となっては光明は少ない。・年老いても「隴を得て蜀を望む」という欲張りの旅心は、頬をなでる風が快い季節ともなると、「後は後、今は今」とばかり夢寝の間も旅に出口を求め、堰を切ったように旅への衝動に駆り立てられた。

過去34回の海外旅行の体験から、旅は人生を長くして人間に喜びと勇気を与え、人生の健康法の上善の策だと信じている。旅は即ち人間にだけ与えられた神からの贈り物で、「世界という書物を直接に読破する」人生の師匠である。そこから前進の気迫と新天地の開拓と希望が生まれるのだ。理由にならない理由だろうか。

春秋に富んだ若い時代から古い遺跡に憧れ、9回に及ぶ中国の旅を始めとして10年も前に、インド・エジプト・ギリシア・イタリア・トルコのイスタンブール、それに中米のマヤ文明のメキシコ、南米ペルーのインカ帝国の史跡を既に訪れた。

近年になってアンコールワット（カンボジア）、ボロブドール（インドネシア）、カラコルム（モンゴル帝国の遺跡）等を探訪したが、これは日々の活力の源となり心の糧となる大きな財産となった。

学問教養のない異下の阿蒙の私は、本年は日本とトルコとの友好100年記念の年でもあり、トルコのアナトリア（小アジアの別名）古代史、及び仏陀入滅から500年後に、初めて仏像が作られたガンダーラ仏教遺跡のアニミズムに牽強された。命長ければ蓬萊が見れると休火山が爆発したように、古代史探訪の旅に参加した。

トルコは世界で数少ない親日国家の一つである。私なりに其の理由を纏めてみた。

①遠い歴史の昔、中央アジアの高原に覇を確立した遊牧騎馬民族「突厥」（古代トルコ族）が、アナトリアに入ってトルコ人の祖先となり、日本人とは擬似兄弟民族であるという親近感が強い。

②明治23年9月16日の夜、和歌山県串本沖合で台風に遭遇して岩礁に乗り上げ、オスマン・パシャ将軍を始め581名の水死者を出した（生存者69名）「エルトゥール号遭難事件」である。

当時のオスマン・トルコ帝国より派遣され、皇帝の特別親書を明治天皇に奉呈した帰途であった。この時の生存者に対する日本側関係者の救助、看護、医療、移送に献身的なものがあり、トルコ国民を大いに感動させた。

和歌山県側は現地で発見した121名の仮埋葬を行い、神戸で負傷者の手厚い病院看護を施し、宮中からも全員に白フランネルの医療着が下賜され、政府は軍艦比叡と金剛に生存者を分乗させてトルコに送還した。

現在同地に遭難慰霊碑が建てられて定期的に慰霊祭が行われ、トルコでは嘗て教科書にものったという事件である。（私もこの慰霊碑に参拝した）

③次ぎにトルコ国民が日本に注目したのは日露戦争であった。

北方の巨人、宿敵帝政ロシアとの3世紀にもわたり血みどろの戦いを13回も続け、次々に領土を奪われ、夥しいトルコ人の流血を強いられた。骨の髄までロシア憎しの感情で凝り固まっていたトルコ国民にとっては、アジアの新興国、しかも兄弟国

と思っている日本がロシアを撃破したことは、かつてない一大朗報として歓迎された。トルコ国民は大喜びのあまり、生まれた子供にノギ、トーゴの名前を付ける者もいたという。

- ④一方、1904～6年、武官として日本に派遣されたオスマン・トルコ帝国のペルテル・デミルハン・パシャ将軍は、奉天会戦に観戦武官として参加して負傷した。彼は帰国後、トルコ・日本国民の共通点として「誠実にして名誉を重んじ、誇り高い国民であり、また神道はトルコ・シャーマニズムと共通点を有しており、中央アジア系トルコ神話と日本神話の源流は同じだ」と述べた。

日本敬愛の見聞記を出版して日本人の勇気、忍耐、礼儀正しさ、誇り、誠実さを賞賛し、日本に対するイメージの形成に大きな影響を与えた。

- ⑤第一次大戦後（トルコは独側）のオスマン帝国解体崩壊の課程で、亡国寸前の外国軍占領下のトルコを外交、軍事に比類なき才腕を発揮し、近代トルコの新生と独立と改革を果敢に進めたケマル・アタチュルク将軍が、同じように維新、開国の混乱の中から西欧帝国主義列強の干渉、圧力を回避し、いち早く新興資本主義強国として近代日本を発足させた明治天皇に、深い尊敬の念を抱いた事情があった。

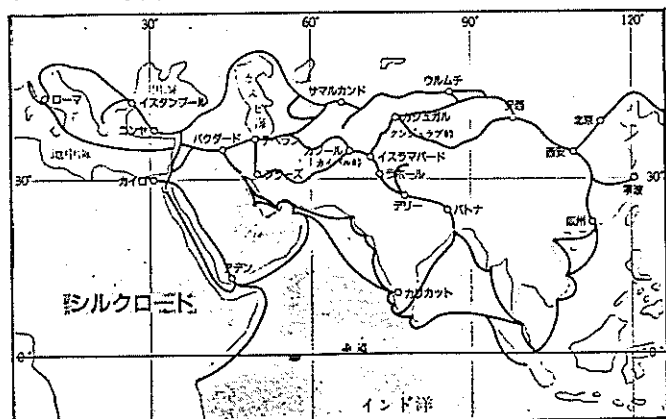
彼の自室には明治天皇の肖像を掲げたという話は有名である。

- ⑥最後は戦後日本への期待と尊敬である。アジアの先進兄弟国日本が敗戦の廃墟と荒廃の中から、再び強大な経済大国として不死鳥のように蘇えり、それに対する尊敬と憧憬は、これまでの親日感情に更に賛美の要素を加えたのである。（以上）

一方、絹の道をアナトリア（トルコ）と一にしているタクシラ（パキスタンの首都イスラマバード近郊）のガンダーラ仏教遺跡は、私の長年の夢であった。さきに長安（現西安）を出発してシルクロードを踏破して以来、玄奘三蔵の歩んだ道程を巡ることを、トルコ古代史と同様に懸想的としていた。

17年間もの長い年月を費やし、インド各地の仏典を求めて歴遊した玄奘は631年にタクシラを訪れ、その時のことを大唐西域記に綴っている。其の事が一層私を魅了させていた。

生半可な本で読んだ知識より体で得た実感に優ものはなく、今次旅行は両者ともに願望を叶えさせ、一石二鳥の旅であった。「富は一生の宝、智は万代の宝」と言われている。人生の楽しさ、有難さに満足感を味わいながら、龍頭蛇尾になることもなく無事に旅を終えたことは万代の宝であった。



4月13日

(金) 出発延期

私のように若冠を過ぎた頃から生死の場で戦った者にとっては、旅はやり直しのきかない過去を千切り、投げ捨てる良い機会だと、五府を鼓舞しながら9・30に成田空港入りをした。

13日の金曜日の上に仏滅が重なった性だろうか。11・30発のバキスタン航空751便は14・00に延期となり、更に長時間も待機させられた挙句、寝耳に水のように本日は欠航だと怪訝そうな表情で添乗員が告げた。鉄砲玉に帆をかけたようなツンツンの苦情は当然であった。

同機に搭乗予定の他のツアーは、延期の連絡を前日に受けていた事が判明し、海千山千の外国通の参加者は腹の虫が治まらず、抗顔師然と侃々となつて抗議していた。

足下から鳥が立ったような思いもよらない事が起り、漸く空港近くのホテルに一泊することになった。イスラマバードが嵐のために飛行機が引き返したという説明は、詭弁を弄した言い訳のような感じだ。

それにしてもトルコの日程が1日短縮される事は諦め切れず、古代史探訪の旅の出鼻をくじかれて、萎縮した心境を解消したのはホテル到着後のことであった。

早速ホテルの部屋に備付けてあった仏教聖典を繙いて、一気呵成に読破した。
「怨みは怨みによって果たされず、忍を行じてのみ、よく怨みを解くことを得る。これ不変の真理なり」と、筆頭に論している。

第五項にはまた「人に生まるるは難く、いま生命あるは有難く、世に仏あるは難く、仏の教えを聞くは有難し」と、論じた法句經の言葉は私の胸を衝いた。

聖典を読み終えて私の心も静まり、諦めが見つからないのは即ち、諦めようとしなからだと教えられ、骨身に染みた此の法句は何時までも私の脳裏から離れない。

時は我れに味方せず、運は寝て待てとばかり休息に就いたのであった。

4月14日

(土) 成田～北京～イスラマバード～カラチ

昨夜は法句經を読みながら心を充電し、不安と一抹の寂しさを感じながら、PK751便は9・00に降雨の成田空港を離陸した。北京までの所要時間は4時間10分、雲上は晴れ上がって純白、徒然のままに読書に耽っていた。

12・50到北京に着陸。

14・00に再び離陸してイスラマバードまでの5時間30分の飛翔となる。嘗て山越えした天山山脈の巍然とした白峰の俯瞰に期待をかけ、果てしなく続く空中庭園を浮遊した。

広い宇宙の組立はどうなっているのであろうか。この宇宙は永遠なものであろうか。やがて無くなるのであろうか。宇宙が永遠であらうとなかろうと生老病死や愁い、悲しみや苦しみ、悩みは常に人の身の上に迫っている。このように感傷的になるのは年老いた性だろうか。

赤茶げたタクラマカン砂漠が蜿蜒と拡がり、天山山脈は薄い雲に覆われて姿を隠し

ている。「敦煌」西方の「陽関」の関所に立ち、タクラマカン砂漠を眺めた遠い昔が脳裏の中を走った。当時の人達が、西方浄土が砂漠の西の彼方に在ると信じたのは、タクラマカン砂漠であった。

道を求めて砂漠を越境し、国禁を侵して踏破した玄奘三蔵の鞏固な意志。「心を平らかにせよ、心が平かになれば、世界の大地もみな悉く平らになる」と論じた経文など、私にはタクラマカン砂漠が仏典のように映っていた。

「人面桃花」と云うか、人は変わっても風景は変わらず、歳月の去るのは速しと感じながら飛行すること約4時間。小さな千切れ雲が次々と飛び去って行く雲間から、恰も絵にかいたような万古の白峰が雄渾な姿を現わした。

近くの座席のパキスタン人が私を手招いてタバコを差し出し、あれを見よとばかり自慢げに、白く輝く連峰を指差した。ヒマラヤの西に連なるカラコルム山脈の秀麗な山岳美であった。

天然色の誘惑が魅了する景観は長途の旅の無聊を慰め、人間は生きているうちに、多くの事を経験すべきだと言わんばかりの眺望だ。

ラホール（パキスタン）出身の彼は練馬で働いていたが、現在は大阪の花博に従事する35歳の労働者である。胸に花博の従業員証を吊るし、片言の日本語で富士山より高いと得意満面であった。本当に四海は皆兄弟の感じがする。

旅先では見知らぬ人情に接し凡て人生は偶然の連続だ。彼との簡単な言葉の遣り取りに花を咲かせているとき、搭乗機はイスラマバード空港への着陸態勢に入っていた。イスラマバード空港に現地時間の17・00に到着。

四周を山に囲まれた盆地の中にある空港一帯は、濃い緑の中に夏の花が咲き乱れ、異国の彩りは我々に眼の保養を与えていた。

しかし、此处からイスタンブールに直行の予定が、狂い咲きの花のように異常が重なり、国内線に乗り継いでカラチへ飛ぶことになった。胸中は隔靴搔痒の焦りの連続だったが、後は野となれ山となれと諦めなければならない。

空港待合室で彼（SARWAR）が再び声をかけてきた。子供の御土産に買った日本製の飛行機とモーターカーの玩具をぶらさげ、これは2万、これは1万5千円だったと物価高を嘆く傍ら、パキスタンの子供には絶対に手に入らない物だと、微笑みながら満ち満ちた親心を表していた。

イスラマバードを19・00に離陸してカラチに向かった。陽は既に西の彼方に沈んで闇の中の飛行である。各駅停車の空の旅は取り返しのつかない空白の時間の浪費、トルコの古代遺跡探訪の日程の短縮だけが耐えられない痛恨事だ。

いくら苛立っても処置なし。捨てた命を拾った我が身を何時までも摂生して長持ちさせ、旅を楽しもうと横臥しながら、睡眠こそ至幸の時だと眠りに入った。

カラチ空港に20・40着。

記憶の中に焼き付いているカラチに思いもよらず立ち寄った。暑い太陽の余熱の熱波が無慈悲にも暗い待合室に充満し、8年ぶりのカラチは依然として蒸し暑い。前回二日間滞在して、豊穡なインダス河畔を散策した当時が走馬灯のように思い出される。

ホテルの結婚式場で会った少女が便りをよこし、返信の英文に苦勞したことが夢のように回顧される。今頃は数人の子供の母親になって、幸福な人生を送っているだろう。幸多かれと祈るばかりだ。

航空路の中継基地となっているカラチ空港は相も変わらず雑踏し、暑気芬々として群衆は人塊をなしていた。幸いにも一行は空港近くのサリマル・ホテルに案内され、3時間余の休憩をとることになった。将に地獄に仏である。

4月15日 (日) カラチ～ジェット～イスタンブール

一息入れた我々は暗闇の3・45にカラチを発つ。便数の少ない性だろうか、機内は白装束のパキスタン人で超満員。彼等の体臭は鼻持ちならず、夢を見る夢子さんになりたいと努力したものの眠れない。早速、睡眠薬を服用し、しばらく、驚くばかり近くに輝く無数の星を眺め、知らず知らずのうちに眠りに就いていた。

昏々と眠り続けて目覚めると巨大な火の玉が東の空に昇り始め、白い暁の光が機窓から差し込み、未だ真っ黒にしか見えない鳥が虚空に翼をひろげて飛んでいた。

搭乗機はまた思いもよらない「ジェット」空港に4・40に着陸。

添乗員はアラビア半島まで迂回することを予告せず、躊躇していたのか、口をつぐんで告げなかった。私の知識ではジェットは「メッカ」の外港として発達した町だ。石油の宝庫らしく街は電燈の光りで埋めつくされ、夜明けの街を静かに照らしていた。

白装束のパキスタン人達はメッカ詣でのために搭乗していた事が判明した。イスラム教徒の深い敬虔な心が明日を約束すると思う時、胸に熱いものを感じてくる。

〔後日、知ったことだがマラダン（断食）の月であった〕

彼等も我々も一寸先は闇である。しかし、如何に苦悶の絶えない世界であっても、我々の唯一の生き場所だから深刻だ。この迫ってくる苦しみを払い除けるため、信仰の世界に帰依することは、洋の東西を問わないことである。

次第に目映いばかりの自然が眼に入ってくる。次ぎはイスタンブールだと旅の気分が盛り上がり始めた時、隣り座席のパキスタン人が私に声をかけた。彼はトロントの自動車工場へ修理技術を修得に行くらしく、好意的に「メッカ」は上昇途中に見えると教えてくれた。旅のいたる所に入情が溢れている。

搭乗機は滑走を初めて上昇態勢に入り、鵜の目、鷹の目になって指差されたメッカ方向を凝視し続け、夢を追うようにカメラを構えた。しかし、数十本の白い石柱が眼に映ったのは一瞬に過ぎない。嗚呼、あれがメッカだと胸が鼓動したものの、逆光線はカメラに収めることを許さず、実に口惜しく通り過ぎてしまった。

数年前にエルサレムにある金のドームの大本山・イスラム寺院を訪れ、今ここにメッカを拝見できたことは、異教徒の私にとっても喜ばしい出来事。奔流のように我が想念が駆け巡っていた。

機はいよいよアラビア砂漠を瞰下しながらイスタンブールへと飛翔した。喜々悠々と楽しみが近づくにつれて、前回訪れたときの光景が克明に頭の中に描写され、密かに待ち焦がれていた古都を想起していた。

十年の歳月は実に短く感じる。しかし、我々は短い時間を持っているのではなく、実は其の多くの時間を浪費しているのだ。そして、旅は決して時間の浪費ではないと思ひながら、不毛の砂漠の中に燦く湖水の美観に、強い印象を残していた。

神は決して人々を見捨てなかったと大空から地球を見渡した。資源の少ない国には

勤勉な人間を与え、怠惰な国には豊富な資源を恵んでいる。資源のない国に生を享けた我々が何の因果であろうか。敗戦の苛斂誅求から再起して、世界の国々を旅することは誠に幸福。心から神仏に感謝の心を捧げなければならない。

旅人を魅了した数々の自然美と人情を享受して、長途の空の旅は漸く終わりを告げ、11・00にイスタンブール空港に着陸。

これ以降の旅程は運否天賦にまかせて国内線の空港に移動し、空港内レストランで昼食。気温は我が北陸よりも温かく、生活程度には稍、惻隱の情を感じていた。

出迎えたガイド嬢はアンカラ大学文学部の学生で、流暢な日本語を話す美貌な乙女。日本の古事記が専攻というから我々は顔負けだ。柳絮の才とはこの人のことだろう。

彼女の父は外交官で現在は外務省顧問という錚々たる人物。母は横浜出身の日本人。彼女も小学校4年生まで横浜に在学したというから、堪能な日本語は宜なる哉である。

国内線空港は観光立国を目指す政府の方針であろうか、威風堂々とした美麗で清潔な感じだ。しかし、成田出発の1日遅延が祟り、トロイ遺跡の見学が削除されたと宣告され、泡が消えたように悔やまれてならない。

トルコ古代史探訪の目的から、先ずトルコの歴史の概要を記述する。

トルコ歴史の概要

トルコは最古の人類が住んだ遺跡時代からヒッタイト、フリギア、イオニア、リディア、ペルシア、ベルガモ、ローマ、ビザンチン、セルジューク・トルコ、オスマン・トルコ、トルコ共和国その他を数えると16もの国家、王朝、文化文明の交替した多重層の混合モザイク国家である。其の主要な歴史のみを以下に記述する。

①トルコとトルコ人の由来

中国の史料「詩経」「史記」「漢書」などの伝えるところでは、トルコ民族の源流は、紀元前1千年紀には中国北辺からバイカル湖に至る高アジア、即ち現在のモンゴル方面で遊牧生活を送っていた。(匈奴も其の主力はトルコ族)

高アジア民族は騎馬民族であり、遊牧民族であり、狩獵民族でもあり、移動する天幕生活をしていた。彼等は農工業に従事せず、進んで隣接地域の住民を掠奪することを習いとし、周囲の諸地域に絶えず脅威を与えていた。

彼等の遊牧民族は3つの大きな種族集団、即ちトルコ族、モンゴル族、及び後世の満州族の祖先であるツングース族に分けられる。これらは屢々相互に入り混じり、謂わば種族連合とも呼びうるものを形成した。匈奴と呼ばれた最初の大遊牧集団も、そのようなものであったらしい。トルコ民族自体が歴史の記録に初めて登場するのは、丁零(のち高車)で前2世紀ころである。

6世紀初頭から中央アジアは「柔然」の支配に帰したが、トルコ諸部族の反乱が絶えず、そのうち「布民」の率いる「突厥」は柔然に勝ち、布民は可汗(君主)の称号合を帯びて、オノン川上流(現モンゴル)を中心とする突厥帝国を建設した。

6～8世紀頃に中央アジア、モンゴルで勢力を振るった遊牧帝国の突厥(552～

744)は、中国の歴史書に必ず出てくる民族で、トルコに関する歴史書も同様だ。
「突厥」は「TURK」(トルコ)の漢音である。

トルコ民族の祖先であるトルコ族はやがて東西に分裂し、西方部族は西進を開始して更に南下、「セルジューク・トルコ」を形成する。このことはトルコ系諸族の中央アジアからの西進を刺激し、セルジューク・トルコから更にアナトリア(小アジア)に分かれたルーム・セルジューク・トルコ王朝(ルーム=小アジア)が成立する。

オスマン・トルコ族は、このセルジューク・トルコの中のオグズ族の中の更にカイウ部族という小部族であった。これが南下西進と共にイスラム化して、ビザンチン帝国(東ローマ帝国)に対する防衛の役割を果たしていたらしい。

これより先、アナトリアの東部ビザンチン帝国領で戦い(1071)が起り、ビザンチン皇帝が捕虜になって、アナトリアのトルコ化が決定的となった。(これによって西欧キリスト教国による十字軍遠征の歴史的事件を起す原因ともなった)

それと前後して、セルジューク・トルコ朝の弱体化につれて、ルーム・セルジューク・トルコ朝(1077~1307)が成立したという訳である。

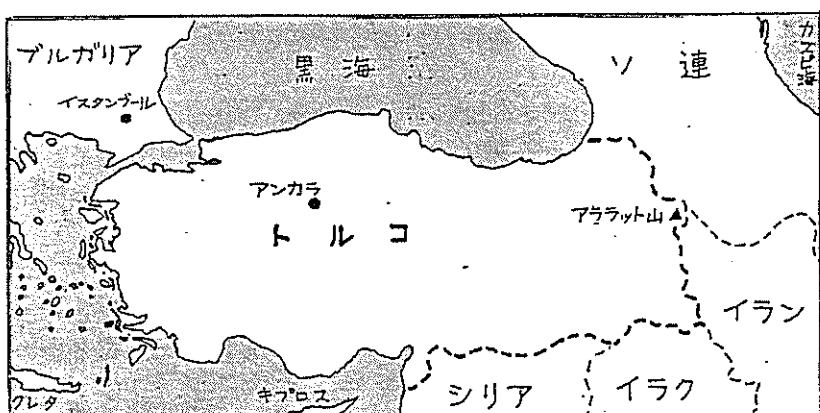
アナトリアのイスラム文化圏への変貌が始まり(マルコポーロがアナトリアを通過して「元」に向かったのは此の頃である。1271年)、アナトリアに分立していた幾つかのトルコ諸族のうち、最もビザンチン国境に近いアンカラ(現トルコの首都)周辺に蟠踞していたオスマン・トルコ族が、逐次ビザンチン小都市を征服して頭角を現わし、ここにオスマン・トルコ帝国が形成されて行き、やがて中東イスラム世界の覇者となっていった。

オスマン・トルコの「オスマン」とは、その族長の姓である。トルコ人は彼等がモンゴル~中央アジア騎馬民族の末裔であることに誇りを持ち、学校の歴史教科書にも大きく取り扱われている。我々も非常な近親感を覚える。

新興オスマントルコも、稲妻のように長駆遠征してきたモンゴル軍の西進と衝突し、1402年、アンカラ郊外の会戦で壊滅的敗北を被った。オスマントルコは大混乱に陥ったが、しかし壊滅はしなかった。

有名なメフメット1世(1413~21)がオスマントルコ族を、再び統一して復興を成し遂げ、つづくムラト2世(1421~51)の時代には、小アジアからバルカン、ハンガリーを征服した。

更に次ぎのメフメット2世(1451~81)になって、長年の懸案であったコンスタンチノーブル(現イスタンブール)を陥落させ、ビザンチン帝国(東ローマ帝国)を破り、オスマントルコ帝国の時代に入った。



②オスマントルコ大帝国 (上記と重複する部分あり)

オスマントルコの前には、依然として千年にわたるビザンチン帝国が最後の首都コンスタンチノーブル（現イスタンブール）を守っていた。ここはボスポラス海峡を扼している戦略拠点であり、難攻不落の要塞であった。

更に下手に攻撃するとベネチア（ベニス）やジェノア（ともにイタリアの公国であった）、神聖ローマ帝国（ドイツ）が同盟して、逆にトルコに災厄をもたらしかねなかった。

オスマントルコの若い覇者メフメット2世は敢然として此の難事業に挑戦した。金貨を盛り上げた献上の大皿を払い除け、「我れはコンスタンチノーブルをのみ欲す」と叫んだという、有名な言葉が残っている。

ビザンチン帝国は、その頃すでにコンスタンチノーブル周辺を支配するだけで、そのうえ第4次十字軍の占領破壊からの回復も充分でなく、また商業、貿易、財政はイタリアのベネチアやジェノバの手に握られていた。更にバルカン諸民族には、トルコに対抗する強力な政治、軍事力は存在しない状況であった。

ビザンチン帝国は、恰もオスマントルコの領土内に浮かぶ巨島のような感じであった。それはボスポラス海峡、マルマラ海および金角湾（コンスタンチノーブルを南北に分断している入江）に面し、西側の陸続きには二重三重の城塞が築かれていた。

また金角湾にはビザンチン海軍の26隻の艦隊が待機し、金角湾の入口には防鎖で閉鎖されていた。

メフメット2世は戦略を考えて直ちに実施に着手した。1452年、大艦隊（150隻と云われている）をマルマラ海に終結させると共に、ボスポラス海峡の最狭部のヨーロッパ側に、ルメーリ・ヒサルという城塞を3ヶ月で築城し、アジア側対岸にあったアナドル・ヒサル城塞と共に海峡を制圧した。（上図参照）この項はボスポラス海峡クルーズで記述する。

ビザンチン側の守りは固く容易に陥落しなかった。そこでメフメット2世は奇想天外な「艦隊の山越え作戦」を実施した。こうして70隻もの艦隊が夜陰に紛れて金角湾に滑り込んだ。

夜が明けてビザンチン側は仰天し、艦隊は戦意を挫かれて撃破され、遂に1453年5月29日にコンスタンチノーブルは陥落した。324年にコンスタンチヌス大帝の遷都以来、1、100年に及んだ東ローマ帝国（ビザンチン帝国）の首都も、ここにオスマントルコの手に帰したのである。

その後、オスマントルコは大イスラム帝国実現のために遠征を重ね、アジア、アフリカ、ヨーロッパの3大陸に大版図を駆け、貿易と通商をも一手に支配した。

その征服民族は20に達し、人口は5、000万人であったと言う。（当時のイギリスの人口は400万人）



③オスマン帝国の崩壊と共和国の建設

やがて絶頂期は下降期への始まりとなり、帝政ロシアの南下膨張政策と衝突が急増し、宿命の死闘が2世紀半にわたって繰り返された。

18世紀末から19世紀初頭には、フランス革命とナポレオン戦争が起り、エジプト遠征、ロシア遠征等からトルコをめぐる英仏露の列強の画策が始まった。

18世紀を通じ、地中海通商によって富裕な地域的勢力となっていたギリシアは、ビザンチン帝国の再興を夢みて、列強の支援のもとにトルコに対して独立を要求して達成した。

更にエジプトの独立とクリミヤ戦争（黒海の北海岸の半島部）、バルカン諸国の反トルコ運動等によって、オスマントルコ帝国は5分の2の領土を失った。

つづくドイツの対トルコ進出と相俟って、民族及び利害関係がモザイクのように錯綜流動化したバルカンは、列強の争奪戦場の様相を呈し、1912年の第1次バルカン戦争、1913年の第2次バルカン戦争により、トルコはヨーロッパ側の領土の5分の3を失った。

1914年7月28日、第1次世界大戦が勃発した。当時のオスマントルコのスルタン（最高権力者、皇帝）であったメフメット5世の実権は失われていた状態で、青年トルコ党の急進派の指導者エンペル・パシャ（親ドイツ派）が実権を掌握し、遂にドイツ側につく結果となった。

イスラム教とキリスト教の対立と、十字軍以来の反トルコ偏見はトルコの宿命のようなものであった。ダーダネルス海峡（前頁地図参照）をめぐる連合軍の上陸作戦では、アタチュルク・ケマル・パシャ等の善戦奮闘にもかかわらず、1918年11月13日、連合軍の艦隊がコンスタンチノーブルに入港し、首都は主としてイギリス軍の手で陥落したのであった。

トルコは外交の悲劇的失敗によってドイツとの同盟に入り、第1次世界大戦で失敗して、オスマントルコ帝国は最後の解体期を迎えるに到った。

即ち、トルコは国土の大半を列強によって分割され、トルコ自体の国土としてはアンカラ（現在の首都）周辺の高原のみが認められるという、誠に苛酷という言葉も不適當なほど情け容赦もなく、非道な敗戦国の分割密約が成立したのであった。

敗戦の混乱の中から、トルコ国内では早くも占領軍に対する抵抗運動が起り、これらと軍を中心とした全国組織が統一され、独立戦争へと発展させたのが、トルコ救国の英雄「ケマル・パシャ（後日のケマル・アタチュルク）」であった。

そして英米仏軍支援のもとにギリシア軍がイズミール（後記する）に上陸した外、仏軍がアルメニア（現ソ連領）反乱軍と結託し、ゲリラ戦を敢行するなどの事があったが、激しい戦闘にトルコ軍は勝利を収め、トルコ共和国の建設へと進んだのであった。

考えてみると東西の接点であるトルコは、地理的には世界的な戦略要地であると共に、宗教的にも対立の接点を形成し、当時としては中立は至難な事であったであろう。ミサイルや航空機の発達した今日に於ても、其の価値は低下したものの依然として戦略要地には変化はないと推察する。又、トルコとギリシア、トルコとソ連の反目思想は、以上の歴史の経過からも窺い知ることが出来るようだ。

イスタンブール～イズミール

文明の宝庫、イスタンブールに着いた我々は、明眸皓齒のガイド嬢に案内されてイズミール行の飛行機をまった。行きずりの日本人に愛嬌をふりまくトルコ人は、取り分け日本人には好意的である。

これからの興味津々の歴史と文化と自然の旅に強い刺激と躍動感を与えていた。

14・00に浮揚した搭乗機はイスタンブールの上空を旋回し、無数に聳えるミナレット（尖塔）から、コーランの声が響くようで、恰も故里を眺めている感じがしている。

機は対岸アジア側のアナトリア（トルコ語はアナドル）の海岸線に沿って南下した。帯びのような白い航跡を残す小舟は、真昼の陽を受けて澎湃としたマルマラ海を航行し、漣の波打ち際はくっきりと陸と海に線を引き、海岸美もまた古都の歴史を漂わせている。

岸辺から陸地に広がる朱色の建物までもギリシアの白色に対抗し、文明の奔流した真っ青なマルキア海は波立たず、嘗ての榮華を誇るように静まりかえっていた。

文明は多民族の往来が激しい所に発生し、歴史は文明の成立条件としてきたが、俯瞰する東西の接点トルコ海峡は特に文明の十字路であり、此の上は再び文明の竜巻が起らんことを願うばかりだ。

搭乗機はサンキスト（太陽がキスをしているように輝く様）されながら、第一の訪問地のイズミールへと鵬翼を向けた。白色のミナレットも朱色の家も紺碧の海面も、降り注ぐ陽の光の粒子にきらめき、渚の織りなす波は一段と美観を呈し、この燦爛な眺望は美女に出会ったような嬉しさだ。

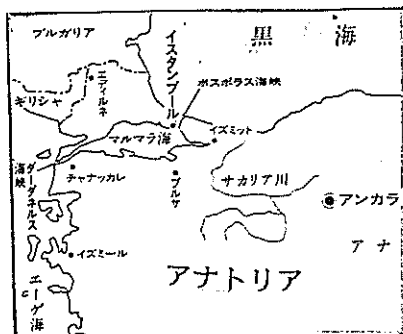
蜿蜒と見えているアナトリア高原、この高原一帯は第1次世界大戦後の独立戦争の際に、ギリシア軍との激戦が展開され、建国の英雄ケマル・パシャ（ケマル・アタチュルク）が悪戦苦闘の結果、ギリシアの上陸軍を撃破した古戦場だ。

軍籍に身を置いていた私は其の戦史を想起しながら、固唾をのんで地形を瞰下し、共に敗戦を経験した者として感慨深く回顧していた。

飛行すること約40分、トルコ第3の大都市（人口300万）イズミール（旧名はスミルナ）に着陸。ペルガモン観光からトルコ古代史探訪の旅が始まることになった。

イズミール

イズミールは古代ギリシアの植民市として古くから小アジアの重要な海港であった。前4世紀アレキサンダー大王の部将によって新市が建設され、以後、前1世紀のローマ知事による略奪、2世紀の震災などによって一時破壊されたが、ローマ時代を通じて繁栄し、キリスト教の重要な根



拠地となった。

ローマ帝国没落後は次第に衰微し、11世紀以降のトルコの侵入、15世紀の蒙古の侵略などで町は荒廃した。同世紀にこの地はトルコの支配下に入り、以後、小アジアの最も繁栄した商港として続いた。

第1次世界大戦後の1919年5月、ギリシア軍は此の町を占領し、翌年の条約では同市が5年間、ギリシアの統治下に置かれ、のち人民投票によって帰属を定めることを規定した。

ここから愈々ケマル・パシャ（以後ケマルと略す）の活躍の舞台となる。

ギリシアとの独立戦争経過

ケマルは1919年5月5日、トルコの東部第9軍の監察官に任命されると、トルコの降伏後の武器弾薬を管理した。そして6ヶ師団を指揮し抵抗運動の先頭に立った。

ケマルはギリシア軍のイズミール上陸数日後、黒海沿岸のサムスン（次頁図参照）で、ギリシア系住民のトルコ人大虐殺の数々を聞かされた。

それは「ポントスギリシア共和国」という妙な名の国家樹立を既成事実とするため、トルコ住民を追い払おうとするギリシア系住民の組織活動で、虐待をもって威嚇する暴挙であった。

ケマルはトルコ国民を、この国始まって以来の暗黒の日から救出するのだと決意する。彼は直ちに政府首脳（未だコンスタンチノーブルにあったオスマントルコ政府）の無能を批判し、軍・民の地方指導者たちに抵抗運動の檄文を飛ばした。

元閣僚をはじめ有力な同志が続々と結集してきた。そして「母国の統一と国家の独立は今や危機に瀕している。政府はこの危機に対処する能力を有していない」で始まる7項目を宣言すると、旧軍将官たちの支持の反響が相次いだ。

その頃、大ギリシアの復興を夢見るギリシア軍は、英米仏艦隊に満載されてイズミールに上陸した（1919、5、14）。たちまち教会の鐘は鳴り響き、ギリシア系市民が集って兵士を笑顔で迎えた。ギリシア系過激分子たちによって暴力虐殺が吹き荒れ、トルコ市民は大規模な迫害を被った。

ギリシア軍は内陸に進軍を開始し、連合国側が予定していた停止線をとうに突破した。露骨な親ギリシア政治家であったロイド・ジョージは、イギリス下院で声高らかに演説した。「勝利の後、ギリシアは和平条約に拘束されず、さらに多くを得なければならない」と。これは有名な話である。

ギリシア軍はアナトリアの奥深く侵入を続けていた。そして何回かの会戦でギリシア軍はトルコ軍を破り、ブルサ（次頁図参照、マルマラ海沿岸）を陥落させ、アンカラを攻略しようとしていた。

ここでトルコの新生独立の戦争過程の中で、最大の対ギリシア戦が展開されるのであった。

ギリシア軍は条約で認められた停止線を越えて進出を続け、アンカラは恐慌状態に陥った。しかし、ここにキュタレヤで会戦が起り、トルコ軍は初めて勝利を博した。ギリシア軍はブルサ方面に退却したが、トルコ軍は勝利につづく追撃戦を敢行する戦力が残されていなかった。その後ギリシア軍は再び攻勢に転じたが、トルコ軍は再度

の勝利を収めた。しかし、トルコ国民軍は資金も武器も不足し、ギリシア軍の装備と動員力に及ばなかった。

(この時点でのトルコ軍は4万5千、ギリシア軍は11万であった)

続いてギリシア軍の新たな大反攻が始まった。彼の有名な「サカリヤ川の決戦」(右図)である。

ケマルはギリシア軍の大攻勢に備えて、アンカラの前面まで撤退して、防禦線を敷いたのである。

ケマルは叫んだ。「防衛線というものはない。防衛する国土があるだけだ。私は諸君に死を命ずる」と。

こうして人も物も総てが「サカリヤ川」戦線に集中された。トルコ国民は男も女も老人も子供も、侵略者に対する怒りの火の玉となって英雄的な行動をとった。そして資財も弾薬も食糧もガソリンも、すべて老人や子供の手で運搬された。

1921年8月23日、ギリシア軍の大攻撃が開始され、史上で最も烈しい戦闘の一つが始まった。遠雷に似た砲声の響きはアンカラまで聞こえた。ギリシア軍はアンカラ西方40キロまで迫り、11日間の猛攻がつづいた。

トルコ軍もギリシア軍も共に戦闘力は限界に達し、補給線と連絡線の延長がギリシア軍にとって不利となり、次第に弾薬も不足し始めたのであった。そしてトルコ軍の反攻の一部が成功した。

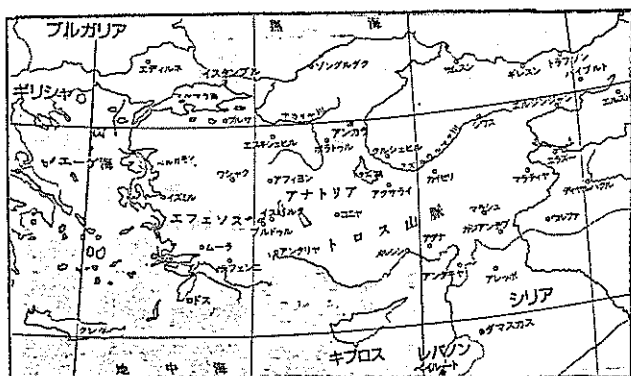
ケマルはたちまち敵の弱点を感知した。ギリシア軍は不幸にして軍事的天才と対決したのである。ケマルは敵の弱点に集中攻撃を命じて勝機をつかみ、9月13日、ギリシア軍は遂に総退却を開始した。

22日間にも及ぶ激しい戦闘の結果、トルコ軍は大勝利を獲得し新生トルコは救出された。アンカラの市民はケマルの凱旋を大歓迎で称賛し、彼は名誉あるガーズイ(信仰戦士)の尊称と元帥の称号を贈られた。これは、トルコを亡国の淵から救ってくれた英雄に対する感謝の表明である。

以上のように戦闘経過の粗筋を記したが、戦闘の発端はギリシア軍のイズミール上陸であった。そのためにイズミールの街に第一步を印した私は、簡単ながら此の戦史の一端を、記述しなければならない心境になったのである。

熱烈な愛国心に燃えるトルコ国民の偉大さも亦、忘れてはならない。彼等は祖国の破滅を前にして、ケマルの指導の下に結団して雄々しくも母国を救った。その不退転の意志と抵抗の歴史に私は感嘆せざるを得ないのである。

先にトルコ国民の反ソの歴史の一部を記したが、ギリシアに対する悪感情も未だに強烈である。キプロス島に於けるギリシアとの戦い、或はNATOの参加問題にしても、過去の長い歴史に起因する深い因縁があるようだ。



イズミール～ベルガモ

エーゲ海のマルマラ海に臨むイズミールの海岸通り、その街並みは眼を驚かささんばかりの美しさだ。

(右は華麗な海岸通りの一部)

イスタンブールと並び称される貿易港。ここから南仏、イタリア、エジプト、ギリシアへの客船も就航し、多くの船舶の浮かぶ海は絵葉書のような景観だ。その向うに見える小島は高級別荘地であった。

海軍の艦艇やドックが彼方に遠望された。トルコ地中海艦隊司令部も設置されている関係から、威風堂々たる威圧感が伝わってくる。しかもNATOの空軍基地もあって、潮騒の中に商都と軍都の空気が漂い、観光の中心都市として活気を呈している。

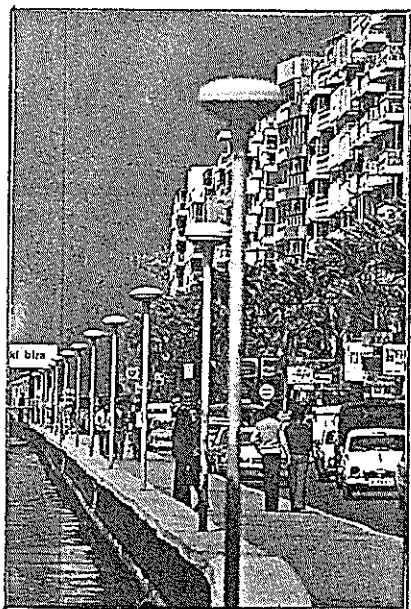
「イリアス」や「オデッセイア」の作者として知られているギリシアの詩聖「ホメロス」(前800年頃の人)の生誕地でもあり、スミルナ(イズミールの別称)の名で聖書にも記されている古都だ。嘗てのペルシアやローマ、そして東ローマの植民市や属領であり、アラブ人や十字軍の通路となったばかりか、前記したようにギリシア軍によって徹底的に破壊された都市である。

街には古代の遺跡や歴史的な建造物は残されていないが、近代になって大発展を遂げた市街だけあって華麗な感じが漲っている。美しい海の恵みも未だに嘗ての栄華を思わせ、旅情豊かなベルガモへの心を弾ませていた。

成田出発の遅延した荒々しい空気もおさまり、今鳴いた鳥がもう笑っているような雰囲気だ。同気相求む一行の人達は「遠きは花の香り」だと、アジアの西端の海岸線を楽しみながら北上した。

オリーブ林の濃い緑が眼にしみる地中海。我が国では見られない自然の観察は旅心を高揚させ、身も心も一回り大きくなった気分になって行く。

何時も旺盛な好奇心を失ってはならないのだ。それが若さを保つ秘訣だと考えているうちに、イズミール北方100キロ、人口3万の小さな都市ベルガモが見えて来た。ベルガモはトルコ語ではベルガマ、古代名はペルガモンと言う。以後、古代史探訪の旅に相応しく古代の「ペルガモン」の名で記載する。



ペルガモン王国栄華の跡

ペルガモンの丘が軍艦の船体のように大きく見えている。周囲を睥睨している城砦の量塊は空を透かし、栄華の跡を遺していた。ヘレニズム時代(後記)には、更に其の上に壮大なペルガモン王国のアクロポリス(城壁で囲まれた丘の上の城砦都市)が築かれていたのである。

(ヘレニズム時代とは、アレキサンダー大王以降、ローマが地中海を統一するまでの約300年間、ギリシア風文化時代を言う)

この丘の上にはヘレニズム時代以前にも、地方有力者による城塞都市が築かれていたというが、前3世紀中期から此処を首都としたアッタロス家の王国があった。



これが生まれ変わったのは、アレキサンダー大王(356~328BC)の死によって、部将たちが広大な領土を分割支配したことに端を発している。

部将の一人リュシマコスが王家の財貨とともにアナトリアを所有するに当たり、居城を防禦施設の備わっていたペルガモンに定めた。しかし、リュシマコスは後継者争いのために倒れ、この財貨と居城は臣下のフィレタイロスの手に帰した。これが事実上のペルガモン王国の興りと言えるだろう。

フィレタイロスの後はエウメネス1世、アッタロス1世が即位して、ペルガモン王国の版図を徐々に広げて行った。特にアッタロス1世の功績には大きなものがある。即ちガリア人(欧州からアジアに進出してきた民族)を破り、セレウコス朝を牽制して内陸まで領土を拡大し、アナトリアの一大強国を築き上げた。

そして次ぎのエウメネス2世の時代(197~159BC)にペルガモン王国は、その最盛期を迎えた。

この時代、即ち紀元前2世紀の後半はローマとの関係が密接となり、両国は相補い合う形で発展を重ねた。まもなく、ペルガモン王国の首都は上、中、下の各都市も完全に整備され、ヘレニズム時代を通じて最大なアクロポリスと、最も多くの建物を誇る大都市となった。

また、文化芸術の面においても世界の一大中心地となり、その総合性ではエジプトのアレクサンドリアを凌ぐほどであったと言う。「瀕死のガリア人」や「自殺するガリア人」などのアテナ(ギリシアの神)神域の記念群像は、既に名声が世界に高まっていたのである。上の写真は「瀕死のガリア人」

アクロポリス (遺跡はアクロポリスとアクレピオンに分かれている)

麓で下車した一行は、ガイドの後をアクロポリスの丘に向かって蟻の行列のように登った。悠久の歴史を寂しく遺す無残な瓦礫、天空に透かす崩れた城壁、その一角の望楼だけが鶏群の一鶴のように聳えている。

一方、眼を下に移すとペルガモンの街は刻々と低くなり、アナトリアの丘陵やペルガモン平野も視野に入ってきた。

城砦の丘に立って見渡すと、恐れるものはなく物事が思い通りに運んだ昔の「上を見ぬ鷲」の感じがしていた。血で血を洗う闘争の結果、多くの人の命を奪った者が勝利の神となり、膨大な遺跡は白骨の上に威容を誇っているように思えてくる。これも

偏に激戦を体験した者の^{ヒガ}の僻みであろうか。

このペルガモン王国を構成した民族は、数的にはギリシア人よりも原住民の小アジア人が多く、社会構造的にも基礎となったものは王領で、耕作する隷農の苦勞が察せられる。このことは古今東西を問わず歴史が物語り、我々現代の自由は何にも優るものである。(右図はペルガモン全図)

城砦の横に拡がるアクロポリスの神殿群(右中写真)や王宮跡は、アテネのパルテノン神殿よりも後期の建築だが、比較できないほど著しい破損である。

累々とした廃墟の中で感動を覚えることは、紀元前の時代にこれだけの大理石の大建築を成し遂げた人間の智慧であった。

図書館の跡も短く折れた石柱と無数の石屑を残すのみ。歴史的にも有名な図書館の跡形も判らない状態だ。王国時代のペルガモンは、学芸の中心をエジプトのアレキサンドリアと競ったほどで、文化水準の高かった都であった。当時の図書館はアレキサンドリアの図書館に劣らない蔵書20万冊を誇っていたと言う。

エジプトのプトレマイオ朝は此の図書館に嫉妬するあまり、特産品のパピルス(紙の原料の葦)の輸出を禁止したほどであった。これに対しペルガモンはパピルスの代用として羊皮を使うひとを發明した。この羊皮紙がヨーロッパ中世を通じて広く代用されたという。

アクロポリスの一角にある彼の有名な「ゼウス大祭壇」(右下の写真)に案内された。現在は大祭壇の基段を寂しく遺すのみ。そこに生えた3本の松の木が過ぎ去った時間の長さを物語っていた。

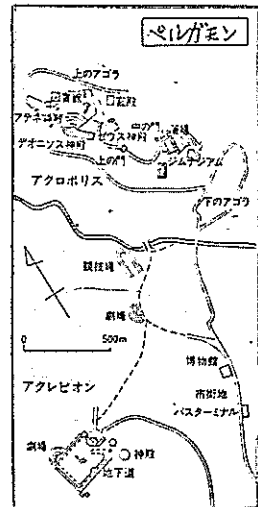
この3本の松が何かしら妙にゼウス大祭壇を孤立させており、榮華を極めたペルガモンのアクロポリスも、「創業は易く守成は難し」の標本のような感じであった。

ゼウス大祭壇はペルガモンの最も繁榮したエウメネス2世時代に、ガリア人との戦いの勝利を記念して築いたものである。「悪魔の位」と言うのは、ヘレニズム時代に隆盛を誇ったペルガモン王国の、アクロポリスに建っていたゼウス大祭壇のことで、ヨハネの黙示録中にも述べられている。

供物台を平面にして柱廊で囲んだ祭壇の規模は、幅約36m、奥行き約34mと云われ、祭壇としては前代未聞の大きさである。

この祭壇が古代から名高かった理由は規模の壮大さからでなく、むしろ其の胸壁に施された浮き彫りの群像であった。それは高さ2・3m、総延長が120mにも達したという圧倒的なものだったのである。

発掘された浮き彫りは現在、東ベルリンの博物館に収められ、先日のNHKテレビでも放映されていた。そこでは大きな室にゼウス大祭壇の前半部が、ほぼ創建当初の



形で再建されていた。

浮き彫りの主題は、オリュンポス（ギリシア神話の神々の居所）の神々と巨人族との戦闘で、その有様は凄まじい。

下半身が蛇の形をしたり、獅子頭を持った怪人の姿で現われている巨人族は、おそらくガリア人などの化身で、オリュンポスの神々の姿は、彼等を打ち破ったペルガモンの人々であろう。

世は無常の何物でもない。最盛期を誇った王国は後のアッタロス3世が死ぬ直前に、王国をローマに寄進する旨の遺言を残し、前133年、ペルガモンはローマのアジア県の一部となった。それはローマの世界的進出を決定づけた出来事でもあった。

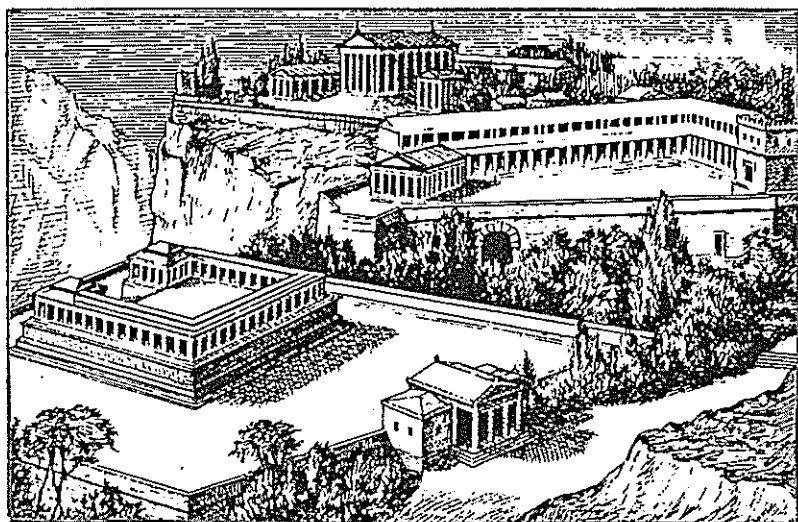
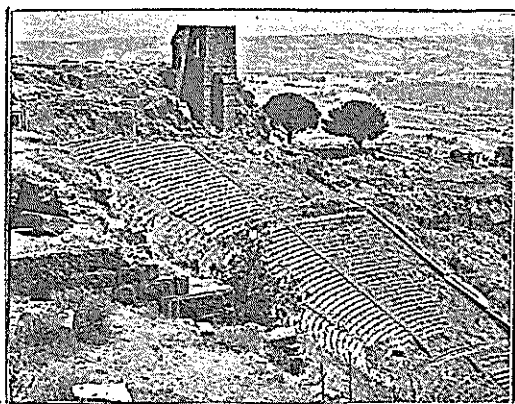
永劫の連鎖の中で生まれ育まれ、泡が微粒子のような眩きの中に一石を投じて消えて行くのが歴史だと、感慨深く次ぎの大円形劇場へと進んだ。

丘の起伏をうまく生かしたアクロポリスの急斜面に広がる空間、その円形劇場の垂直高度は38mもある。観客数は2万人以上、それに246mの劇場テラスである。しかも見下ろす方向にアクレピオンが遠望できる。（上の写真は劇場とゼウス大祭壇）

高い劇場の丘の上に立った爽快感は、生きていることに喜びを与えていた。しかし、「亢海在悔」即ち、勢い盛んなものがやがて転落の道をたどり、悔いを残す運命にあるもの、遺跡の姿も人生の認識と全く同じであった。

「聞くは法楽、見るも法楽」というか、見るもの聞くもの全部無料だと駆けずり廻り、つきたての餅のように珍しいものを物色しながらバスに乗車した。

下図はアクロポリスの予想図で（前頁の要図参照）、上の方は神殿群と宮殿と図書館、下の方はゼウス大祭壇である。



アクレピオン (15頁地図参照)

過去の人間は非常に苦しい時代に生きながら偉大なものを残し、随分といろいろな時代を過ごして生きてきた。我々はそうした人類の子孫である。だから我々の目標は我々に与えられた運命を、人間らしく生かすことが人間らしさではないだろうか。

この考え方は楽天主家かも知れない。このようなことを考えながら、神々が今もなお鎮座するように見えるアクロポリスの丘を去り、約1・5キロほど南にあるアクレピオンに向かった。

西暦1世紀から2世紀にかけてペルガモンは再び以前の隆盛を取り戻し、人口12万の大都市になったと云われている。そして今から訪れるアクレピオンが其の繁栄の立役者となったと言えるだろう。

このアクレピオンは神殿であると同時に、医神アクレピオンの神域である。人々は病気の治癒祈願の参拝をして、併設されていた円形劇場や図書館などで暫しの時を楽しんだのであろう。

折れた列柱の残った石畳の参道を通り抜けると、高い煉瓦塼と石柱の立った医療センターの跡があった。そこは診察室が連続して設けられていたような感じだが、入院は出来なかったらしい。

中庭には医療施設の跡があり、医療を教えた教室の跡も残り、創意工夫に満ち満ちた遺跡は驚嘆の至りである。

折れた短い大理石に蛇のレリーフが刻まれている。ガイドの説明によると、蛇が毒を入れて患者に飲ませたという伝説があるそうだ。毒をもって毒を制するという医療法であろうか。詳しいことは判らないにしても、当時としては最高の技術だと信じたい。

医療に欠かせない水は45キロも遠方から導水したらしく、センターの各所に井戸が見えていた。たくましい想像力を働かせてみると、消え去った文明の王や人民の心に触れることが出来る。多分、王は「民を貴しとなす」或は「民を視ること子の如し」といった善政を施したのであろう。(右は石柱の蛇のレリーフ)

センターを出て完全な姿を遺す円形劇場に立ち寄り、地下に設けられた地下道を通して神殿跡へと進んだ。地下道は暑い夏季に涼を求める為の施設だろうか。これだけでも素晴らしい遺跡だと云わなければならない。

王国隆盛の陰には「埋れ木に花が咲く」ような黙々と働く陰の力が必要であり、このアクレピオンの仕事に従事した医療関係者の功績は、美しい大理石の建物以上だ。最大の賞賛を贈りたい心で眺めていた。

私は今まで、帝国や王国は収奪の機構であり、掠奪と建設の文明だと考えていたが、他の追従を許さない此の機構と思い遣いを拝観して、これまでの考え方を一部修正しなければならないようであった。



ベルガモ〜イズミール (帰路)

いつしかバスは帰路に就いて、松とオリーブの街道をイズミールに向かって蔦進した。頭にまでコンタクトレンズを入れなければならない年輩となり、記憶力と想像性が極端に衰えた私は、早速、メモを整理していた。

「物盛んなれば則ち衰う」ことは人間社会の真理であり、強大な富と力や偉大な文化を誇ったベルガモンの現実と歴史を回顧し、古い木に花を咲かせる方法はないかと思案するものの、それは白昼に夢をみるに等しいとの結論であった。

何の努力もしないで運が良くなるはずもなく、「開いた口に牡丹餅」のように世の中は甘くない。このようなことを頭に浮かべて車窓に眼をやると、既に陽はとっぴりと暮れて闇が迫り、バスのリズムに誘われて眠気がしていた。

紺碧の海原も暮色に包まれ、夜目にイズミールの灯が眼に映ってきた。華麗に見えた昼の街は街燈が少なく、ネオンさえ一つも見えない暗い街は鬼気さえ感じる。電力の節約が徹底しているトルコ、日本の贅沢な電力使用は度を超しているというべきだ。

今日はアラビアのジェットタの夜明けに始まり、イスタンブール〜イズミールと飛行してベルガモンの観光と続き、三面六臂の活躍をしたような強行軍であった。

疲労を覚えながらも命の洗濯をするように、浮かれ気分でレストランの夕食に舌を満足させ、潮騒から離れたホテルで旅装を解いた。

4月16日

(月)

イズミール〜エフェソス

宿泊したイズミールのバルコ・ホテルは、背後に緑の丘が重なり合う閑静な佇いで、前庭に咲く小さな花は絨毯を敷きつめたらうに華麗そのもの、健康的で明るい環境であった。

朝食前の一時、朝の清々しい空気を胸の底まで吸い込んで散歩した。前に見えるドーム型屋根の円形プールは銀色に陽を照り返し、附近一帯には爽やかさが溢れていた。

バスの進むエフェソス遺跡、そこはローマ以上の古代世界を代表する大都市、今次紀行の圧巻だと心を躍動させながら、南方75キロの古跡へと疾走する。

行き来するトルコの人達は多種多様の顔付をしており、どれが純粋なトルコ人かさっぱり判らない。典型的な金髪碧眼、長身長頭の北方人種は流石に少ないようだ。それでも中には金髪の白肌の娘や、天使のように美しい顔立ちの少年も見かける。地中海人種、バルカン人種らしい者もおれば、アラブの血の混じった眼光炯々とした人など、混合モザイク人種の感じは免れない。

ラテン文字の看板に興味ひかれて一步郊外を走ると、スラム街が重なりあって建っていた。トルコの経済状態は知る由もないが、電力節約状態やドイツへの出稼ぎ云々から判断すれば、決して裕福とは思われない。

一方、花の栽培は盛んだ。木骨をビニールで覆った簡素なフレームが数多く見えていた。オリーブや柑橘類の果樹園が埋め尽くす景観は地中海らしく、中に混じった松の並木道は日本人好みである。

近づいて来たエフェソス。それはギリシア名で、トルコ名はエフェスと言われる。

古代の大都市は現在、人口1万程度のセルチュック村の一部に過ぎない。

往時、肥沃な平野を形成したマイアンドロス川（今のメネンデレス川）は、沃野の収穫から大都市を養った一方、流路が曲がりくねり、運ばれた土砂が堆積して海岸線は少しずつ後退した。

其の昔、アイアンドロス河口にプリネエという港町があり、正真正銘のイオニオ人（古代ギリシア人の一つ）の町があった。ギリシアの詩人ホメロスも此の町で英雄叙事詩を吟じたという。

しかし、マイアンドロス川は屢々氾濫をおこし、プリネエの町民は其の地を捨てて、マイアンドロス川を見下ろす丘の上に移住した。その間も川は絶え間なく土砂を運びつづけ、紀元前1世紀の中頃（ローマが帝国になった頃）に、プリネエ町民は孤立した町を再び捨ててエフェソスに移動した。プリネエの美しい町は都市構造を残したまま、地下に沈んでしまっている。

今、私等が訪れようとしているエフェソスは、謂わば新しいプリネエの町である。海岸線は13キロも離れた遠い所となって全く眼に写らず、網膜に映るのは青空と遠くの丘陵だけで、眼下にはマイアンドロスの平野のみが広がっている。

エフェソスの歴史の概要

エフェソスは、ヘレニズム時代（14頁参照）からローマ時代に栄えた古代都市の遺跡として、トルコ最大の見所となっている。

エフェソスは前記のように明らかではないが、紀元前11世紀頃イオニオ人（古代ギリシア人の一つ）が住み着いて都市を造ったもので、伝説によるとアテナイ王（アテネ王）アンドロクロスの指導によって建設されたと云う。

この都市の有名なアルテミスの神殿は、もとアナトリア（小アジア）固有の女神信仰にもとづくものであった。前6世紀、キンメル人やリュディアの侵入に対抗したが征服され、やがてペルシアの支配に服した。

ペルシア戦争（前5～6世紀。ペルシアの侵入に対するギリシア諸都市の防衛戦争）でペルシアから開放されると、ペロポネソス戦争（前431～404。ギリシア相互の戦争）の中期、前415年ころアテナイ（アテネ）から離反した。

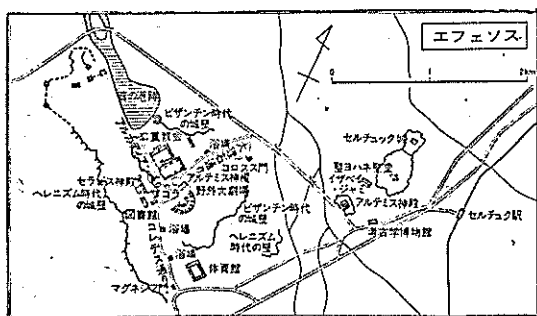
前356年、ヘロストラトスが名を後世に遺すため、焼き払われていたアルテミス（ギリシア神話の12神の1人）神殿を再建した。そして前334年、アレキサンダー大王に征服されて、前133年にローマの支配下に入った。その間に人口も増加して都市も大きくなり、ローマ帝国の属州であるアジアの主要都市となった。

アルテミスの神殿は古代7不思議の1つに数えられている。ローマ帝政期に入るとパウロ（キリスト教の伝導者。小アジア出身）が此处を訪れて教会を建て、キリスト教史上重要な意味を持つようになった。パウロの「エペ書」は此の地の教会宛てに送られた書簡である。

3世紀にゴート人（ゲルマンの1つ）によって破壊を被った。またキリスト教社会になると周辺都市と同様に、ギリシア神殿は悉く異教徒の神殿として放棄され、一部では新しく設立されるキリスト教会のための石切場となった。復興後の431年にはキリスト教の公会議（司教会議）が開かれている。

やがて没落して15世紀には寒村となり、19世紀後半の発掘によって初めて古代遺跡が明らかになった。

前6世紀の哲学者ヘラクレイトスは、この地の出身である。(前544～483のギリシア人。永遠に生きる火を根源と成し、生成流転がその真相であり、矛盾・対立はその契機であると説き、弁償法の萌芽を示した人物)

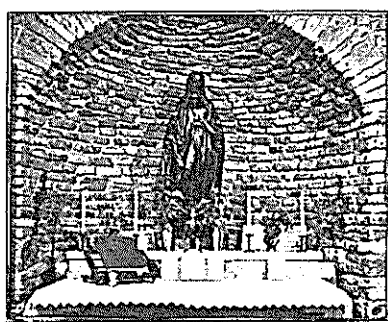


白い大理石のエフェソス遺跡 (場所は12頁地図参照)

曲がりくねった松林の中の急坂を登り、エフェソスの旧門の跡を通過した。世界から訪れた観光バスが駐車場を埋め尽くして割り込む余地もない。ペルガモンと異なって商店が軒を連ね、客を呼び込む声は合戦場のような騒々しさだ。東西文明の接点トルコ最大の遺跡らしい雰囲気は溢れている。

直ぐ前の道端に柄をつけた円形型の斎戒沐浴の跡があった。更衣場とみられる煉瓦造りの壁も見え、人々の信仰を集めた神域らしく身を引き締めさせている。「尊い寺は門から」と云われる通り、神域は初めから人の心を敬虔にさせなければならない。

その奥にある丘の中腹に煉瓦造りの「聖ヨハネ聖堂」が建ち、静寂の木立の中に重々しく見えている。堂前の狭い広場では、神を称え神の恩恵を祈願するミサが厳粛に行われていた。我々は襟を正して聖堂の中に静々と入ると、右の写真のヨハネ像が安置され、異教徒の我々も頭を垂れながら小さな聖堂を一巡した。



聖ヨハネはキリストの死後この地へ来て、キリストの生涯と教えをヨハネ福音書に書き、この地で死んでいる。そして彼の墓の上に教会が建立されてキリスト教の聖所となったのである。

今日廃虚としか見られない教会は、後にユスチニアヌス帝と妻のテオドラが建てたもので、石積み迫害の門の所々に使われている石は、古代神殿の石柱を切って使ったものらしい。

エフェソスはローマ時代を通じて、アナトリアでは最も豊かで安全な都市であった。港は「巣に出入りする蜜蜂」のように大小の船舶が出入港を繰り返す、市場は各地の物資の集散地の様相を呈していた。

ギリシア人もユダヤ人も此処では自由都市の中の1市民に過ぎなかった。だからこそ、聖パウロもこの町に2年間も滞在して、天幕を張る仕事をしながら布教を続ける事が出来たのである。

聖ヨハネ聖堂の下にある石垣に設けられた3つの水道は、頭が良くなり、子供が多く生まれ、健康になると言う謂れがあるそうだ。「信は力なり」と一行の人達は順を

追って蛇口に唇を運んだ。この水道のことは、ヨハネの黙示録に述べられている7つの教会の中の、エフェソスの個所に記載されているという。水道の御利益に期待しながらバスに乗車した。

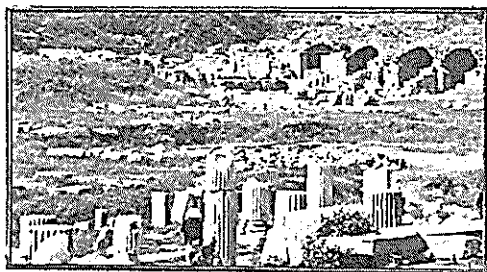
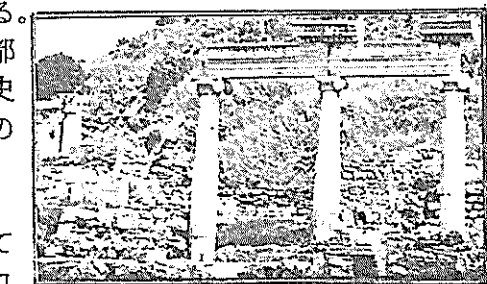
丘と丘を連ねた城壁の跡が各所に遺っている。一方、石山に生えた松林の隙間から大平野が眼に映って来た。これは前記したように、河川が次第に土砂で埋まって街が山手に後退し、前4世紀から栄えた貿易港も今では沃野と化している。

丘を越えたバスは停車して徒歩の見学となる。そこには古代世界を代表する大理石の白い大都市が眼前に展開していた。何世紀もの間、歴史が封印されていたように、硬張ったままの石の街跡が無気味に静まり返っている。

先ず最初に案内されたアゴラ（広場・市場）は、生活物資ばかりでなく人身売買（主としてエジプト人）まで行われていたと言うから、ローマ時代は迫害の時代であったのであろうか。遺跡の中に転がっている小さな石塊の一つ一つが、古代人の生と死の世界の出現であり、当時の世界を想像させていた。

オリオン会議場（右上の写真）の列柱の跡を通り、脳細胞が間断なく刺激される中を、アルテミス神殿跡の見学に移行した。

エフェソスはギリシア世界では、最初に大きなイオニオ式神殿（ギリシア式）が建てられた所であった。イオニオ式建築は人類の残した数々の文化遺産の中で、最も際立った光彩を放っており、エフェソスに建てられた神殿は、その中でも抜きん出た存在だったと言われている。（右の写真はアルテミス神殿跡）



名にし負うアルテミス神殿は紀元前6世紀前半のものであった。全てに大理石を使って建築された神殿としても世界最初の記念碑的なもので、すらりとしたイオニオ式の高い石柱が127本も立ち並ぶ様相は、全く感銘深いものであったらしく、それはやがて世界の7不思議の1つに数えられた。（大きさは正面幅が55m、奥行き115mもあったと云う）

しかし歳月とは無常なもので、現在は其の面影を偲ぶ術もない。ただ、ごろごろと転がった石柱の破片を横にしているのみ。そして未だ悠久の歴史の発掘が続けられている。（この地一帯は海拔0mのために土壌が悪く、遅々として発掘が進まない）

「アルテミス」とはギリシア神話の12神の1人だが、本来は西部アジアの大母神であり自然生成力の権化であった。その後、ギリシア化して純潔な処女神とされ、普通は弓矢を持って獵犬を従えている。

このアルテミス神殿に安置されていたアルテミス神像は、オリュンボス（ギリシアの神の居所）の神々とはかなり異なった得意な形態をしている。それは現在エフェソス考古博物館に展示されているアルテミス神像（2体）を見れば明瞭だ。（後記する）

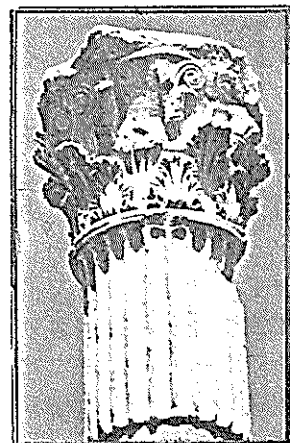
音に聞こえたアルテミスの古跡から、歴史の大転換がひしひしと肌に伝わっていた。しかし、満ちれば欠ける譬には勝てず、あたら神殿に痛惜の思いを残して離別した。

広大な地域の中では「耳から入って耳から抜ける」というか、眼で見たり写真だけでは到底記憶に残らず、地図を片手にガイドの説明をメモするのは忙しい。次々と広がる遺跡群、大アゴラも石ころ場に過ぎず、其の中で眼を引き付けたものは山積みになった導水管であった。（発掘したもの）

大都市の生活を支える水を、素焼きの土管を土に埋めて遠くから導水した文化の素晴らしさは、驚嘆するばかりであった。紀元前の高度な測量技術、測量士の免許を持つ私にとっては賞賛する言葉も知らない。

日々の生活が凡ての中心であったことは昔も今も変わらず、文化の根源は生活の中から生まれてくることも変わらない。即ち、人間の真価は日常の暮らしの中に正直に現われ、其の点から推察しても発達した文化の程度が窺える。

人々の好奇心をかき立てる石の地上絵巻は数え切れず、紀元前数世紀の歴史の跡を彷徨うような錯覚に陥りながら歩を速めた。柱頭に見事な彫刻のある遺跡が各所に散在し（右の写真）、2本の大石柱が立っている店舗の跡には、商店を象徴するような像が刻まれており、規模の大きさが想像できるのであった。



一行は遺跡の広大さと壮麗さに息をのみ、言葉をなくして眼は応接に暇がない状態だ。「ポリオの泉」の高い石の門は辛うじて立っているようで、泉だったと思われる低い石塊が中央に見えている。泉の周りの石段はおそらく人が休憩した場所のようで、井戸端会議をしていたことだろう。

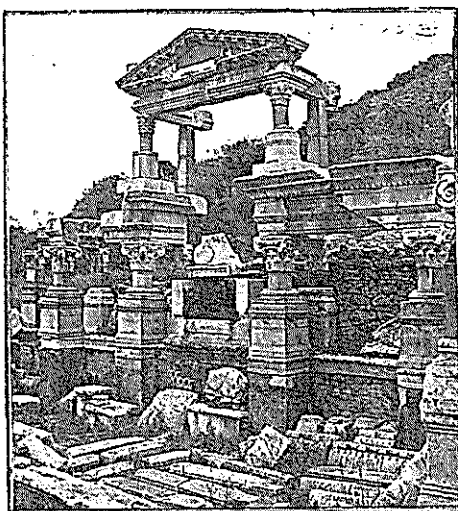
このポリオの泉は「トロイの戦争」（前1193～1184の間に行われたトロイの王子とギリシア軍の戦闘）後に、此処にやって来た人達が造ったもので、非常に古いものだ。

古人の足跡を回顧して往時を偲ぶ人は後を断たず、赤道直下のような熱い心を燃えながら続いて行くと、突如、興奮を駆り立てるコレテス通りの大理石通りが、延々と伸びていた。（20頁地図参照）

世界を瞠目させ度肝も抜くような大理石が、緩やかな下り坂に敷き詰められて、両側にも大理石の列柱や石像がぎっしりと並び、当時の国際道路の感じがしている。

高嶺の花の白大理石は栄光の歴史を彩り、古き良き時代の香りを匂わせて一段と我々に魅了を与えて、貴婦人の歩くような石畳の豪華さは筆舌では尽くし得ないものがあり、廃墟の中の最大な魅力の1つであった。

門構えが割合に良く保存されて遺っているのは、名高い「トラヤの泉」（右の写真）の道路に面した部分であった。



トラヤ「TROY」のギリシア名はトロヤ、英語ではトロイである。成田出発が遅延した為に訪れることの出来なかったトロイ遺跡と同じ名称で、再び悔しい思いが湧いて来た。

大理石のコレテス通りの一部の路面はモザイクを敷きつめ、道路の片側には商店街の廃屋の跡が続いていた。遠い昔の商店街の美化運動は我々に教訓を与えている。即ち「観る」ことは映すことではなく、無限に新しいものを発見することであり、観ることを直ちに想像に直結しなければならない。

其の通りには風呂屋街が軒を並べていた。サウナ風呂からコラシキ風呂（意味不明）などの家屋の壁は残っており、熱い室、ぬるい室、冷たい室など、念入りの設備は更衣室まで完備し、環境や衛生思想の発達した跡が見られる。

同じく通りに面して立っている大理石の人物像には、頭部の無いものが多い。（右の写真）それは王が代わる度に首を据え替えるためである。華麗な歴史を誇った黄金時代であっても、儉約する節約の考え方は見上げたものと云わなければならない。現代人も範としなければならない。

ハドリアヌス王の治政下（117～138）に建立された「ハドリアヌス神殿」は、泉の神を祠るレリーフを刻んだ石門がある。其の後方にも蛇の髪を持った「メドウサ」（ギリシア伝説に出てくる怪物で、見る人を石に化すと云われる）の彫刻があり、一際、異彩を放って鮮烈な印象を残した。それは豪華絢爛な匠の業と心意気の結集である。（右下はハドリアヌス神殿の門）

この遺跡のように我が全身の感覚を血眼にさせたものは珍しく、耐用年数がとくに切れた私も脇目もふらず、懸命になって頭の中に刻み込んだ。ハドリアヌスの素晴らしい構えだけが暫し私の心を奪っていた。

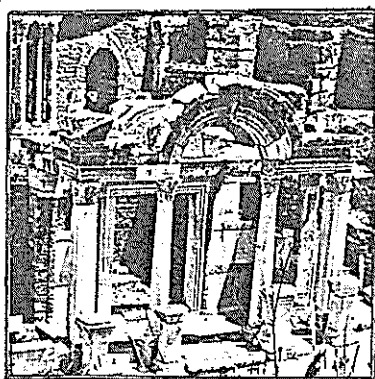
物珍しく往時の手洗い（トイレ）の跡までが遺っていた。清潔を重視した市民達はそれぞれ近くの共同便所を使用したのだ。高い文化の桃源郷を目標にした当時の為政者や市民の意識の高さは、戦前の我が国の生活状態や、現代中国と比較すると「日を同じくして語るべからず」であり、燈心と釣鐘ほどの差を感じる。

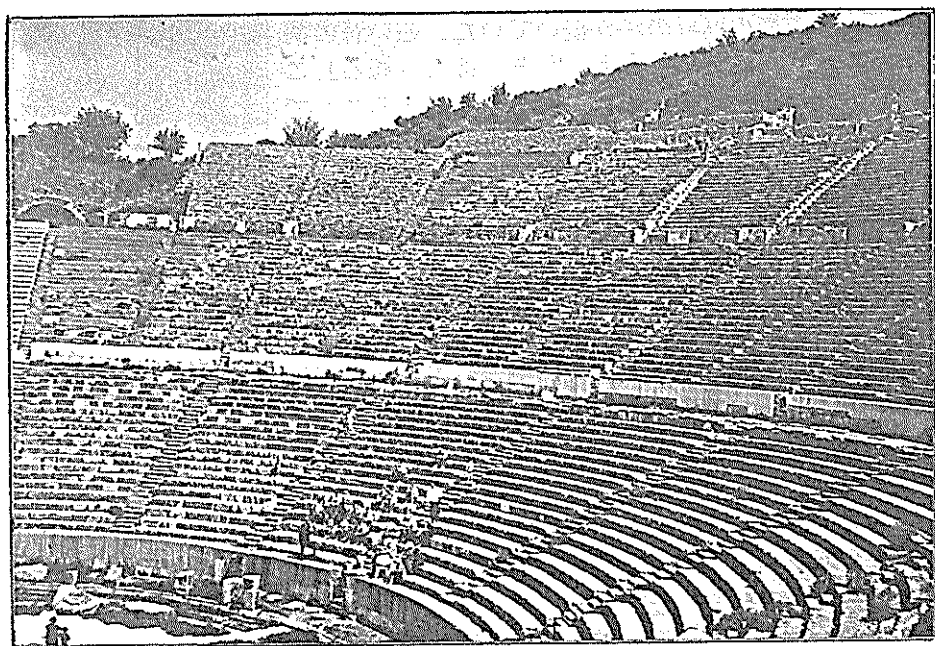
目のあたりに見えるエフェソスの蕩々呼とした広大さは、全身に疲労を感じさせて来た。遺跡の周囲が10キロにも及ぶというから、具に見学すれば1日は優にかかるだろう。

いよいよ大詰めを迎えた一行は喘ぎながら円形野外大劇場の上段に立った。収容人員2万4千人を誇る大遺構は、白大理石の優れた材質と良好な保存努力とに相俟って、見る者に感銘を与えずにおかない渺々たるものだ。（次頁に全景写真）

この円形大劇場は元来、ヘレニズム時代（14頁参照）に創建されたものを、エフェソスの最盛期の2世紀に改造修理されたもので、何かそこから旺盛な壮大なものが感じてくる。遠い祖先達が息づかい、恋をし、争った歴史を積み重ねているようだ。

爽快な気分浸って、集団催眠術にかかったように感嘆の声を囁み締めていた。今は崩壊してしまった舞台の壁越しに、アルカディアン通り（20頁地図参照）の大列





柱街の跡が延々と望遠できる。それは嘗ての古代港から円形劇場に通じる幅11m、長さ600mの目抜き通り、将に蜃気楼のように浮かんで見えていた。

アルカディアン街道の傍らには大浴場や体育館の跡が遺り、白大理石を敷きつめた大通りは、当時の外国の人達で大変な賑わいを呈していたことだろう。

又、丁字路になっている円形劇場の前に、大理石の大図書館が見上げるように聳えている（20頁地図参照）。威信にかけて造った壮重な建物は未だに頑丈な骨組みを残していた。それはスケールの大きさばかりでなく、実に幻想的な趣が漂い、心に染み込む建築美と芸術美は他を睥睨するように圧倒していた。（右は大図書館）

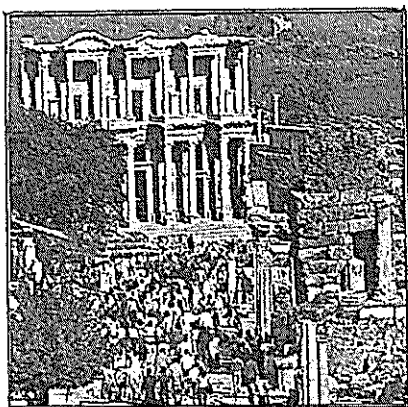
大図書館の階段下の石に墓穴があったのは不思議でならない。ガイドの説明もなく、恐らく図書館の功労者を記念して葬ったものと推察する。

最後に東北に伸びている大理石通りへと進んだ。（20頁地図参照）此处が最大の大通りで幅員も広く平坦な路面は一段と華麗であった。この通りを通らなくては、エフェソスを語るべからずと云わんばかりの夢街道であろう。

珍しく夢街道の敷石に足跡の彫刻が刻まれていた。これは遊廊や売春宿への道筋を示した印しであり、啞然とさせられてしまった。

性のことばかりは人間の本能であり、古今東西を問わず同じだと思うものの、王侯貴族の専用のように考えていた我々には、紀元前の世代に庶民相手の商売として成立していたのは驚きである。

バレンティンデーの発祥の地がエフェソスだと説明されたが、首肯ける話であった。



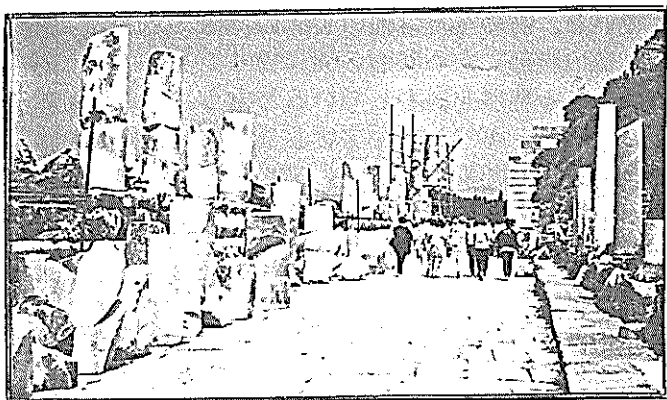
(右の写真は大理石通り)

応接に暇がないほど見事な大理石の数に眼を廻し、天から降ってきた仙人が壮麗な此の都市を建設したのではないかと、紛うばかりの偉大さは形容する言葉も知らない。

世界中を旅する人は計り知れないが、この遺跡の魅力は一度訪れただけでは飽き足らず、他の追従を許さない存在

であった。「栄華あれば必ず憔悴あり」、遺跡はもはや歴史が発展して行くものでなく、陰のように流転して行くものと思うと愛着と、はかなさを感じて来る。

遺跡は我々に何を語ったであろうか。それは、人間は無限の可能性を追求して行かなければならないと、音を沈めて語っていたのであった。



考古学博物館

(位置は20頁地図参照)

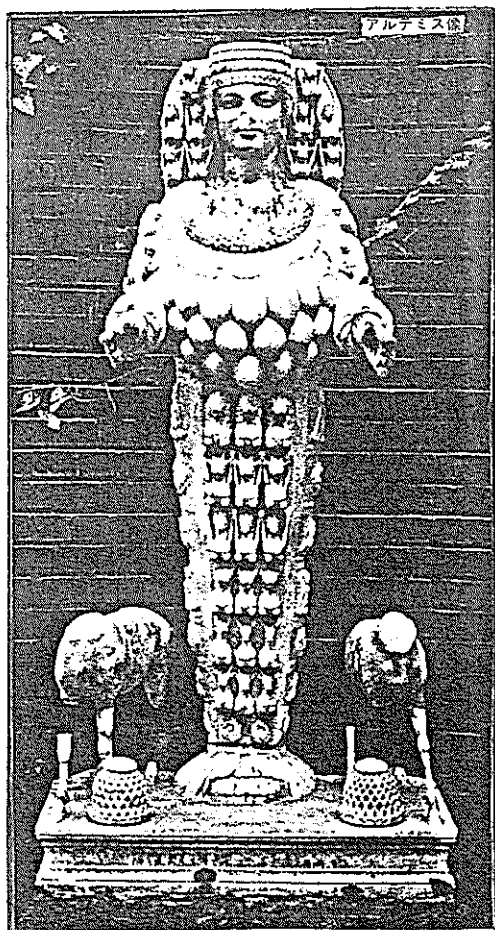
累々とした空恐ろしいほどの大理石、宝石のような石の都、私の才学では筆紙に書き尽くすことは到底できず、百聞は一見に如かずとしか言い様がない遺跡だった。

「正宗も焼き落ちれば釘の価」という日本の諺は見当違いで、この遺跡には当て嵌まるものではなく、全身の血が逆流するような驚嘆の連続であった。

エフェソス及び其の周辺から発掘されたものを展示した考古学博物館の参観となった。セルチュック城砦の黒い城壁が見渡せる博物館の圧巻は、アルテミス神殿に安置されていた2体のアルテミス神像であった。この神像はローマ時代のもので、右の写真は其の1体である。

この2体の神像は、アナトリアの母なる神キュベレーとの習合であると云われている(キュベレーは野獣を支配し、昆虫を統禦し、実りを司る神)。

アルテミス神像の衣服にも怪魔のほかに蜜蜂、花、従者の群像、それに古くからアナトリアの富と権力の象徴であった雄牛が



刻まれている。右の写真は他の1体の神像。

この神像の腹部にある卵形の突起物は、多産、豊穡の象徴である乳房を表わしていると言う。

一説によると、ギリシアやアナトリアの何処にも多数の乳房を持った女神はなく、アルテミス女神自身も処女であったと云うから、それは乳房でなく、卵の形をした装飾物だという。

参観する我々にとっては、乳房だとか卵だということは問題外で、神像の漂わせる神秘さが、この突起物に表現されていることだ。

2体のアルテミス女神像はエフェソスの繁栄を祈りながら見守り、掌を上に向けて永遠の寛容を示しながら、静かに立っていた。エフェソスはこの2体の神像によって世界に其の名を馳せたのである。

館内には数多くの彫刻やレリーフ、神殿の基礎石のほか、巨大な男根を持った姿まで彫刻したプリアパス像、或は伝説に基ずくイルカと少年の像などが展示されている。

聖母マリアやソクラテスも、此のエフェソスに棲んでいたとの説明を屢々聞かされたが、エフェソス遺跡や考古学博物館は天威というか靈威というか、人をして畏敬の念を起こさしめる威光が、天地の間に溢れていた。

この有数な有為転変の古代の歴史を知り、他に類を見ない白い大理石の遺跡を見学できたことに身の幸福を感じながら、エフェソスの観光が終了した。

何時までも記憶の何処かに留めて置きたいものである。



4月17日

(火) イズミール～アンカラ

古代ローマ時代を通じて最も繁栄し経済の中心の地位を保った都市は、ローマではなくエフェソスであった。又、世界最初に造られた大理石の神殿もエフェソスのアルテミス神殿である。この由緒ある遺跡を眼にした興奮に浮かれながら、イズミールを離れる朝を迎えた。

イズミール空港を7・50に離陸した頃の天候は小雨。今日はアンカラからカッパドキアまでの長距離コース。降雨と寒さが心配である。早速、厚着に衣替えをした。

9・10にアンカラ空港に降り立つと流石に肌寒い(標高約1000m)。今が頃合いだろうか、空港前の桃の木は満開の花に覆われ、松林も広がる景観は日本人趣向にぴったり。矢張りアジアであつた。小雨は以前として降り続け「雨は花の父母」、

一粒の種を万倍にするのも雨だと観念する。

アンカラは共和国の首都としての歴史は浅いが人口550万にまで発展し、歴史を繙けば3千年以上の歴史を誇る古都で、アナトリア高原の中心である。

アナトリア高原は紀元前1,900年から1,200年にかけて約700年に及んだ大帝国「ヒッタイト」があり、その首都はアンカラ東方にあった。

アンカラはギリシア、ローマ時代には、アンキラ（谷底とか山峡の意）、後世のペルシアやトルコの文献ではアングリヤーと呼んでいた。アンカラは昔から地下水が豊富な土地で、新石器時代から人間が住んでいた。古代に入ってもアナトリア高原の重要なオアシスとして「アングラ」という町が立っていた（アングラ兔の発祥地）。

「ペルシアの王の道」（右図参照）もアングラの外部の尾根づたいに築かれていたと云う。

紀元前3世紀に入ってガリア人（14頁参照）が侵入してくると、この地はガリア人とギリシア系民族とアナトリア系民族の共同統治地区となり、この形態がローマ時代を通じて継承されて行くようになった。

特にアウグストゥスがローマの初代皇帝に即位してからは、カエサル（英語ではシーザ）時代のような重税に苦しむこともなく繁栄を続け、ビザンチン時代の中期ころまで持ちこたえられた。現在アンカラ市にアウグストゥス神殿と浴場の跡が遺っているのも、この全盛期時代のものだ。

ビザンチン帝国の中期になるとアラブの侵攻に悩まされ、838年にはイスラム帝国の軍団によってアンカラは破壊されてしまった。

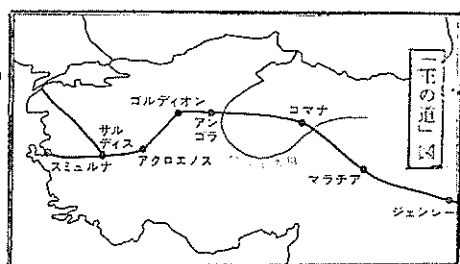
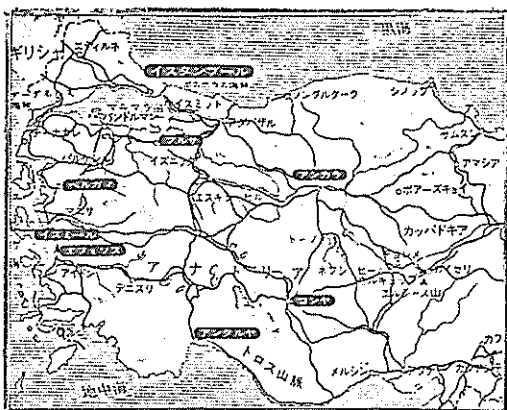
暫くして再興したこの都市は他のアナトリアの都市と同様、14世紀半ば過ぎにはオスマン・トルコの領土となり、一時蒙古に陥れられたが、蒙古が去ってからは再びオスマン・トルコの領域となった。

歴史の全時代を通じてアンカラが都市として重要な位置を占めていたことは事実で、それを支えたものがペルシア方面へのキャラバン隊の交通路であった。

しかし、このような性格の都市は歴史が証明しているように、交通が閑暇になると直ぐ寂れてしまう。アンカラが寂れて行く課程は、オスマン・トルコ帝国が衰えて行く課程と殆ど同じのようだ。

第1次大戦後の条約でトルコの支配権は、アンカラを中心とするアナトリア高原中央部だけと云う条件が提示された時、アンカラは目立たない小さな町となっていた。

空港から市街に向かったバスは新市街の官庁街を通して旧市内に入った。イスラム国家らしく数多くのミナレットが立ち、古い家屋の中に列柱やローマ風呂の遺跡が垣間見られる。僅か70年ほど前のアナトリア高原の1寒村に過ぎなかったと思えない町並みであった。



イズミールの風情と異なって人の顔にもアジア系やソ連系が混じり、地中海から内陸部に入ると昔の面影を残しているようだ。

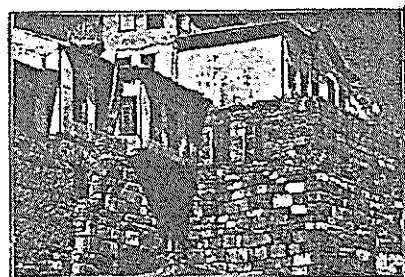
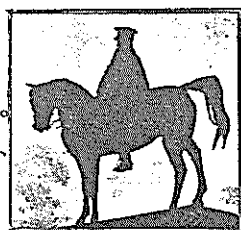
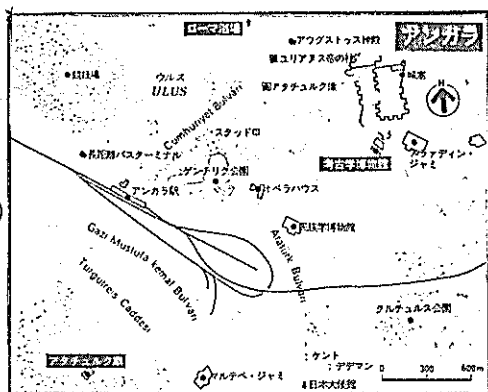
アウグストゥス・ローマ初代皇帝の神殿のある山手に進むと、街の中心部の十字路に乗馬姿のアタチュルク像が立っている。(右中)

山頂にあるビザンチンの城壁はセルジューク(1037~1157存続のトルコ族の王朝)時代に修復して、今も現存しているのが見えていた。

城壁に近づくにつれて迷路のような小路が多くなり、バラック風の家屋が建て込んで、これが首都の一面かと疑うほどだ。地方から出てきた人達が先ず住み着いたという感じで、中には城壁を利用して建てた家の多いことも驚きであった。

アナトリアの砂漠的風土に根を下ろしたトルコ人の興国の意気、土着的な民族的な街、この一面からトルコの貧困が窺える。懐古すれば彼等の祖先は中央アジアから流れ流れて、アナトリアに入ってきた遊牧の民なのだ。(右下は城壁利用の家屋)

其の彼等が遊牧の生活に見切りをつける事が出来たとでも言いたいように、貧しいながらも定着化している。アナトリア博物館は城塞下の貧困街の一角を占め、我々はこの博物館の見学となった。



アナトリア文明博物館

ビザンチン時代の城壁が残る丘の中腹に、世界に誇るアンカラ国立考古博物館が建っている。別名をヒッタイト博物館と言い、アナトリアから出土した遺物だけを展示している民族的考古博物館である。

ここは欧州の博物館のように掠奪品の殿堂ではなく、アナトリア文明の象徴でありアナトリア文化遺産の殿堂だ。その規模は大きくないが、博物館としての質の高さは数ある博物館の中でも折紙つきだという。

陳列されているものは、文明のあけぼの期の遺品からローマ時代の美術品まで、系統を立てて展示してある。この点も素晴らしく、流石であった。

正面入口を入った右手に原始時代、続いて新石器時代の遺品が並んでいる。「地母神」と呼ばれる塑像群や、アナトリア最古の原始共同体であった家屋の復元模型、彩色土器などが此の時代の代表である。

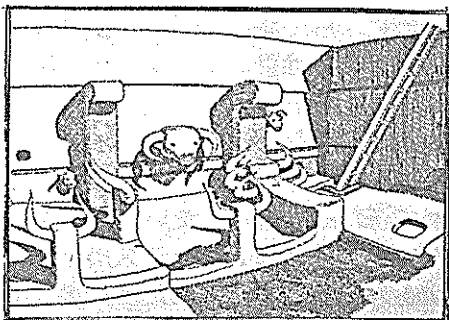
左に行くと金石併用時代の遺物が並び、続いて紀元前2千年代に栄えた初期青銅器時代の素晴らしい遺品の数々が展示されている。

その奥に紀元前1千年代の古代アッシリア(チグリス川中流域の古代オリエント帝国)の植民地時代、つまりアナトリアが歴史時代に入った頃の特徴のある出土品と、

ヒッタイト（紀元前20世紀頃小アジアに移動建国した民族）王国ならびに帝国時代の作品が陳列されている。

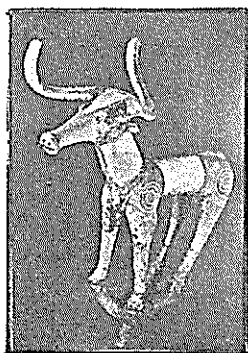
次ぎに紀元前1千年までのフリュギア（小アジア西部地方）王国時代、ギリシア、ローマ時代のものが並んでいる。

一巡して感じたことの第1は、先史時代に於ては、牛の角がなければ畑を耕すことが出来なかったと云う事である。右図の家屋の復原模型の中に多くの牛の角がある通りで、牛の角の神聖視はここから始まっている。

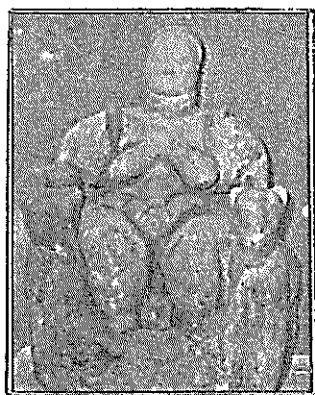


次ぎは手造りの土器で、この土器の発明は彼等の生活に大きな変化と進展をもたらした。ベンガラで幾何学模様を描いた壺が幾つか展示されていた。手造りの中で最も珍しいものは右の写真のように、出産の場面を表わしたもので、赤ん坊が見えている。

アナトリアの先史文明の次ぎの段階は青銅器時代で、紀元前1～2千年時代のものである。高度な冶金技術が彼等の造った様々の造形物によく反映された時代だ。



左図の「スタンダード」と説明されたものは、実によく優美華麗さを打出していた。不思議なことは角は水牛、耳は牛、首や足は馬である。遊牧民の彼等の脳裏からは馬は忘れられないものだった事がよく判る。これはアナトリア以外の地からは殆ど発掘されていないらしい。



先史時代のアナトリアが文化的に発展したのは、アッシリアの商人達が隊商を組んでやって来た影響があるようだ。ロクロの技術や織物、錫等はそれである。

『ヒッタイトの歴史』

アッシリア（古代オリエント）人はアナトリアに文字を伝え、アナトリアはそれによって歴史時代に突入した。彼等は商売熱心な民族で優美な土器を作った。

まもなくアッシリア人以外の民族が出入りしたが、これらは旅の者や過客ではなく移住者だった。その移住者がヒッタイトと呼ばれる民族であった。

彼等は紀元前2000年頃コーカサス山脈の西方からやって来て、ボスポラスやダーダネルス海峡を渡ってアナトリアに入った。紀元前1700年頃までに総てのアッシリア商人は、このヒッタイト人によって追い返されてしまった。代ってアナトリアには此の地最初の統一国家であるヒッタイト王国が建設された。

このヒッタイト王国は紀元前1450年頃、内紛と北シリアの圧力によって一旦崩壊した。しかし直ぐ以前にも増して強力を誇る大ヒッタイト帝国となり、以降は優れた王が相次いで出現して一段と領土を拡張した。前1285年頃、ラムセス2世のエジプトと戦って勝利を収めるなど、本拠のアナトリア高原から東はメソポタミア、南はシリアにかけて、約2世紀半にわたって一大勢力を誇った。

大ヒッタイト帝国も盛者必衰の理の通り、紀元前12世紀の初めに得体の知れない海洋民族によって滅ぼされた。彼等はアナトリア高原を追われて殆ど散り散りになった。しかし中には東のユーフラテス川（イラク）附近にまで落ち延び、小規模な国家を築いて再興を計った一派もあった。これがアッシリア帝国に滅ぼされる紀元前700年頃まで息を保ち、新ヒッタイトとなった。

新ヒッタイトとは、以前の大ヒッタイト帝国に属していた都市が、異民族の侵入から逃れてそれぞれ各地で築いた都市国家の集りで、落武者的な集団を形成したものであった。中心地はユーフラテス川上流だったという。

アナトリア高原から外れたオリエント地域の一面に足を踏み入れた新ヒッタイトは、このオリエントの想像性豊かな文化をギリシア世界に伝える仲介の役割を果たした。

ギリシア世界がオリエントの各種文化をアレキサンダー大王（前356～323）の東征以前に吸収していた。後のギリシア民族の華々しい創造力の源泉は、新ヒッタイトによって培われたと云えるだろう。

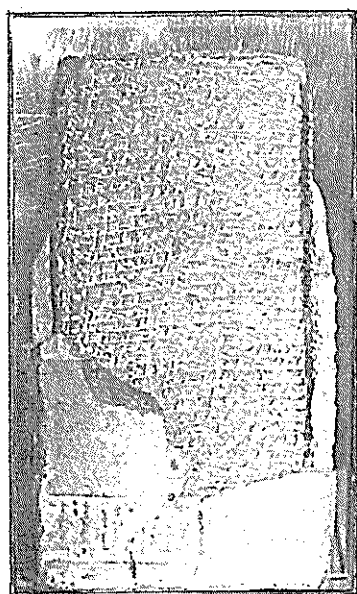
ヒッタイトは独特の象形文字を持ち、より進んだ楔形文字をアッシリア人から学んだ。右の写真は陶器に楔形文字で書いた手紙で、外部に少し見えるものは陶器で作った封筒である。

私のような考古学に全く無知な者にとっては、博物館の記事の記述は最大の苦手、自分自身も判らないことばかりだが、写真で思い出しながら乱文を書いた。

考えてみると、アナトリア高原は東西民族の通過、交流が盛んであったために文化が栄えた。メソポタミヤ文明やエジプト文明も入り込み、ギリシア、ローマ文明は云うに及ばず、ペルシアの王の道（27頁参照）以来、シルクロードの通り道であった。

我が国のような閉鎖的環境に置かれた民族とは、比較にならない高度な文化が、紀元前から栄えていたことに驚嘆するばかりである。

このような偉大な文化国家が衰亡し、当時の後進国であった日本が、今日のように大繁栄を成し遂げたものは一体何であろうか。改めてトルコの歴史に興味を抱いたのであった。



アタチュルク廟

博物館の前にトルコの可愛い小学生が列をなして入館を待っていた。我々日本人を見付けた子供達は、平和外交の担い手のように両手を上げて歓迎し、流石に親日的だと思つと頬摺りしてやりてい気持で一杯であった。

城壁を巧みに利用した簡易住宅の建っている坂道を下り市中に進むと、再びアタチュルク広場に突き当たった。彼の乗馬軍服姿の英姿が鶏群の一鶴のように天空に聳え、綺羅星のように輝き、声なくして国民に愛国心を訴えている感じがする。

アンカラの鉄道駅を左に見て新市街の広い道路を南進すると、前方にアタチュルク廟の丘が眼に入る。（位置は28頁地図参照）

英雄の静かに眠る廟の丘は雨上がりの濃い緑が眼に染み、衛兵交替した彼等の白ヘルメットに黒服姿は、質素ながら厳肅な感じがする。

正面の石の階段の左右にある建物には、彼の一代記や写真、及び廟内の配置図が掲示されている。左の建物の前には文官、武官、労働者の男性像、右の建物の前には3体の女性像が廟を警護するように凜然と立っている。

幅員約20mほどの大理石の参道は延々として真っ直に伸び、延長約200mほどもある道路の両側に、右図のような獅子の石像が無数に並んでいた。

参道の形態は古代中国皇帝の陸陵に類似しており、正方形の大理石を敷きつめた参道の清掃も亦、行き届いて、異国の我々さえも身の引き締まる心地がする。

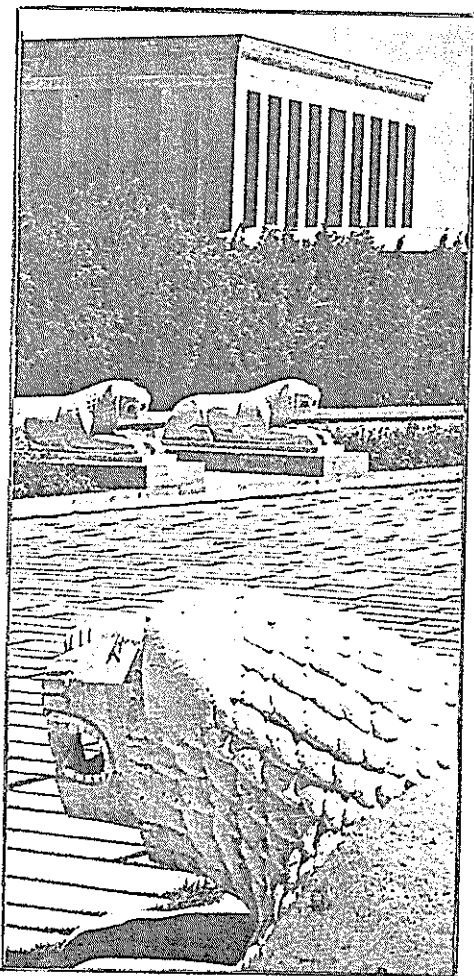
奥に設けられている大広場は肅然として広がり、大理石の敷石は我が身を写すように磨かれて、靴のまま歩くのも気が引ける感じだ。

左の奥まった位置に建つ壮重感の漂う建物が、「トルコの父」と尊敬されるアタチュルクを祀る廟である。（右の写真の建物）

アンカラ市街を睥睨して建っている廟に向かった我々は、襟を正して廟内に静々と足を進めた。列柱に囲まれた廟の中央に彼の墓石が安置され、墓前に花輪の献花が飾られていた。遺体は墓石の地下に埋葬されているという。

昔に返ったような思いで不動の姿勢をとりながら敬意を表した一瞬、彼の偉大な功績の数々が私の脳裏を走り、安らかに眠られんことを祈願して慰霊の誠を捧げた。

更に一礼し、平和の戦いにも勝利を獲得されんことを祈り、廟を去った。



トルコ共和国建国の父、
アタチュルク。

ケマル・アタチュルクの概歴

私が学生時代の歴史で「ケマル・パシャ」と教えられた彼の本名は、「ムスタファ・ケマル」である。アタチュルクとは「トルコの父」の意で、議会在ケマルの功績を称えて贈った尊称で、全国の広場という広場には彼の銅像、又あらゆる所に彼の肖像が掲げられている。

トルコ共和国を訪れたからには彼の経歴を知る必要があり、若干記述しておく。

「ムスタファ・ケマル」（以降ケマルと略す）が1881年、ギリシアのサロニカで生まれた時、巨大なオスマン帝国は、西欧列強の領土割取と少数民族の独立のために、解体期に入っていた。

16世紀のオスマン帝国の最大版図は、現在の国名にして24ヶ国に及ぶ。即ち黒海沿岸全土、コーカサス、バルカン全土、東欧の南部、近東全土と中東の一部、モロッコ以東の地中海南岸全部が、トルコ領または属国であった。

それが16世紀後半のレパント沖の敗戦（スペイン・ベニス・ローマとの戦い）、17世紀のダーダネルス沖の敗戦、さらに1683年、皇帝の首をすげかえて軍閥と化した親衛軍が、無謀な第2次ウィーン包囲戦（オーストリア）でポーランド、スウェーデン連合軍に惨敗を喫してから、衰退に衰退を重ねた。

18世紀にロシアに黒海北岸の殆んどを、19世紀に仏にアルジェリア、英にエジプト、キプロスをとられ、ケマルが生まれた頃はバルカン諸国が続々とトルコに叛旗を翻して独立し、国内は西欧諸国の治外法権と借款と利権によって喰い荒されていた。西欧列強によって東洋の清国と同様に「瀕死の病国」となっている時代だった。

トルコの衰退と崩壊の危機に際して、国内の知識階級の中に国政改革の狼煙が上がり、遂に1875年に憲法を發布して立憲君主制になったが、露土戦争の時、皇帝は憲法を停止して専制政治に戻ってしまった。

憲法復活を目指す秘密結社「青年トルコ党」は遂にクーデターによって反動皇帝を退位させ、新皇帝のもとに憲法を復活して国会を招集した。しかし青年トルコ党は翌年に内部分裂を起し、国論不統一のまま、対イタリア、対バルカンの戦争に、そして遂にドイツ・オーストリア側に引きづられて第1次大戦に突入した。

イスタンブールの陸軍大学を出たケマルは、革新青年将校として愛国運動をやったためにシリアに飛ばされた。そこでも革命団体を組織した。彼は青年トルコ党の革命は勿論支持したが、軍事、政治双方の天才だった彼は軍部の政治介入を厳しく非難し、徹底的な立憲君主政治を唱えて内閣からはうとまれた。

イタリアとのトリポリ戦争、バルカン戦争でも其の片鱗を見せた彼の軍事的天才が、もっと輝かしく発揮されるのはトルコの敗戦つづきの第1次大戦中、唯一の赫赫たる大勝利を博したガリポリ（ダーダネルス海峡北岸のガリポリ半島、8頁地図参照）の戦いの時であった。

英仏連合軍12万を完膚なきまでに撃破し、戦艦7隻、その他の軍艦20隻を失わせて首都イスタンブールを救い、当時の英海相チャーチルは遂に辞表を提出したほどである。

ついで南方シリアに転戦している時にスルタン（皇帝）は連合軍に降伏した。英仏

伊そしてギリシアの占領軍はトルコ国内に進駐し、イスタンブールは英軍の占領下におかれた。そして翌年「ネオ・ビザンチン帝国」を構想するギリシア軍は、英仏の後押しでエーゲ海岸に上陸を開始し、イズミールを占領してトルコ人の弾圧と強制退去を開始した。（イズミールの項と重複）

スルタンから残存軍団の解体を命ぜられて東部へ行ったケマルは、直ちに3軍団を掌握し、東方諸州会議を招集して国民に抵抗運動を呼び掛け、これを「アナトリア・ルメリア権利擁護団」という国民会議に発展させた。

総選挙でケマル支持派が国民の多数を占め、それを背景にして彼が対ギリシア戦を開始すると、連合国はイスタンブールに軍政をしき、議会を解散させて内政を握る挙に出た。そして1920年、トルコを事実上解体するような悪名高い「セーヴル条約」が連合国によって押し付けられた。次ぎの通りの内容であった。

①ヨーロッパ・トルコはイスタンブールの後背地のみとする。②小アジアではアルメニアを独立させ、アラブのヘジャブを独立させる。③シリアと小アジアの南東部は仏、小アジア南西部は伊、西部をギリシア領とし、エーゲ海諸島は伊領とする。④英はイラク、パレスチナを委任統治領としキプロスを領有する。⑤トルコ海峡を常時開放し、国際委員会の管理下におく。⑥3軍を解体し、特殊部隊をおく。⑦英仏伊3国が財政を掌握する。⑧治外法権を復活する、などであった。

総選挙での多数を背景にアンカラに大国民会議を招集し、新政府の誕生を通達したケマルに、連合軍の傀儡だったスルタンは死刑を通告した上、セーヴル条約に調印してしまった。

ケマルは外交的に孤立させられ、国土の大半を占領する優勢な連合軍に対し、武器も乏しい敗残軍隊と、近代線の経験の乏しいゲリラ部隊を指揮して立ち向かった。この時、かつて軍隊の政治介入に反対していたケマルは、軍事、外交を見事に使い分けて危機を救った。

連合軍の対立を利用して、先ずシリアに関心をもつ仏軍と単独休戦して戦列から離れさせ、英に対する警戒心を利用して密約によって武器を供給させた。

1917年の革命以来、国際的に孤立していた「敵国」ソ連のレーニンと手を結び、アルメニア革命軍にアルメニアに進駐していた連合軍を攻撃させ、後方を固めた。

そして、イズミールの海岸一帯から上陸したギリシア軍に対して逆襲に出た。ギリシア軍は確保していた地域を徹底的に破壊して本土に退却。ついでトルコ国民軍はイスタンブールを開放したが、その時は英を助ける国は皆無であったと云う。

新たに勝ち取ったローザンヌ条約もケマル外交の輝かしい勝利であった。其の結果、全アナトリアとルメリア（バルカン半島南東部）をトルコ領土と認め、治外法権を全面廃止、財政管理権をトルコに返し、軍備制限を解除し、トルコ海峡国際管理に際しトルコを議長国とする、というように、トルコの主張が全面的に通ったのである。

この時、英はスルタンの会議招集権を利用して、トルコ国内を分裂させようと小細工をした。激昂した国民は遂にスルタン打倒、スルタン制の廃止を決議し、ケマルはスルタンの亡命を黙認したのであった。

共和制をしいてから直ちに首都をイスタンブールからアンカラに移し、初代大統領に就任したケマルは内政改革を断行した。

回教圏の法王庁に当るカリフ庁を廃止して政教を分離、回教裁判所の廃止、太陰暦

であるイスラム暦を太陽暦に改め、休日を金曜日から日曜日にかえ、国民に「姓」を与え、女性のヴェール、男のトルコ帽の禁止（劣等国民に見られるという理由から）、国字改革、国語改革などである。

また主権在民の新憲法を發布し、さらに憲法からイスラム国教をけずり、各種僧団閉鎖、宗教団体の結成を禁止し、婦人開放と一夫多妻制の禁止も施行した。トルコの婦人参政権は日本・仏・スイスよりも早く、1934年である。

民法、刑法、商法も全面的に改正され、外に対してはギリシア人から貿易権、アルメニアから商業権を、さらに自主関税権を回復する。またソ連、ドイツから経済援助を受け、重工業と消費物資生産のバランスのとれた第1次5ヶ年計画を実施した。

オスマン時代の侵略主義を廃し、「外に平和、内に平和」というのが軍人独裁者のアタチュルクのスローガンであった。

各国とも友好条約を結び、ボスポラス海峡の管理権と再軍備権を回復、東のイラン、イラク、アフガニスタンとも友好条約を締結した。

共和制といっても、第2次大戦後の1950年までは権利擁護団から発達した共和人民党の1党独裁であり、ケマルは独裁者にはちがいがなかったが、陰謀を憎み、血の粛清はやらなかった。

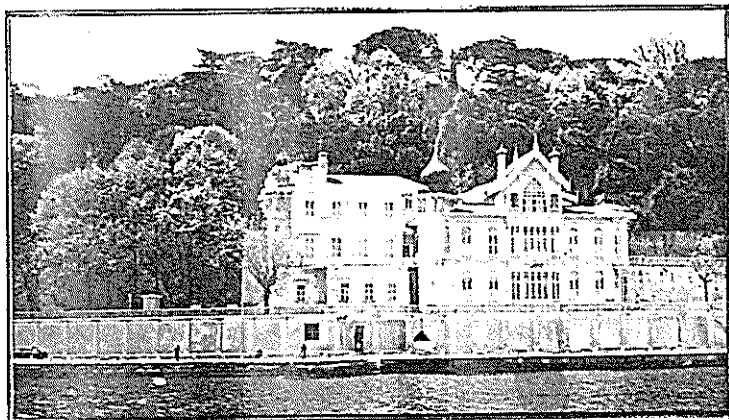
1938年11月10日、イスタンブール金角湾の北、ボスポラス海峡を臨むドルマバッチェ宮殿で執務中、57歳の若さで急逝した。この軍人上がりの政治家は多くの同志に助けられたとは云え、トルコのために巨大で多様な事を成し遂げたのである。

「英雄を必要とする国は不幸だ」という言葉があるが、この「英雄」なくしては、かつてのオスマン・トルコ大帝国は雲散霧消していただろう。其の八面六臂の活躍と、息もつかせぬ闘い、外交、改革の連続、そして「近代トルコ」の国家方針を見事に軌道にのせた才腕は、「30年で150年の仕事をした」と国民を驚嘆させたのである。

このアタチュルクは、極東において19世紀に近代化に成功し、清国、それに革命前のロシアと闘って勝った日本を尊敬し、明治天皇の写真を自室に掲げていたという。

彼が逝去したドルマバッチェ宮殿の時計は唯一つを除いて、「トルコの父」の死んだ時刻、9時5分を永遠に指し続け、国民英雄に対するトルコ国民の永遠の敬慕と、哀悼を示していると言う。（下の写真はドルマバッチェ宮殿）

彼の死の翌年に始まった第2次大戦にも連合国、枢軸国の秘術を尽くした懐柔工作にも拘らず、巧みに中立を守り続けたが、国際地位保全のため1945年には日独に宣戦した。しかし実質的には戦争行為は実施していない。戦後は民主化の国際的風潮をうけて、27年来の1党独裁制に終止符をうち、政党結成の自由が認められた。又、スターリンがトルコ海峡に軍事基地を要求したのに対し、NATOに加盟して今日に至っている。



トルコ料理

アンカラの予定観光を消化して眼を楽しました後は、舌を堪能させることであった。昼食はガイド嬢（アンカラ大学在学中）の自慢する展望台近くの一流レストラン。古色蒼然とした内装は味自慢の店らしい造作で、日本人好みにぴったりだ。

トルコに脚を踏み入れて以来、料理の美味さには満足していたところ、本日は垂涎の的であったシシ・ケバブだと告げられると、獲物を与えられた獵犬のような喜びであった。

トルコ料理は中国料理、地中海料理（フランス料理）と共に世界三大料理の一つ。文明の十字路としての役割を演じてきたトルコは、食文明の十字路でもあった。

ペルシアのダリウス大王がギリシアに出兵した時も、アレキサンダー大王の東征の折りにも此の地は戦場と化し、ある時はキリスト教国、ある時はイスラム文明の中心地となっていた。そして世界に冠たる繁栄を成し遂げた時代に培われた伝統が、料理の世界にも受け継がれているのかも知れない。

それにもまして、中央アジアに起源を持つ遊牧民族の料理法と、西洋料理が融合し、肉、野菜、果物などの新鮮な材料が豊富だけに、素材の風味を生かした単純な調理法が特徴のようだ。

子羊の肉を串で刺して炭火で焼いただけのシシ・ケバブはトルコの代表的な料理で、トルコ料理の代名詞になっている。作り方は実に簡単で肉の両面をあぶるだけ。それだけ肉の選定と其の味付けが各店の企業秘密なのかも知れない。

今日の料理は各テーブルの横にある皿で、肉に味を付けて焼いたもの。串刺しではなかったが、40種類もあるトルコ料理の一つでシシケバブには違いない。流石に味の宝庫のトルコ料理だけあって、命が伸びたような雰囲気の中で舌鼓をうった。

肉を存分に満喫したあとは、トルコ・コーヒで締めくくった。コーヒの粉末を煮込み、その上澄みをカップで飲むコーヒの味は深く、カップの中でゆれている液体を見つめると、その中にトルコの持つ神秘的な魅力が隠れているような感じがする。それにコーヒを世界に広めたのもトルコというから、このトルコ・コーヒが元祖かも知れない。

新しい料理の発見は人類にとっては、天体の発見以上のものだったと思いながら、レストランを出た。

アンカラ～カッパドキア

昼食を終えた我々は郊外へと進んだ。街の十字路に立ったアタチュルクの銅像は、過去の心労を忘れたかのように泰然自若としている。英雄を必要とする国は不幸だと前記したが、英雄のいない国もまた不幸ではないだろうか。

ナポレオンは驚くべき将帥であり、端倪すべからざる戦略家で偉大な文人であったが、トルコにとってはアタチュルクは其れ以上の人物だったと考えながら、バスに揺られて眺めていた。

13・30に出発した一行は東方約230キロのカップドキアに向い、アナトリア高原を踏破することになった。

ギリシア語で「日出づる国」という意味のアナトリアは、トルコ語ではアナドルと言う。この「日出づる国」のアナトリア高原は地図を見ても実に広大で、小アジアと称されるだけに蕩々呼としている。

一直線に蜿蜒と延びる道路は4車線から2車線となり、往来も閑散として来た。ペルシアの「王の道」(27頁)や、シルクロード(2頁)となっていた高原は概ね平坦で、村落も10キロに1つあるか無しかの殺風景な中に、ミナレットだけが眼に映っていた。昔の旅人達は「形影相弔う」というように、自分の影だけが自分を慰めた孤独な旅であったことだろう。

遼原の火のように拡がって行く大平原の右手にチュズ湖の大塩湖(上の上部写真)が見えて来た。反対側には大草原が限りなく続き、草を食む放牧の風景はモンゴル高原を想起させ、優しい牧歌的な景観は大好きだ。(上の下部の写真)

トルコ民族の遠い祖先の地と見紛うばかりの高原の所々に、小さな丘が見えていた。その丘は自然のものでなく人工の丘で多分、遺丘であろうか。遺丘はアナトリアを通過した民族の痕跡であり、数十年、数百年のものでなく、数千年という長期間にわたって形成されたものであろう。

余りにも民族の入れ替わりが激しく、アナトリアが安住の地というよりも、民族の通過地だったことを遺丘は示している。これから貴重な遺品が発掘されたと思われる。

しかし、民族の通過地を中心に大帝國を築いたのは前14、13世紀に活躍したヒッタイト人と、現在アナトリアを主体とするトルコ人の僅か2民族のみである。そしてトルコ人が安定した居住を始めてから、約900年が過ぎようとしている。

標高2000mの高原の木の芽の吹くのは遅く、高度が高くなるにつれて草原の緑の色も薄くなって来た。突然、豪雨の来襲に見舞われ、眼に映るものは車窓の水溜りだけであった。3、4月は高原の軽い雨季だというから仕方がない。

雨季というものの日本の梅雨と異なり、1日中降りつづくことはないようだ。この雨季のために高原を埋め尽くした雪が消え、大地に十分な水分を侵み込ますのであるから、恵の雨と言わなければならない。

トイレ休憩地となった所の林檎の木は白い花を咲かせ、薄赤く染まった桃やアズキの花が高原に春を告げていた。花は所を選ばず開花し、花の香りが心地よい風にのせられて漂い、旅人の心を和らげて無聊を慰めている。

無人の曠野を走り続けてうつろになっていた時、昔のシルクロードの宿場の跡が網膜に映った。私にとっては初対面で珍しく、素早く車中からシャッターを押した。隊商の人達は40キロ毎に設けられた隊商宿に泊まり、長い旅を続けたのだ。ラクダの1日の行程は40キロぐらいらしく、それに合わせて宿場があったと言うから、古代の人たちの頭脳も驚くばかりであった。(次頁の写真は煉瓦造りの隊商宿の跡)



眼の色、肌の色の違った人々で賑わった宿場、黙々と進むキャラバンたちの心の拠り所であった隊商宿、未だに其の跡を遺す煉瓦の塊に未練を残して一路、シルクロードをカッパドキアに向かって疾走した。

道の両側の至る所に黒い石の小山が点在している。エルジャッシュ山の大爆発の火山石であった。これらの黒い噴石はカッパドキアに近づいたことを知らせていたのである。

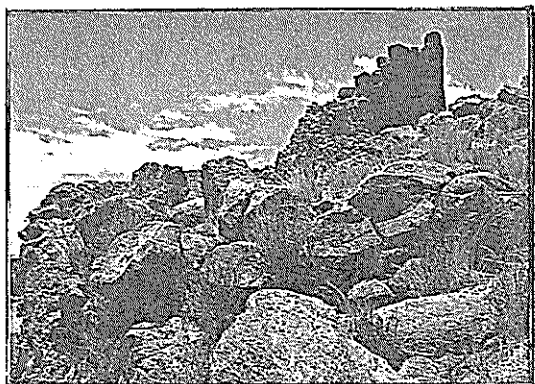
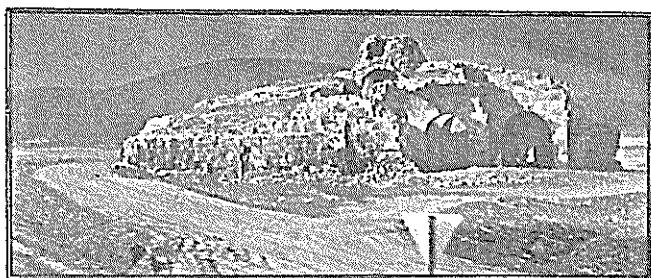
(右の写真は火山石)

近くに見えてきた村落の外周にポプラの木が林をなして植林されていた。この地方の習慣では男子が誕生するとポプラの木を植え、結婚する際にこれを建築用材にするそうだ。

前方の自動車の修理工場の建っている町は、長い街道の中では初めて見た市街地であり、図上から判断するとアヴァノスの町であった。

栄華の歴史の跡を彷彿させながら、アナトリア高原230キロに及ぶバスの旅も漸く終わった。4ヶ月前に新築完成したユルトック・ホテルに旅の疲れを癒すことになったが、往時のキャラバン隊の労苦がしみじみと偲ばれる。

イズミールからアンカラ、更にカッパドキアと疲れに疲れたが、憧れていた明日のカッパドキアの奇観に望みを抱いて旅装を解いたのである。



4月18日

(水) カッパドキア

カッパドキアの歴史

ヒッタイトがアナトリアへやって来た頃、カッパドキアには幾つかの小国とアッシリア（オリエントの強国）の交易都市があった。紀元前1200年頃、ヒッタイト帝国が滅んでアナトリアの暗黒時代が始まり、その後紀元前6世紀にリディア（小アジア西部の王国）の属領になるまで、カッパドキアに関する消息は殆んどない。

紀元前6世紀半ば、リディアはペルシア王国に敗れてカッパドキアを失った。紀元前333年、アレキサンダー大王が遠征の後、紀元後17年にローマの属州になるまでの間、カッパドキア地方は比較的に自由な時代を楽しんだ。

ローマ帝国も、続いてやって来たビザンチン帝国も、この地域の文化を吸収しようとはしなかった。彼等の関心は道路を確保して交易ルートを守ることと、この広大な平原の労働力をビザンチン軍のために有効に使う事しか考えなかった。

支配階級や軍隊は便利な地点に駐留し、そこに町ができた。ギョレメなどもローマとビザンチン時代の中心都市として発達した。

この地方の住民はいつも岩の多い場所を好んで住んでいた。山の上、谷、深い峡谷の岸辺に家を作った。石を利用し或は自然の岩を穿ってそこに住んだ。彼等は穴から地中にもぐり、岩の割れ目や迷路のような隠れ家に住み世捨人のようであった。戦場となった所は何処の国でも同じであるようだ。

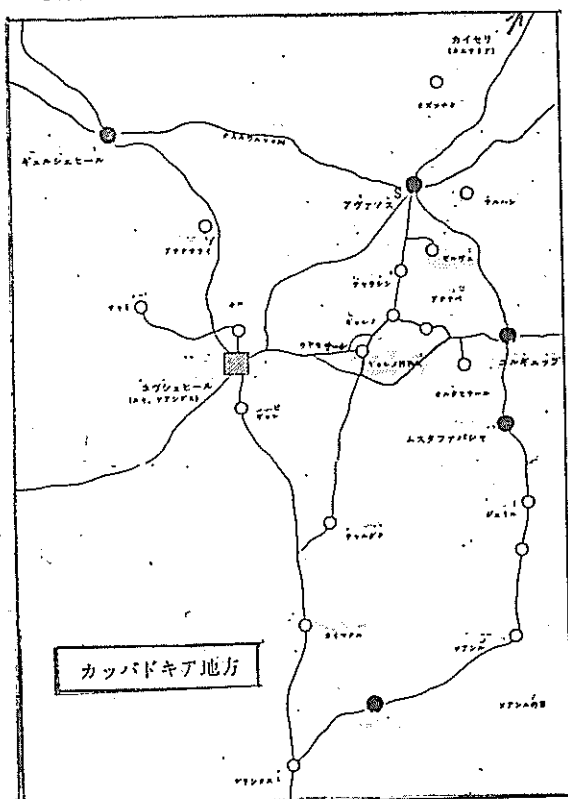
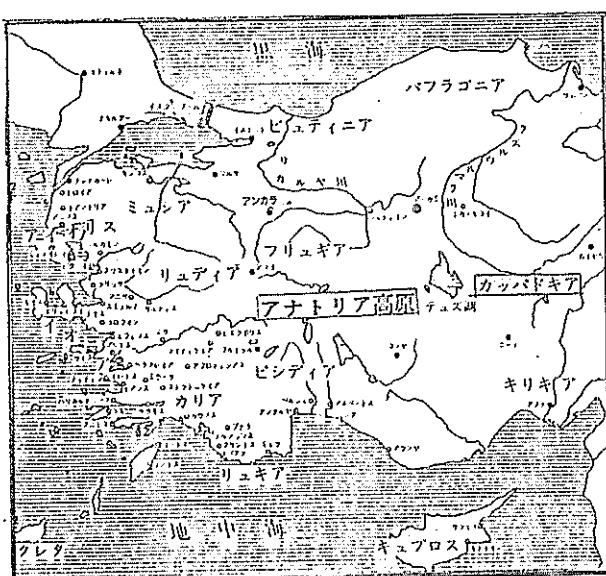
住民の多くは主に農業に従事し、特に葡萄の栽培と家畜の飼育が重要な仕事であったが、農地や牧草地は町に住む地主が所有者であった。住民は作物の大部分を占領軍や神殿の維持に供出するよう強制されていた。(上図はカッパドキアの位置図)

2世紀にキリスト教が知られるようになった頃、カッパドキアは様々な思想、哲学、東方の諸宗教が入り乱れた坩堝であった。初期のキリスト教徒は恐らくローマの宗教的迫害から逃れてきた人々であったと思われるが、キリスト教徒の大部分はアラブの支配から避難してきた人達であった。(右はカッパドキアの地図)

これらの新しい住民達は丘の斜面を掘り、岩を刻んで教会をつくり、内部をフレスコ画で飾った。このようにして間もなくカッパドキアの岩石地帯は修道院や修道士の庵や、教会などの様相を呈するようになった。

11世紀後半にセルジューク・トルコ族がやってきた時、カッパドキアには1000を超える宗教施設があり、そしてカッパドキアのキリスト教社会と、イスラムのセルジューク・トルコの関係は友好的であった。

14世紀に入ってオスマン・トルコ帝国に吸収された。キリスト教信者のギリシア人たちは、後世のトルコとギリシアの人民交換政策により、1920年代にカッパドキアから離れた。



別世界の Cappadocia 渓谷

8時にアヴァノスのホテルを出て南下した途端、寂寞の中に Cappadocia 渓谷が展開して、其の静けさは不気味な感じであった。左手にある「ゼルヴェ」(前頁地図参照)の町は自然の造形とは思われない奇形を呈し、そこに音らしい音を耳にすることは出来ない。

300万年の太古の昔、エルジャシュ山が噴火して積み固まった凝灰岩が、長い年月におよぶ風雨の侵食作用によって創られた、ピラミット型や円錐型、ねじれた塊といった珍岩奇岩が、形容することが出来ない景観を谷間に現わした。

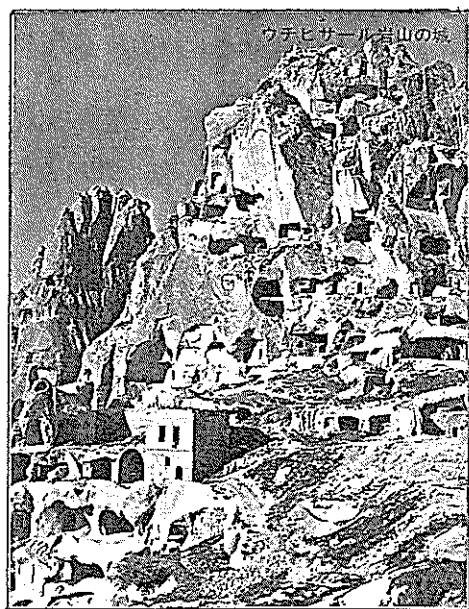
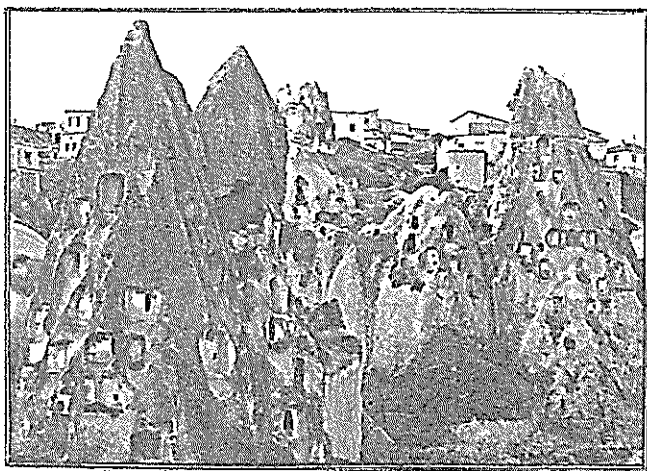
その奇岩怪石の中に穴を穿って住んでいる様相は此の世のものとも思えず、将に地の果てのような空気が充満し、音に聞こえた幻想の世界に踏み込んでしまった感じがしていた。(上の写真はゼルヴェの奇岩と住居の岩窟の跡)

突然、青天が曇天になったかと思うと真っ黒い空模様となり、梅風沐雨の激しい雨は霰に変わって地表を叩き付けた。地上の奇観の上に天変が加わって「盲亀の浮木」と形容したらよいのか、めったに出会うことのない運に巡り合った。Cappadocia 観光に霰の花を添えた珍現象である。

猫の目のように変わり易い空は晴れ上がり、「ギョレメ」の渓谷を更に走ると前方に仁王様のような巨岩が立ちはだかっている。これが「ウチヒサル」の城砦の岩山であった。

ウチヒサル(位置は前頁地図参照)はその名の示す通り、頂上にビザンチン時代の砦が遺り、3つの奇妙な形をした岩塊を中心に開けた町である。それらの岩山の全面に住居穴の跡が残り、今日では鳩の棲家となっている。重宝なことに鳩の糞が貴重な肥料になっているそうだ。(右はウチヒサルの岩山)

Cappadocia には大きな町は一つもない。その代わり小さな規模の町や村は、僅かな水利が得られる所には必ずと云ってよいほど立っている。そして其れらの町村は一言及するに足る特徴を持っているらしい。城砦跡を中心にしたウチヒサルは独特の雰囲気、針山の切り立った峰の間に出来たこの町は歩いてみると面白い感じがする。



泥造りの家や岩峰を穿った穴にも昔のキリスト教の聖堂や僧院があったが、今では侵蝕が進んで普通の家に移り住むようになった。

バスは停車して写真撮影の時間が与えられた。其処に林檎の木が可憐な花をつけ、微かに紅をにじませた白い花卉は、我々を迎える挨拶のようである。しかし、願わざれども散る運命にある小さな花は、我等に眼に見えない生命の終わりが近づいていることを、無言のままで知らせている感じもしていた。

谷の真中に「ギョレメ」の町がある。町といっても村と云った方が適当かも知れない。彼等の世間の煩わしさを逃れて自然を友として暮らす「一竿の風月」の生活は、これこそ「石に枕して流れに漱ぐ」生活であろう。

ギョレメの住民は奇岩の林の中に建てた日干煉瓦の家に住み、修道士たちの住んでいた岩窟を納屋に利用している。猫の額ほどの痩せた土地、水が豊富にあるわけでもない土地、こんな所で彼等はどんな生活をしているのであろうか。奇岩奇景だけでは生活が成立しないと思うと気の毒でたまらない。

ギョレメとは「見てはいけな
い」と云う意味らしいが、尖塔
の上に帽子をのせたような石も
あり、これを現地の人々は「妖
精の煙突」と呼んでいる。限り
なく続く樹木状の岩が林立して
いるかと思うと、一挙に臨界に
達したように突然変異して、赤
茶色や桃色、白色や褐色の縞模
様の台地が長く連なっていた。グランドキャニオンや中国・トルファン郊外の「火焰
山」を小型にしたようだ。（上の写真が縞模様の火焰山）

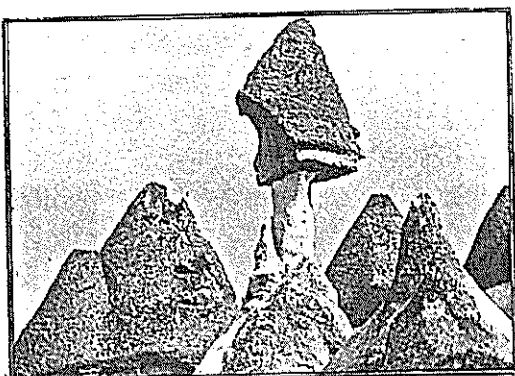


見ていれば見ているほど幻想の世界に誘う不思議な魅力、周辺に何か神がかった空気が流れている。晴れ上がった燃える太陽の光をまともに受けて、天と地が一体となって仙気が雪崩込んだような錯覚に陥った。（下の写真はギョレメの奇観）

人間が造った遺跡や美術よりも、大自然の造形美の素晴らしさに圧倒されながら、車は反転して絨毯工場へと向かった。閑静な溪谷に侵蝕された妖怪な景観が次ぎから次ぎへと出現し、車中から「あれ、あの岩、あの穴」と歓声が湧いていた。

絨毯はシルクロードの沿線は何処の地でも盛んだ。店内に入ると流暢な日本語で一席ぶって販売に移った。産業の少ないカッパドキアの唯一の外貨獲得の商品、熱のこもった商魂の逞しさは、シルクロードの復活の感じがしていた。

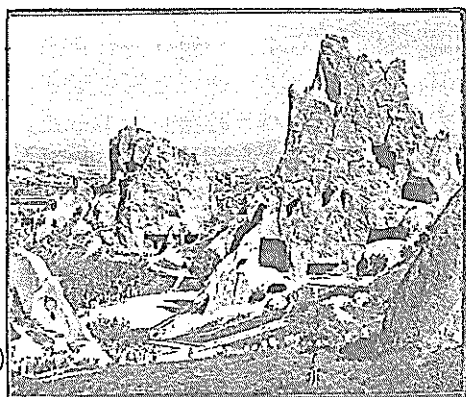
引き続いて案内された御土産店は、陶器、真鍮細工、ラクダの骨細工など、トルコ全土の産物を販売していた。興味のない私は早速差し出されたトルコ茶をすすりながら、「年寄りの達者は春の雪の如し」の諺の通り、何よりも用心第一と体を休めていた。



ギョレメ博物館

太古の昔、この地が古代の海の一部だったとしたら、其の深海の暗い石林に、太陽の一条の光も届かなかったかも知れない。地上にあるものは地下に眠るものの何十万分の一と云われていても、カッパドキアの空恐ろしい無数の石の林には当て嵌まらないだろう。

バスは再び針地獄を思わせる凝灰岩の尖峰群の中を通り、ギョレメ博物館（洞窟修道院教会遺跡）の見学へと進んだ。（右は博物館の一部）



雲の流れが一段と速くなった瞬間、大粒の霰が散弾のように体に当たり、雷鳴は猖獗な獣が喉を鳴らすように響いて薄気味が悪い。傘を広げて入念に地表を踏み付け、足の裏に神経を集中して坂道を登った。

奇岩珍石の群立する1角を柵で囲った博物館は、屋外博物館の形で管理されており、勿論、入場券は購入しなければならず、広大な面積に尻込みする人もいたようだ。

柵内の多くの修道院の中で先ず案内されたのは、「カランルク・キリセ」（暗闇の教会）の洞窟教会であった。ガイドの懐中電灯の光は、キリスト降誕や最後の晩餐、磔の十字架などの壁画を照らし、克明に壁画の説明を続けた。（右は最後の晩餐）



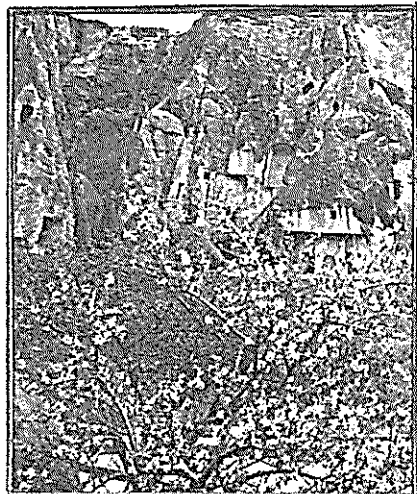
歴史の移り変わりから迫害を受けたキリスト教徒は、闇夜に灯火を失ったように洞窟に教会を造り、何処で暮らすのも一生だと信仰心に燃えていたのだ。

「地獄極楽は心にあり」と云われているが、人の心は持ち方ひとつで、此の世は楽しくもなり、苦しくもなると云えるだろう。

続いて「エルマル・キリセ」（林檎の教会）の洞窟であった。この教会のフレスコ画も同じくキリストの降誕、洗礼、エルサレム入城、最後の晩餐、ゴルゴダへの道、磔の十字架、昇天などの壁画であった。しかし、何れも破壊の跡が痛々しく残っている。幸い私はイスラエルを訪れた過去があり、ガイドの説明も概ね理解できた。

林檎の教会の名称の由来は、洞窟の前に林檎の木があったからだと言われている。

図らずも今、洞窟の前の林檎の木は花を開き、殺風景な凝灰岩の景観に心地良い香りを発散していた。（右は林檎教会と満開の林檎の花）



凛々とした中で春を呼ぶ五弁の花びらに見惚れ

ている時、空は晴れ渡って濃いブルーが背後に広がって来た。

教会や花を見ながら「人面桃花」の故事が脳裏に浮かんで来た。人はいくら変わっても風景は変わらず、岩窟を囲む自然は遠い昔そのままであった。我々人間にとっては歳月の去るのは実に速いと痛感せざるをえない。

次ぎは「聖バルバラ教会」であった。この洞窟教会は11世紀後半に造られたもので、幼稚な絵が岩に直接描かれている。鳥や魚、動物を描いた絵は単なる装飾のように見えるが、信仰心の厚い彼等には何か深遠な意味を持っていたに違いない。特に此の教会は男女が一緒に修道していた事にも特徴があると云う。

隣接した「ユランル・キリセ」（蛇の教会）は同じく11世紀後半の建造で、コンスタンチヌス大帝が十字架を手に行っているフレスコ画が良く見えていた。そして、ローマの兵士が蛇を退治している絵が描かれていることから、蛇の教会の名が付けられた。又、一人の人間が教会を独りで造ったことも特徴であり、後日には学校として使用されたと云う。

「人間到る所に青山あり」とは言うものの、痛む上に塩を塗ったような「塗炭の苦しみ」に耐え、信仰の道に励んだ修道僧の心に衝かれるばかりだ。人類は未だかつて宗教なしに生きて来なかったことを洞窟寺院は暗示し、又、これからも生きて行けないのではないだろうか。

運命とは言え、「いけすの鯉」のように其処から逃れられない運命の人達、彼等の「石に立つ矢」のような強い精神力には感服するばかりであった。何の努力もしないで幸運を待つ現代の思想に、教会群は警鐘を鳴らしている。

少しばかり離れた「チャルクル・キリセ（サンダル教会）は崖の中腹にあり、現在は登るために鉄製の階段が設けられていた。内部のフレスコ画は前の洞窟と変わらないが、全てのフレスコ画の人物がサンダルを履き、石の床に2個の足跡のような凹みがあった。そのことからサンダル教会と呼ばれると云う。（キリセとは教会の意）

絶壁の中段にあるサンダル教会の階段を下り始めた。異教徒のお前達は一体、何をしに来たのだと、問いかけているような寒い風が吹いている。

勿論、勝望美景を愛するからだ
としか、応える言葉を知らない。

暗い洞窟ばかりの参観を終わり、
下界には明々赫赫とした世界が展

開して、幽明境を異にした眺望は我々を恍惚にさせていた。奇怪な形の岩窟は海底を
思わせ、細く清澄な流れは秘められた歴史の匂いを含み、我が身が浄められてくるよ
うな感じさえ受けたのであった。（上の写真は最高地からの展望）



妖精の煙突

ギョレメ博物館を去って「ユルギュップ」（38頁地図参照）へと進んだ。この地
一帯も修道士の谷として知られる所で、長いビザンチン帝国時代を通じて、カッパド

キアの指導的な役割を果たしていた町である。

附近には葡萄畑があり、岸壁に彫られた隠れ家が多いことから、修道士の谷と呼ばれている。特に目立つものは、妖精の煙突として有名な奇岩怪石が、広々とした高原に林立している景観である。これぞカップドキアの圧巻、正真正銘の奇観だ。

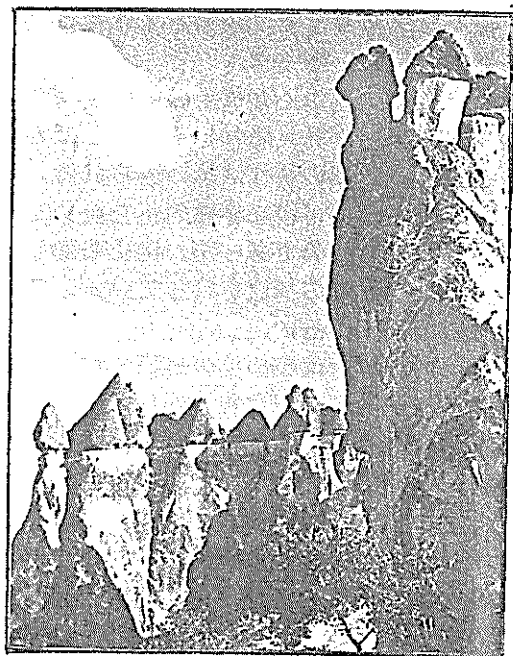
高さ15mもあるだろうか、三角帽子を乗せたような奇妙な形をした岩が、所狭しと立ち並んだ変形円錐地帯であった。

いろいろな書物でギョレメ溪谷の知識を持っている者でも、これらの奇岩珍形には驚きの声を上げなければならない。

そこから童話の世界が見えてくるようでもあり、一方、乾燥した台地は死の世界のようにも見えている。

妖精の煙突に近寄ってみた。霊界のような突り帽子にも、岩を穿った教会があった

のだ。将に「天地は万物の逆旅」である。そして「山中に暦日なし」というか、このような所に隠って世の中を忘れ、月日の経つことも考えずに静かに日々を送ってみたい心境に、引き摺り込まれそうであった。(上の写真は妖精の煙突の一部)



以上で午前の観光は終わり、ユルギユップのレストランで昼食となる。

『岩窟に穿たれた聖堂』

この地方一帯に夥しく穿たれた修道院は、恐らく3、4世紀頃からオアシスの町の拠点として、黒衣の修道士たちが入って来たのであろう。アナトリア高原は聖パウロがキリスト教を布教して回った土地柄でもある。高潔な宗教観を抱いたキリスト教徒が、当時、既に住んでいたことは想像に難くない。

カッパドキアは古代ローマの没落後、ペルシア及びイスラム帝国の侵攻に対するビザンチン帝国側の攻防の前線になっていた。この頃の修道院は防禦のための石扉などを備え、重要な拠点に城塞が築かれたのは7世紀後半である。

絶え間のない戦闘の中で、アナトリアの彼方此方に合図の狼煙が上がっていたのも此の頃で、漸く平和が訪れたのは9世紀後半であった。従って現在まで残っている洞窟修道院の多くは、11世紀後半にセルジューク・トルコに侵攻されるまでの約200年間に造られ、壁画や聖像礼拝の復活したのも此の時代以降ではないかと思われる。

いづれにしても、カッパドキアのビザンチン文化の最盛期は上記した期間であり、万を超える修道士が此処に入り込んでいたと云われている。

幻の地下都市

恰も月の世界を思わせたギョレメ溪谷の寂れた自然の奇観に堪能し、蜂の巣のように彫り込まれた岩窟の群れは、一種の壮絶感が迫って来るようであった。昼食を済ま

せた我々はユルギュップ西南方20キロ（38頁地図参照）にある「カイマクル」の地下都市の見学となった。

カイマクルに近づくと黄土の中にポプラの木が林を作り、赤茶げた煉瓦の屋根に白い漆喰壁の家屋が見え隠れして、少しばかりの畑に小麦が生えていた。火山岩のごろごろと混じった畑の耕作は思い遣られる。

高くなった陽が可憐な林檎の花を温めている此の村の下に、驚くべき規模の地下都市が穿たれていたのがあった。世にも珍しい此の文化史蹟は、現在判明しているだけでも地下8階建ての構造を持っている。そして盛時には1万5千人以上の人々が住んでいたと云われている。

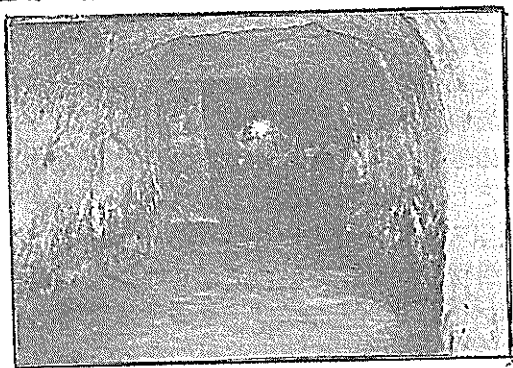
地下都市の様態は蟻の巣の規模を拡大して、人間が居住できるように組織されたものと云えるだろう。現在我々が見学できる部分は8階のうち、電灯線が引き込まれている4階部分までで、其処から下は未発掘の部分が多く許されていない。

一行は地下都市の小さな穴の入り口から、蟻の行列のように一列になって歩いた。背丈の低い通路は背高の私には難儀な姿勢を強要させ、いつしかベトコンの地下壕を這いずり廻ったことを思い出させた。（サイゴン郊外にて）

通路は即ち地下の各部屋を連結する連絡路に過ぎず、高さは1、5～1、7m程度、住居の部分となると2mもあるだろうか、漸く背伸びすることが出来た。1階部分はロバやラクダを飼育する所で、餌の置場も設けられていた。

地下2階は学校や修道院、教会、それに墓場の跡であった。何れも地下を穿った洞穴に過ぎず、ガイドの説明がなければ皆目わからない状態だ。1954年まで人間が住んでいたと云うから驚くばかりで、本当に地下も逆旅であったのである。

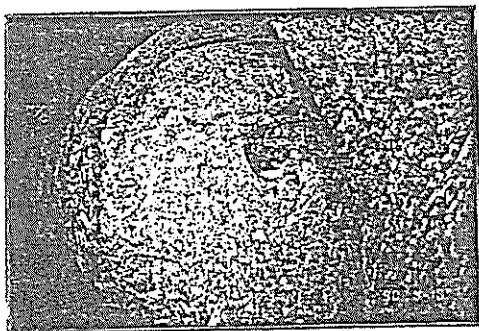
地下に一步足を踏みいれると、自分自身が蟻のような生物になったようで、迷路の穴の中を前者を見失わずに続くだけであった。（右の写真は地下の部屋と連絡路）



地下4階には上の階でしぼった葡萄の汁を貯める穴がある。各階の要所には、いざ鎌倉という時に通路を塞ぐ丸い石の扉が置いてあり、なかなか智恵を働かした考案だ。又、麦や胡麻などをひく凹みを付けた石臼のような物まで準備して、最低生活だけは確保できたのであろう。（下は、石の扉の穴に棒を差し込んで動かした丸い石扉）

地下都市で最も重要な通気孔兼井戸は、地下都市のの中心部を垂直に貫いて掘ってある。そして通気孔の最上部には見張り台が据えられていて、監視人が交替で地上の様子を窺っていた筈だ。

通路と部屋との仕切にも石扉があり、要所要所に照明用の油を置いた燭台の穴が掘られて、井戸も幾つか見えていた。最も深い井戸兼通気孔の深さは150mにも達している。



見張り台上の番人は敵の来襲などの危険を知らせる時は、この空気孔を利用して通報し、地下の人達は一斉に石扉を転がして要所を塞ぎ、防戦した光景が彷彿として浮かんでくる。

施設は勿論これだけではない。日常生活に必要なものでは先ず共同炊事場がある。汚水処理のための穴と、煙を通気孔に導く孔道も穿かれていた。これらは極く簡単な設備で、土や石で作ったもの以外は、何一つ見ることは出来ない地下風景であった。

地下都市の一部を見学して想起したのは、その原型はトロイの遺跡に通じているのではないかと云うことであった。トロイは出発延期で機会を失い残念でならないが、其の遺跡も幾重にも重なっている筈である。又、衆寡敵せず、自給自足を余儀なくされた自活の智慧は、太平洋戦争時の日本軍にも現われており、典型的なラボールの地下生活が想い浮かんでいた。

「疾風に勁草を知る」という諺は、この地下都市に最も適している言葉である。困難に出あって初めて本当の智慧が発揮されるもので、今日あって明日のない身となると、人間は偉大な力を発揮するものだ。

背筋が寒くなるような薄気味悪い蟄居生活は、波乱万丈の痛ましい毎日であったことだろう。そして彼等の生活の絶対条件は、俱に喜び悲しむという金石の交わり、即ち、全員一体の団結心だったのではないか。

大東亜戦争の開戦当時の中隊長であった私は黄河を拠り所にして、背水の陣を敷きながらの地下生活を続けていた。そして数万の敵と対陣して連日連夜の砲撃下に耐え抜いた遠い過去が、現実のように懐かしく感じられる。将に人生は「生は難く死は易し」である。カイマクルの地下都市の見学から、黄河の中牟城の戦場を回顧していた。

『地下都市の謎』

驚嘆すべき此の文化遺跡が何時、誰によって、何の為に造られたのであろうか。不思議にも此の地下都市から何の遺物も発掘されず、文献も壁画なども一切発見されておらず、墓はあったものの遺体らしいものもないらしい。

地下に潜って生活することは、必然的に防禦設備ということになる。この土地の人達が防禦の必要性に迫られたのは、ペルシアやアラブの侵攻に苦しんだ6世から9世紀の時代ではないだろうか。

ビザンチン側のキリスト教徒は、いやが応でも異教徒の攻撃対象となった筈である。地下都市内部に穿かれた十字プランの教会堂は、彼等がキリスト教徒であったことを証明している。

遺物らしいものが発掘されない点も謎である。それは意識的に逃亡したのか、或は捨てられた都市の姿であるのか。逃亡でないとすると攻防の時代が過ぎ去った後に、地下生活をしてきたキリスト教徒が内部のものを全部運び出し、地下都市の入口を塞いで地上生活に戻ったことになる。この点も未だに不明らしい。

カッパドキア地方には此のような地下都市は大小400近くあるようで、このカイマクルが最大規模と言われている。

今から1100年から1300年の昔、彼方此方で戦乱の火の手があがり、驕声が谷間にこだましていた頃のカッパドキアの地下都市で、多くのキリスト教徒たちは、息をこらして生活を送っていたのだ。彼等の心中は、天に叶った事をしておれば、必ず神は人間を見殺しにはしないという、固い信念に生きていたのであろう。

カッパドキア～アンカラ～寝台列車

カッパドキア地方における9世紀～11世紀頃のギョレメ渓谷の岩窟修道院や、カイマクルの地下都市は、地中海に面したペルガモンやエフェソスの強い陽光を浴びた遺跡に比べると、暗さを感じるのには仕方がない。

しかし、自然の景観の素晴らしさに於ては他の追従を許さず、絵葉書のような奇形の美を楽しませる所は、世界を眺めても類は僅少であろう。東洋的に表現すると文人墨客を魅了させる独特のものと称賛の言葉を贈るだろう。

17・00にカイマクルを発ち、各人各様の感想を抱いて再びアンカラへとシルクロードを邁進した。一度通過した道には珍味がなく、脳裏に浮かんでいたのは、書物で読んだ「ヒッタイト帝国」の首都「ハットゥシャシュ」であった。

カッパドキア～アンカラ街道の中間点の北方100キロにあるヒッタイトの旧都は、周囲6キロに及ぶ大要塞都市。獅子門、大神殿、地下門、大城塞、聖域などの遺跡があり、世界で最初に鉄器を使用したことでも有名である。再び足跡を残すこともないアナトリア、北方の空を眺めて想像を逞しくしていた。

チュズの塩湖を過ぎた頃から陽は陰り、夕日を浴びて燃えるように赤く染まった西の空、そこから古代人のロマンと情熱が偲ばれていた。次第に蒼然と暮色が迫ってどっぴりと日が暮れ、夜目にアンカラの灯が見えてきた。

無数の銀粉を撒き散らした星群は夜空を覆い、22・00にアンカラ市街に入ってレストランでの遅い夕食となった。

24・00アンカラ発の寝台列車に乗車。1号車1番の縁起の良い部屋が割り当てられた。整理タンスや洗面所も取付けてあり、途上国にしては感じのよい寝台車であった。列車の揺れに誘われるように、うっとりとして来た。

よく使われた一生には安らかな死が与えられるように、よく楽しんだ後には安らかな眠りを与えてくれるもので、ベッドに脚を伸ばすと直ぐ様、無憂華境に入っていた。

4月19日

(木)

イスタンブール着

朝7時に眼を覚ます。天気は快晴。イズミールを過ぎる頃にはマルマラ海（大理石の海の意）は朝の陽に煌いていた。再び眺めたマルマラ海は盛衰興亡の流れの中で大きな歴史を包み、エメラルドグリーン絵の具を溶かしたように青く、どこまでも清らかで心が洗われるようであった。

走っている小アジアの西端は都市の数も多くなり、車窓から通勤する人が見えてくる一方、天幕生活を余儀なくされた貧困者の生活も写り、著しい貧富の差を感じていた。トルコ人が西ドイツへ出稼ぎに行く原因を縮図したようにも見えている。

ペンビールの駅に停車した。列車を待つ人達がホームに溢れ、工場群やアパート群が建ち並んで朝市も股賑をきわめている。海岸線のオリーブの緑を通して眼に映る船舶も激しく往来し、1日の始まるのは朝だったと気が付いた。

列車ボーイは親日家なのだろうか。朝食を各部屋まで運んでくれるサービスである。

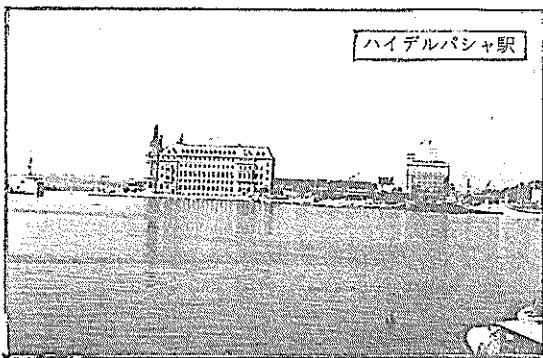
コーヒにパン、ハムエッグ、チーズ、オリーブをパックに詰めた簡単なものであった。

ボスタンスの駅で再び停車した。ホームに並んでいた通勤客と私の視線が一致した瞬間、日本人だと判ったのか手を挙げて愛想を振り舞い、親日国家の雰囲気強く印象付けてくれていた。

燦々と降り注ぐ太陽の光、エメラルド色の澄み切った海、目映いばかりの潮風が列車を揺り動かしているような感じで、イスタンブールへと近づいて行った。

車内のインホメーションは全くなく、ボーイが到着を告げに廻った。添乗員は10時30分到着と案内していたが、1時間前の9時30分の到着だ。のんびりと構えていた一行は大慌てで下車したものの、杜撰な添乗員には呆れるばかりである。(右はハイデルパシヤ駅の全景)

下車した駅はウシュクダルの「ハイデルパシヤ」駅であった。ウシュクダルはイスタンブール市内のアジア側の街で東洋の西端だ。今はボスポラス大橋で結ばれているが、連絡船も頻繁に運航している。



前回イスタンブールを訪れて早10年の歳月が流れた。再度の足跡は「命に過ぎたる宝なし」という実感を味あわせ、暫く懐かしい眼差しで対岸の西側の街を眺めていた。強大な勢力を誇った古都は強い日差しを受けて曖昧模糊、記憶を呼び起すことは不可能であった。

正真正銘のアジアの果てに立った東西の接点は、私にとっては過去と未来の接点である。その接点を流れる紺碧のボスポラス海峡は、ギリシア語で「日出づる国」という意味があり、旅を続けたアナトリアは「日出づる国」だったのだ。

約7千年前、この地域一帯に起った地震によって海峡が生じ、アジアとヨーロッパに断ち切ってしまった。そしてアレキサンダー大王も西から此の海峡を渡った。又、東からアジアの西端に辿る着いた隊商達も渡ったのである。

欧亚数千年の歴史が次ぎから次ぎへと脳裏に去来して、虫けらのような私が一衣帯水の歴史の海に漂うような心地がしていた。「日出づる国」と「日没する国」をへだてる海峡は、神話時代の神に愛された2人の可憐な乙女の伝説が思い出される。

『ボスポラスの名称の由来』

【1人はギリシアのアルゴスの河神の娘「イオ」で好色のゼウス王に愛され、雌牛の形に変えられた。嫉妬深いゼウスの妻「ヘラ」の眼から隠されたが、嗅ぎつけた「ヘラ」は蛇を送って「イオ」苦しめた。

雌牛となった哀れな乙女は追われ追われて諸国を逃れ、バルカンからトラキア(バルカン東部)の地を下って此の海峡を渡り、遂にアジアからエジプトに行ってゼウスの子を生んだ。

牛の形の「イオ」が渡った此の海峡に「牛^{ウシ}渉る」(ボスポラス)の名がついた。これが海峡の名称の由来だという。】

ボスポラス海峡クルーズ (下図は共にボスポラス海峡図)

ハイデルパシャ駅を10・15に発ってバスは海峡沿いに北上し、ウシュクダルの街を通過した。アジア側のウシュクダルで想起されるのは「ナイチンゲール」のことであった。

1853～56年にかけて、ロシア対英仏トルコ連合軍の間で戦ったクリミア戦争(黒海の北部の半島)は激烈をきわめ、戦死戦傷者は当時のコンスタンチノーブルに後送された。コンスタンチノーブルのアジア地区にあった兵舎に於て、「ナイチンゲール」が看護のために活躍した有名な地である。今を去ること130年前の歴史を、感慨深く思い出しながらウシュクダルの街を眺めていた(クリミア戦争ではトルストイも従軍しており、ロシア軍7万対連合軍20万の35日間の会戦であった)

観光船に乗り継いで海峡クルーズの旅が始まった。陥没で造られた海峡に大自然の驚異を感じながらデッキに立つと、戦略の十字路でもあったボスポラスの青い流れは、又もや昔のことを想い出させた。

何世紀にもわたる東西ユーラシアを結ぶ役割を果たしたトルコの歴史を知ること、正しい世界史の把握には不可欠のことであるからだ。

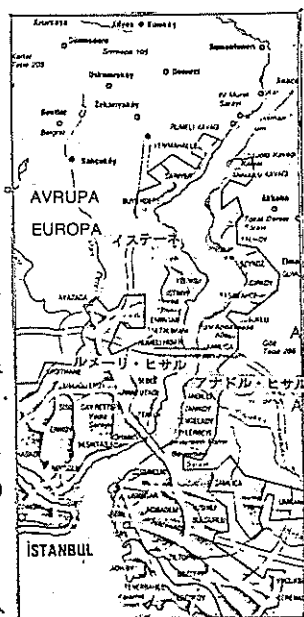
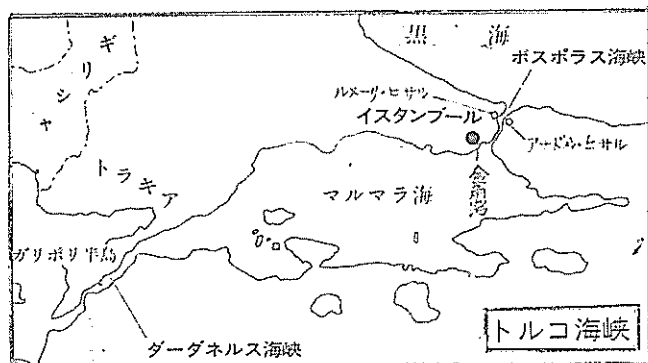
神の狡知か自然の悪戯か、トルコは黒海と地中海を結ぶ2つの海峡(トルコ海峡と云う)、ボスポラスとダーダネルスの両海峡によって分断されている。どの国が此の水路を支配するか、戦略上の要地として世界の注視の的となり、過去250年にわたって欧州列強の争奪の目標となった。

時代は変遷し、往時の海軍力に代わって航空機・ミサイル・宇宙兵器の時代となった現在では、海峡の価値は当然低下しているが、トルコ人にとっては「ロシアにトルコ海峡を取られるくらいなら、死んだ方がましだ」と言わせた心中は理解できる。

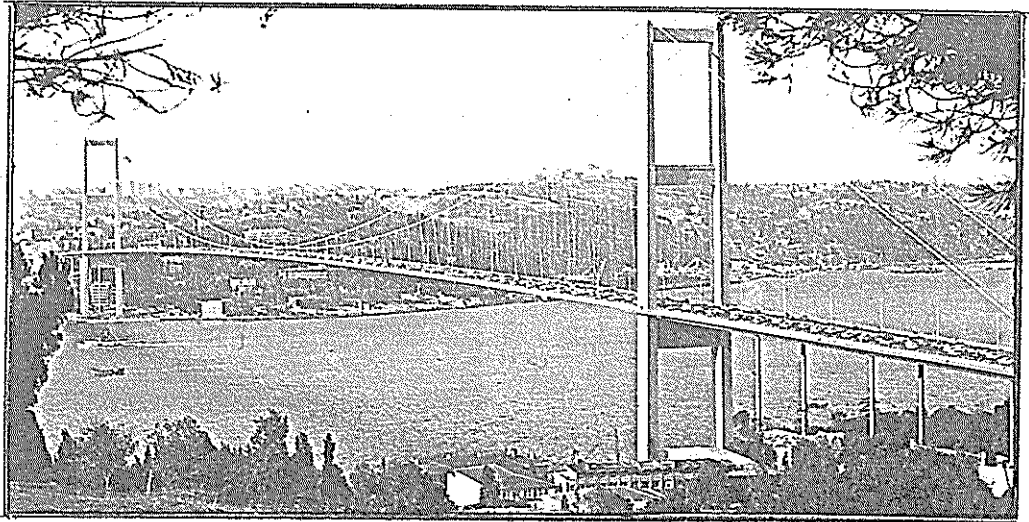
太陽が一杯の清い流れを挟んだ兩岸の自然は美しく、船上から眺めるイスタンブールの景観は最高と云われ、アジア側の眺望もまた完成した一枚の絵のようだ。称賛に値する兩岸に生活する人達は伸び伸びとした環境を与えられ、現在は桃源郷のような平和の空気が漂っている。

行き来する船舶の中で、トルコ船籍は船体を赤く塗装して一際目立っていた。前回訪れた時には此のクルーズはなく、私は童心に返ったように微に入り細に入り記憶に留めようと、海峡の水面から陸地の隅々まで凝視し続けていた。

前方に雄大なボスポラス第1大橋が天空に浮かんで見えてきた。長さ1074mの



橋は、アジアとヨーロッパを陸続きにした有史以来の陸路である。英米日の国際技術協力によって設計されたが、残念ながら日本は入札に敗れた橋だ。（下は第1大橋）



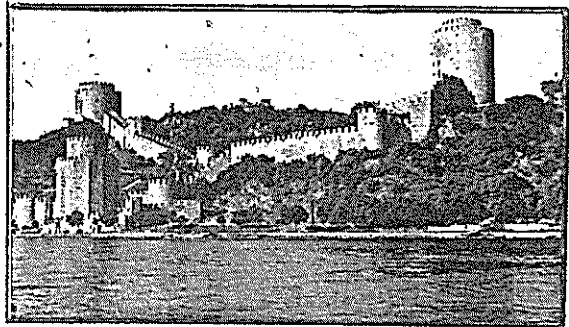
目映く輝く暖流にカモメが飛び交い、エメラルド色の水と風とが東西に吹き渡り、長閑な水面を見入っていると海底に引き込まれそうで、それだけ海峡の海は個性を持っていた。

右のアジア側に建っている壮重感の溢れるペイラルベイ宮殿（17世紀創建）は、その堂々とした影を海面に映し、丘の緑の中に赤紫の花が咲き乱れて美しい背景を作っていた。ボスポラスは将に紫紺の海峡であった。

心を潤すように水飛沫をあげて北上する船上から、大自然の山の彩りの左側に、待望の「ルメーリ・ヒサル」の城砦が眼に留まった。前回も虎視眈々としていたが果たせず、漸く願望が叶ったのだ。

このクルーズ参加の目的がルメーリ・ヒサルだっただけに、血が逆流するほどの喜びであった。喜びや幸福は機会を捉えなければ得られないのだ。

写真を撮ることも旅の仕事だと、記憶が薄れないように各角度からカメラを向けた。



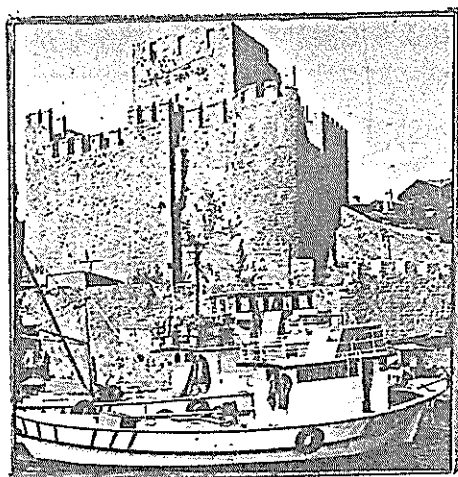
オスマン・トルコのメフメット2世が1452年、ボスポラス海峡の中ほどの西側に、僅か3ヶ月で築いた歴史上の城砦である。彼はここを拠点にして1453年、コンスタンチノープルを攻撃して陥落させたことは、戦史の上からも有名だ。（上の写真はルメーリ・ヒサル）

ルメーリとはヨーロッパ、ヒサルは城砦を意味している。

一方、ルメーリ・ヒサルの反対側（アジア）の町の中ほどに、「アナドル・ヒサル」の城砦が見えていた。1392年、バヤズィット1世によって築城されたもので、海峡の中で最も狭い（760m）所を扼している。東西の両古城は海峡を睥睨して聳え、歴史上からも景観上からも絶賛すべきものであり、満足の至りであった。

(右の写真はアナドル・ヒサル。アナドルとは古名の地名)

オスマン・トルコを彷彿させる2つの城砦の直ぐ北側に、日本企業が建設したボスポラス第2大橋が天の橋のような威容を現わした。この橋の水面に映る影は更に美しく、海は風のない湖のように穏やかだ。これは「海は青羅の帯をなし、兩岸は碧玉の簪の如し」と形容するに相応しい眺めである。



山紫水明の文化の香りが漂う中に大統領別邸が見えている。明鏡止水の心境で楽しんだクルーズも愈々終わりが近づいたらしい。もう直ぐ北は黒海ではないだろうか。

沿岸の共産圏諸国は民主化の波におされて動乱状態を呈している現状だ。黒海から野火のように音をたてて崩壊する風が聞こえて来るような気がする。そして又、遠い昔の血を吐くような苦しみが、流れる海水に染み込んでいるようである。

ヨーロッパ側の小さな港に多くの舟が繫留され、明るい雰囲気のある街が岸辺に伸びている。このイスタンブールの港が観光船の終点となっていた。海面に白い泡沫の帯を引いて往来する船舶を眺めながら、鮮魚料理専門のレストランで腹の虫を喜ばしたのであった。ボスポラス海峡の若干の数字を下記しておく。

- ①両海岸の長さは約30キロ、 ②最大幅3、500m、 ③最狭部幅760m、
④水深50～75m、 ⑤最深部100m、 ⑥水流は、表面は黒海からエーゲ海へ流れ、水面下40m以下は黒海に向かって逆流する重層海流である。(塩の濃度の関係からこの現象が起り、黒海の方が濃度が薄い) ⑦年間の南北両方向通過船舶数は平均約3万隻。

昼食を終えて15・00にイスタンブールを発って海岸道路を走ると、海辺の所々に大公望が糸を垂れている。黒く霞んだ大橋も見えている。丘に咲く紫紺の花盛りは別天地のようだ。心行くまで海峡の風情と優雅を堪能しながら、イスタンブールへと進んで行った。

軍事博物館

バスはイスタンブールの金角湾の北の町「ベイオール地区」に入り、長く続いている大きな建物の建った山手で停車した。石垣の前の道路に沿って大口径の砲身が、100mにも及んで整然と据付られていた。

恐らく1453年のコンスタンチノーブルの攻城戦でメフメット2世が、奇想天外な艦隊の山越え作戦を強行し、金角湾に雪崩込んで勝利を収めた時の記念の場所であろうか。想像した通りだったが現在は軍事博物館となっていた。

館内に一歩足を踏み入れると其処には幾重にも兵舎が並列し、その前庭に大小様々な昔の砲が並んでいる。博物館と云うものの軍隊が駐屯しており、古都防衛の新鋭部隊であろうか、毅然として隊伍を組んで行進していた。営内の中央広場に据付られた

途方もない攻城砲は多分コンスタンチノーブル攻略戦に使用したもののだろう。

(右は攻城砲の威容)

我々は砲口の方角にある大講堂に案内された。自然に昔とった杵柄というか、鶯を鳴かせたこともある春秋に富んだ時代を偲ばせていた。突然、昔の甲冑を身に付け、赤や黒の制服を着用した一隊が

「朋あり遠方より来たる」といわんばかりで入場した。軍刀を吊るし槍を持ち、鐘や太鼓を持った勇壮な姿は、オスマン・トルコ時代に逆戻りした感じである。

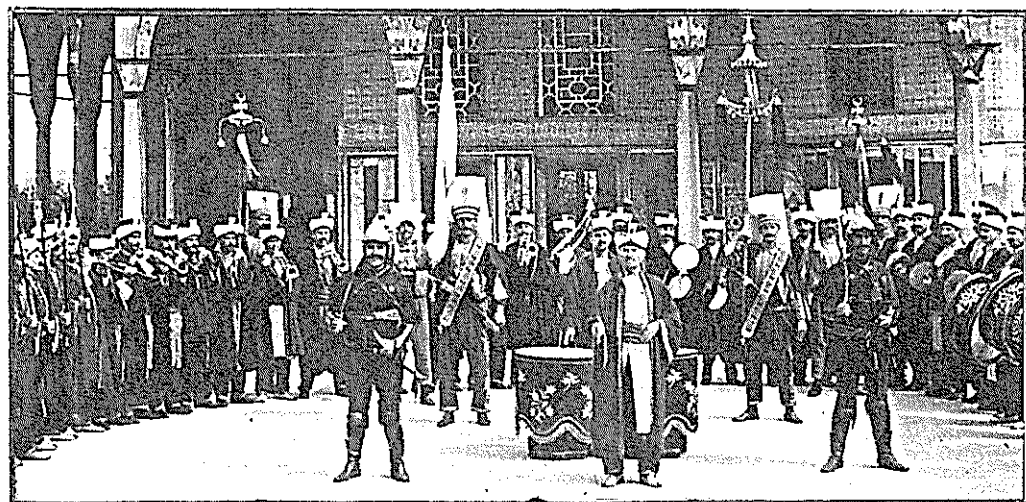
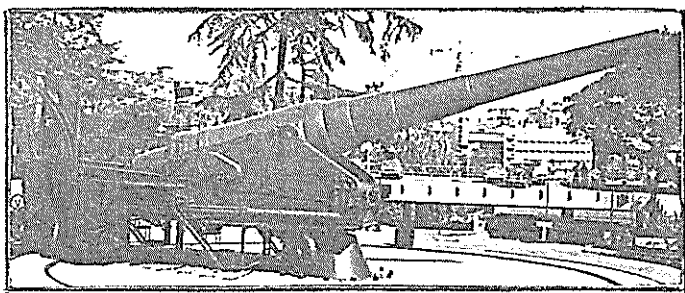
早速、万雷の響きのような軍楽隊の演奏が開始された。予定外の軍楽隊の参観は、日本人を母に持つガイジ嬢が特別に依頼して、日本人を歓迎するためであろうか。感謝に耐えない嬉しい歓待であった。

彼等から、虎に翼が生えたような力強いものを感じた。トルコ人には血の借りは血で返すという血が流れている。其の武人らしい精悍さは私も知っていた。トルコの陸軍士官学校に、「世界三大勇敢な国民はトルコ、日本、ドイツ国民である」と掲げられていることは、私も軍人時代に聞いたことがある。

講堂の個室に略章を佩用した隊長が、テーブルを前にして泰然と腰を掛けていた。弓矢の礼というか、早速、私は昔の日本陸軍将校だったと挨拶した。彼は親日家らしく立上って笑みを含めて手を差し延べ、3ヶ月後に訪日するからと再び握手し、その光景を記念写真に収めたのである。

彼との撮影を終えると、「千日兵を養うは1日の為」とか「兵法は人を斬るに非ず」或は「安きに危きを忘れず」などの諺が、自然に頭の中に浮かんでいた。

トルコ軍には光輝ある伝統の歴史が厳然として遺されている。しかし、伝統は相続することは出来ないのだ。それを望ならば大変な努力を払って手に入れなければならない。そのように私は心の中で願っていた。(下は軍楽隊の勇壮な整列)



尚武の心のトルコ

トルコ国民は尚武の民族である。歴史的にもオスマン・トルコは剣によって起ち、剣によって滅んだ。その600余年の歴史の課程で大小72回もの戦争を繰り返してきた民族である。

トルコ人は誇り高く正義感が強い。それに相応しく体つきも頑丈で、東ローマ帝国千年の支配を倒し、アジア系民族で初めて西欧の地を400年にわたって覇権を維持した国民である。

実際、オスマン・トルコは経済、商業の経験や才能は殆ど無縁であった。商業的活動や貿易、産業活動はユダヤ、アルメニア、ギリシア或はジェノア、ベニスなどの2級民族の手にまかせてきた。

戦争は彼等の運命であった。更に悪いことにイスラムとキリスト教の対立のために、トルコという言葉は好戦的、暴力、残酷などの同意語として西欧に流布されるようになった。

こうしてトルコ人は西欧から野蛮な邪教の悪魔の代表のように思われてきた。尤も、良い意味では「トルコ人は強い」などと言われて、「尚武の国トルコ」を意味することもあったが、残酷や好戦性や凶暴を意味することが多かった。

兎に角、トルコ人は商業や経済に余り適した性格を持っていなかった。トルコは政治や軍事を中心に組織されてきた。だから伝統的に軍はエリートである。祝祭日などの行事の際にはオスマン・トルコ軍楽隊の演奏行進が行われる。赤や黄や青、色彩豊かな衣装も美しい古式の服装で、新月の国旗を高々と掲げ、武具甲冑に身を固めた兵士や軍楽隊員たちの行進は、誠に目を奪うほど華麗だという。

軍事博物館での勇壮なラッパや太鼓の連打を耳にしていた時、何時かバルカン、アラビア、北アフリカの山野を進む堂々たるオスマン軍団の進軍光景が、目に浮かぶようであった。

トルコでは軍は国民の過去の栄光を体現する代表階層であり、聖域と見なされている。現にトルコ軍は常備軍60万を有するNATO最大の陸軍国である。また行政機構においても、退役軍人が多くの要職を占めていると言う。

当然、熱烈な愛国的国民である。例えば新月と星のトルコ国旗は、日月星辰を崇拜した中央アジア騎馬遊牧民のシャーマニズムからきたものだが、全国の何処でも何時でも、此の赤地に白の三日月と星を染めぬいた国旗が翻っていた。この点は日本人として誠に恥ずかしい事である。

尚武に関係ないかも知れないが、トルコは明らかに男性社会の国だ。それは嘗て勇猛な騎馬民族の痕跡かも知れない。又、歴史的に徹底した反ソ感情が強い。17世紀以来から最近まで、トルコ人の総ての世代がロシアとの戦いを経験しているからだ。

日本人として想い出されるのは、1904～5年の日露戦争の際、トルコはイギリスの支持の下に、19隻のロシア黒海艦隊のバルチック艦隊への合流を阻止し、日本を援助したことがある。感謝しなければならない。（トルコ海峡閉鎖）

トルコは東西の接点であり南北の接点でもある。このような比類のない特異な位置を占めている関係から、中立が困難である点は同情しなければならない。

ガラタ橋の散策

軍事博物館を去って各所に聳えるミナレットを眺め、大都会の交通ラッシュに悩まされて車は遅々として進まず、苛々しながら17・00にブルーモスク近くのスルタン・ホテルに着く。

自由行動の時間となり、思案の挙句、ガラタ・ブリッジと行先を告げてタクシーに乗車した。

コンスタンチヌス大帝によつて工事が開始され、378年、ヴァレンス帝時代に完成した800mの大水道橋が今もなお大きな図体を遺し、混雑に拍車を掛けていた。

水道橋の下を通過して金角湾に突き当たる手前を右折した。敗戦直後の日本のような薄汚い湾岸道路の渋滞は、想像を絶している。

イスタンブールのシルケシ駅に近づくにつれて、信号機がない性か人道、車道の区別も付かないほどだ。人と車の雑踏はタクシーの停車する余地もない。「京に田舎あり」とは此の事で、前回訪れた時と少しも進歩の跡が見られない。

歩行者優先か車優先か、全く交通整理を行わない道路を命がけで横断し、漸くガラタ橋の袂に辿り着いた。何百年も経過した橋であろうかと思うほど、依然として黒ずんだ橋は未だ使用されていた。(現在、直ぐ西側に新橋を建設中)

先ず往路は階上の橋を歩いた。通勤者の退社時間と重複したこともあって、人の波を掻き分けて歩く状態では、心の散策にならない。生き馬の目を抜くような雰囲気の中に、対岸の「ガラタ塔」が見えてきた。6世紀の始め頃、城砦の要としてガラタ地区に立てられた塔である。元の名は「キリストの塔」という。

前に訪れた時はガラタ塔附近のホテルに宿泊し、実に懐かしい景観だ。一方の金角湾は湖のように穏やかで、アタチュルク橋(1930完成)の頻繁な車の往来が見えていた。金角湾は其の名の通り、その形が牛の角のような格好をしており、夕日を浴びた海面が金色に輝くように見えるから、其のように呼ばれるようになった。

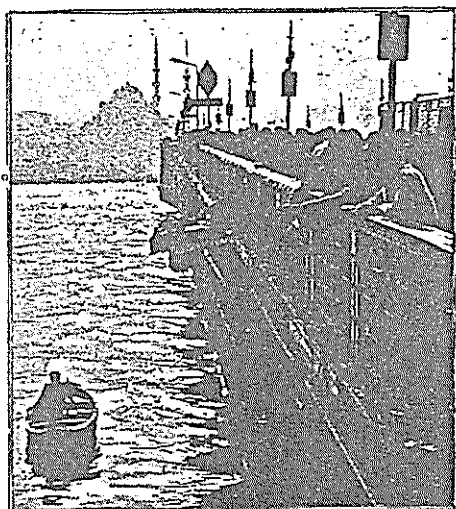
ガラタ橋は1913年にドイツの資本によって完成されて以来、今日までイスタンブールの要としての役割を果たして来た。その存在は1つの象徴と云えるだろう。

構造は一部が浮き橋になった2階建橋梁で、階上は両側に歩道のある道路となっている。階下は商店や船着場として使用され、通勤用の定期船や観光船の発着場にもなっている。

徘徊する気分も吹っ飛んで、対岸のベイオール地区に脚を運ばずに引き返した。橋の途中から階下の商店街に降りると、急に魚臭い喧騒な世界に一変した。

食堂のボーイ達の「日本人、鯛あるよ」「おいしいよ」と云う呼び声が、軒を並べた各店から一斉にかかってくる。黙って通り過ぎると「日本人、金ないね」と嫌味たっぷりの言葉が飛んで来た。そこにトルコ商人の魅力があるような感じがする。

短時間であったが、ガラタ橋で出会った光景は何れもイスタンブール独特のもので、この界隈の香りが異国情緒となって染み込んでいるようであった。



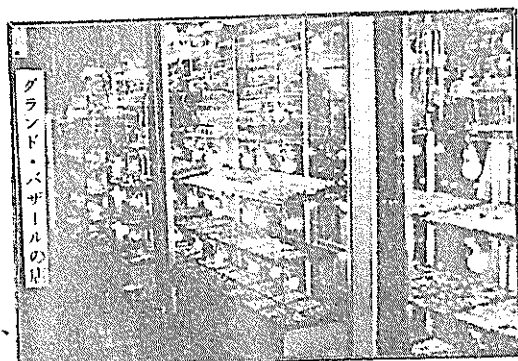
4月20日 (金)

イスタンブール グランドバザール

時間が過ぎるのか早いのか遅いのか、これに気付かずに時間を過ごすことが散策であって、最も幸福な時であろう。

午前中は自由行動であった。自然に命の洗濯だと思いながら、ホテルに近いグランドバザールに脚は向いていた。

市街中心部の目抜き通りをゆっくりと徘徊し、愛想のよい露天商で絵葉書を求めて、記憶に残る繁華街を散策していた。



10時前というのに1日の混雑が早や始まり、地元の人の素顔を垣間見ながらイスタンブール大学の前を通り過ぎた。人の波も増え出し、心を弾ませている観光客の足は次第に速くなっている。

遠い記憶の隅にあったバザールの石の門は昔そのままの姿を現した。娘のためにトルコ石を買った過去が脳裏に閃いて実に懐かしい。

土地の人は此处を「ビューク・チャルシュ」(大市場)とか「カパル・チャルシュ」(屋根付き市場)と呼んでいる。その名の通り屋根で覆われた大バザールは、トルコ人や世界中の観光客の集まる名所である。

グランドバザールの歴史は古く、現在の場所はビザンチン時代も市場だったという。1453年にオスマン・トルコのメフメット2世はコンスタンチノープルを陥れ、ここを新都としてイスタンブールと改称し、この市場も彼によって整備拡張された。

現在の建物は此の時の物でなく、数度の火災や地震に遭遇した後、1893年に再建されたものである。バザール中心部のベデステンと呼ばれる所だけは、18世紀初頭の建造物で、頑丈な石で造られている。(正面入口附近)

このベデステンは由緒ある店が多く、金銀細工の装飾品、銅製品、絨毯、陶器、骨董美術品等の店舗が、所狭しと並んで客の眼を引き付けていた。通路ごとに同種類の店が並び、全体としてのバザールに一種の統一感を与えている。したがって初めて訪れた人でも道に迷うことはないようだ。(上の写真は金銀宝石店街)

魅惑の世界に誘われるように電光石火とした金銀細工の店に入ってみた。間髪をいれずトルコ茶のサービスだ。前回の経験からすると、如何に上手に値切るかということと、決して買い急ぎをしないことが大切で、選びすぎて粕を掴まないことである。

しかし現実問題として余り安く言い過ぎると、プライドの高い商人に罵声を浴びせられることもあり、逆に言い値で買えば大損だ。値段の交渉は観光客にとっては一種のゲームで、そこに楽しみがあるのではないだろうか。

ウインドショッピングを楽しみながら感じた事の1つは、小学生の子供が客の交渉相手をしていたことである。生き馬の目を抜くような商いは「畳の上の水練」というか、理論倒れでは実際の役に立たない。「青は藍より出て藍より青し」と、親に優る商人を目指す商魂の逞しさには感服した。

ショピングの醍醐味を凝縮して味わえる買物天国は、矢張り女性の天国のようであった。人と物とが溢れ返る人混みの中から一人の子供が近寄ってきた。可憐な笑顔でトルコ独楽を廻しながら、買ってくれと執拗に食い下がっている。同情心が湧いたのか、孫5人のために買った独楽だけが私の唯一の買物である

経済大国となったと自負している日本。世界の観光客が集まる大バザールでは残念ながら円は通用しない。どこが金持ち日本だろうかと疑いたくなる。このことを考えると、経済大国日本も粗いモザイクの絵に過ぎない感じがする。

市内観光

午前の自由時間が終わって12時から市内観光に移った。私の脳中には高感度フィルムのように市中のことが焼き付いている。

この都市はコンスタンチノーブルと呼ばれていたが、更にその前はビザンチウムと呼ばれた。ビザンチウムという歴史が約千年、コンスタンチノーブル時代は千百年余、イスタンブールとなってから既に500年以上を経ている古都である。

イスタンブールの歴史の長さは、都市としてのローマとほぼ同じ。コンスタンチノーブル時代の町並みや建造物は、そのまま脈々として生き長らえ、今日も伝統を深く呼吸し続けているのが特徴である。

日本の奈良や京都のように、現在も昔の建造物や様々の伝統文化が生きている古都の代表が、イスタンブールと言える。

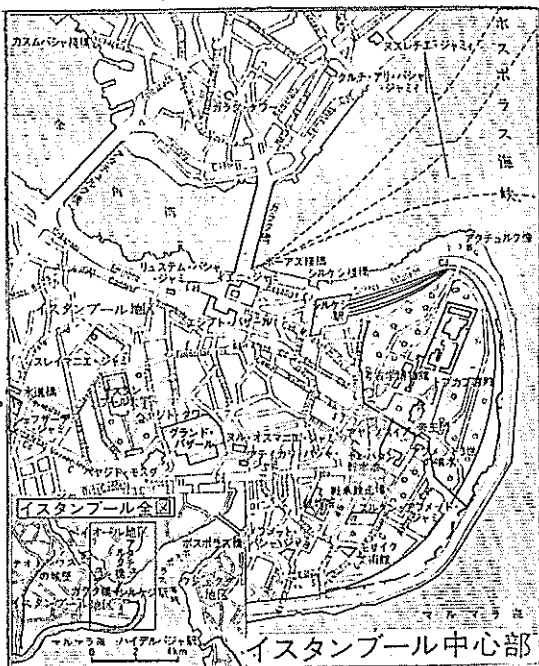
此処には我が法隆寺（木造建築では世界最古）よりも約1000年以前に建てられた聖ソフィア寺院が、創建当初のままの雄姿で聳え立っている。

イスタンブールは古くから東西文化の架け橋の役目を果たしてきた。古くはギリシア人の植民都市ビザンチウムとして、ギリシア～オリエント世界の要をなした。4世紀にはコンスタンチヌス1世によってコンスタンチノーブルと改名され、ここに新しいローマ帝国の都が置かれた。

それ以来、シルクロードとして知られる東方からの商業路は、ここを終着地とするようになった。ここから西の地域へは、地中海を航行する船が輸送の主役となった。

ローマ帝国自体は西暦395年に東西に分裂したが、地の利を得た立地条件に支えられたコンスタンチノーブルは、東ローマ帝国（ビザンチン帝国）の首都として、オスマン・トルコに滅ぼされるまで、以後1000年以上の長きに渡って不落の帝都を誇ったのである。

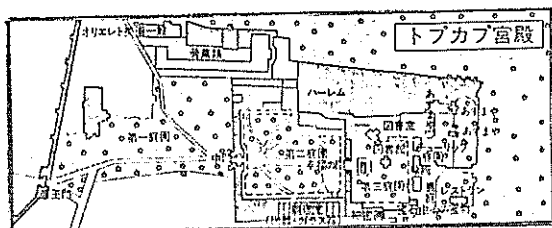
現在トルコの首都はアンカラに移ったが、以上のように此の都市は他の都市に見ら



れないものがあり、洗練された質の高い文化遺産や善を尽くし美を尽くした街は、何回訪れても魅了するところばかりであった。

トプカプ宮殿

先ず最初の見学はトプカプ宮殿であった。トプは大砲、カプは門の意で、1467年にボスポラス海峡からマルマラ海を一望できる風光絶佳の地に宮殿を建てたのが始まりである。



その東門は砲兵で守られ、塔には巨砲が据えられていたので、トプ・カプと呼ばれるようになった。

1918年、トルコ共和国化の兆候が見えてくると、スルタン（皇帝）は宮殿を博物館として一般に開放した。しかし両雄は並び立たず、遂にオスマン・トルコは陥落の運命を辿った。

10年前と違ってバスは狭い帝王門をくぐって第庭園に入った。今回は帝王門から第1庭園へと歩き、宮殿の名の由来となった大砲の並んでいるのを見ることが出来た。

3年ほど前からトルコの観光ブームが起ったために駐車場がなくなり、止むをえず第1庭園を駐車場としたらしい。実に沢山のバスの波で埋まっていた。

二重城壁に囲まれた宮殿の入口の左右には、八角形の塔が立っている。これはオスマン・トルコ時代に幽閉の場所として使用されていた。今回は門前市をなす賑わいで説明する余裕もない混雑ぶりであった。（上の地図参照）

中門を入った右側の建物から順を追って見学となった。此の展示室はオスマン・トルコ帝国の威力を偲ばせる豪華美麗な物ばかりで、特に東洋の陶器や金銀製の食器、数々の宝石類を嵌入した小道具や武具などが多い。

又、オスマン帝国時代のスルタンの玉座や玉衣など、意匠を凝らした絢爛たるものが展示され、イスラムの絵画などの東洋的な雰囲気のものも観賞できる。

真の意味で芸術的価値の高いものは宋、元、明、清時代の中国陶磁器類である。これほど中世中国陶器を持っている所は世界にないだろう。別のコーナーには素晴らしい日本の伊万里焼が陳列され、陶磁器類の数は優に1万点を超えるという。

例えば元代の染付のうち、草魚を中心に描かれた大皿（右の写真）と、竜や白馬と牡丹の大模様を図柄にした壺は逸品中の逸品で、再び眼にした感激は入であった。



これらの陶器は如何して入手したのであろうか。17世紀の初めに設立したオランダの東インド会社が、船でジャワ（インドネシア）に運び、まわりまわってイスタンブールの商人の手に入り、スルタンに贈ったのであろうか。

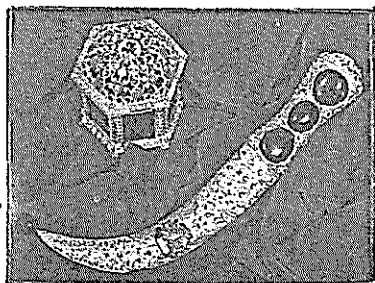
オスマン・トルコ帝国の王侯貴族たちは、なぜ東洋の陶器を珍重愛用したのか。当時の東洋陶器の方が西洋の物より遥かに凌駕していたのに違いない。嘗のマルコ・ポーロの東洋見聞旅行に端を発して、彼等は東洋への強い

関心を抱いていたことが推察できる。前は写真撮影禁止であったが、今回は自由にシャッターを切ることが許され、観光ブームに应运していた。

兎に角、凄い人混みは殆ど団体旅行のようで、押されながら次ぎへと進んだ。この展示室にはエメラルドの短剣や86カラットのダイヤモンドが陳列してあるところであった。(右の写真はエメラルドの短剣)

トルコの経済が危険になった時には、この宮殿のサファイアの1個を売りさえすれば、それで解決すると説明をしていた前回の訪問の時を思い出す。

「陶朱・猗頓の富」(中国で大財産を遺した二人の人の名前で超富豪の意)と形容すべき此の宮殿博物館。世は夢のようで財宝も亦、幻のようであり、凡ての富は陽炎のようなものではないだろうか。



「浮き世は7度」と云われている通り、良い時代があれば悪い時代もあり、栄華は永続しない習わしだ。世界の人達の羨望の的となっているスルタンの豪華な生活、彼等は今、草葉の蔭でどのように回顧しているだろうか。

百花繚乱の第3庭園からは、ボスポラス海峡やマルマラ海は一望のもとであった。海辺にはローマ時代の古ぼけた城壁の残骸も見えている。スルタン達は優雅な暮らしの合間に、千変万化するエメラルドの海をハレムの美女に囲まれ、有頂天になって眺めていた光景が目につくようだ。

「荒城の月」ではないが、「昔の光今いずこ」の歌詞を口ずさんで北側に向かった。金角湾を臨む金ぴかの展望台は以前の姿で建っていた。ブルーモスクから聖ソフィア寺院が美しく輝いて、絶好の撮影場所となっている。

紺碧の海、輝く太陽、絶景の展望台に立つと、時間に追われた旅から開放されたような心地がする。そして金角湾の黄金色の水は何時までも我々を引き付けていた。

「水は舟を載せ、又、舟を覆す」という故事がある。舟を浮かべ舟を沈めるのも水であるように、政治を良くし悪くするのも、其の責任は一体誰にあるのか、と思ひながら展望台から離れた。

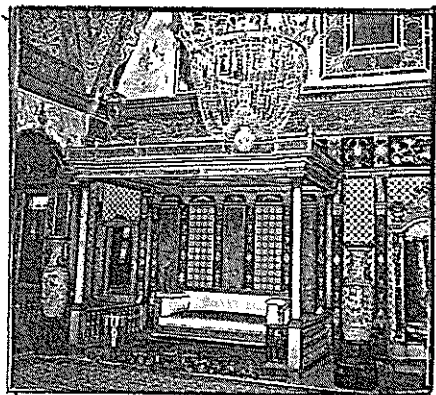
その西側に華麗極まるハレムの建物が並んでいる。国は富み兵は強く文化は絢爛となると次ぎは色欲だ。又、多くの人の血と汗と能力を絞り取った後も色欲である。

「恋は思案の外」と云われるが、常識では考えられないほど理性を失わせる。

500人の美女を侍したことは歴史の示す通り、そこから葛藤が始まり、国を亡ぼす起因となったことは洋の東西を問わない。「恋は無情の種」とは良く言ったものだ。(右は豪華なハレム)

多くの団体が波のように群れを作り、会話も鼓膜に届かないほどの中を、滄桑の変のあった宮殿も見納めだと中門に向かった。

数千年にわたって大文明を沸騰させ、発酵させた数々の王侯文化に触れ、激しく変化を続けてきたトルコの歴史を学び、知識は万代の宝だと思ひながらトプカプ宮殿を去った。



聖ソフィア寺院

バスは往時のギリシア正教大本山であったアヤ（聖）ソフィア寺院の前にある広場に停車した。現在は博物館となっている。（右は全景）

前回と同様に中に入った途端、天井の高さに驚嘆の眼を向けなければならなかった。兎に角、高さに圧倒される。ドームに足音が響き、ドームの中央の真下で手を叩くと、その音は建物の隅々まで響きわたっている。

余りにも大きなドームを見上げるだけでも眩暈がするほどだ。そして石畳の床からギリシア正教の信者の祈りが、聞こえて来るような錯覚に陥るようだ。

2階に登って見上げるアレクサンドロス帝、コンスタンチヌス帝などのモザイクも、我々を一瞬のうちにビザンチンの世界に引き込むような魅力がある。

ビザンチン帝国千年の都の象徴は、この聖ソフィア大聖堂である。ビザンチン文化最大の華と言ってもよいだろう。トルコの人々はアヤ・ソフィアと呼び、ビザンチン時代の人々や現在のギリシア正教徒はハギア・ソフィアと崇めてきた。

最初にアヤ・ソフィア教会堂が建てられたのは、遙かコンスタンチヌス大帝の治政下325年であった。その後404年の動乱で焼け落ち、415年に再建された。532年に再び動乱が起り、皇帝に反抗する暴徒が火を放って2度目の倒壊となった。

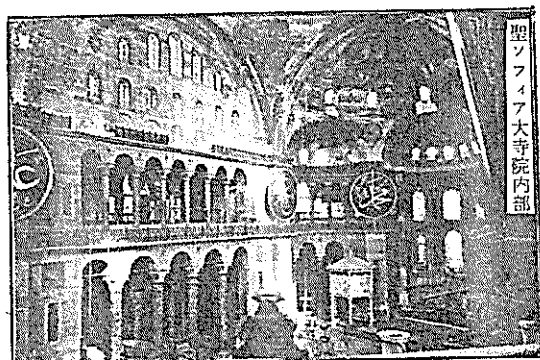
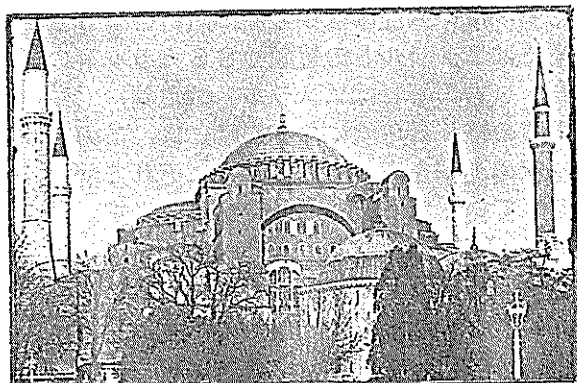
現在の聳え建っている大聖堂は537年に完成した。莫大な費用と労力を要したことは言うまでもない。皇帝の権利を最大限に駆使し、エフェソスのアルテミス神殿の大理石の柱や、シリアのバールベック神殿の柱も運ばれ、全ローマ支配下から最高のものが集められた。

その規模は縦77m、横71m、高さ55m、中央ドームは直径32mにも達し、内部は随所にモザイクが施され、柱頭には華麗な透しの彫刻がある。

1500年の歴史の重みが充満する内部の空間は、その壮大さを筆舌に尽くすことは難しい。たとえ千人の人が入っても響鳴は天井に吸い込まれて行く。ひんやりとした室内は、拝観者を森厳な雰囲気と誘い込んでしまうようだ。（右は豪華な内部の一部分）

斬新な工夫が凝らされた大建造物は古代からの人間の叡智の結果で、ビザンチンの造形は古典的な匂いがする。

このドームの4隅に立つミナレットは、オスマン・トルコがコンスタンチヌス大皇帝の陥落させた後に、イスラム寺院に改造するために立てられたものだ。内部の構造は



創建当初の状態を保っている。

内部の改造は、キリスト教絵画や聖書物語などを表わした金碧燦然としたモザイクを剥ぎ落とし、上塗りをして隠してある。そしてメッカに向かった礼拝堂と説教壇を作り、本堂の周囲の外壁が整備されている。イスラム教は偶像禁止であるからだ。

偶然の一致というか、キリスト教の聖地エルサレムとイスラムの聖地のメッカが、同じ方向に位置しているのも不思議である。

1935年、ケマル・アタチュルクは記念すべき大建築から宗教性を除き、博物館として公開した。そして壁を清掃している時、モスクに改造したときの上塗りが剥げて、下から見事なビザンチン時代のモザイクが現われた。

例えば入口の直ぐ上にあるモザイクがそれで、中央に聖母マリア、左右にコンスタンチノーブルの都を捧げるコンスタンチヌス大帝と、この大聖堂を捧げるユスチニアス大帝が描き出されている。

歴史に翻弄されそうな大寺院、時の重みに耐えてきた金の魔力は、時空を乗り越えて今もなお人に魅力を与えていた。そして古都の春は、古代の香りを求めて訪れた我々に往時の夢を偲ばせ、おのぼりさんのな気分を吹っ飛ばしていた。

地下貯水場 (55頁地図参照)

聖ソフィアの直ぐ前に昔、使用された地下貯水場がある。ガイドから地下貯水場と聞かされた時には全く記憶になかった。しかし地下に下って列柱と水を眺めた瞬間、大脳は間髪を入れず閃いた。

前回と異なっていたのは列柱の間に渡り廊下が新設され、貯水場の真中まで歩けるようになっていた。水中に336本の石柱が整然と林立している状態が、上から下まで見学できる。

これらの石柱は古代の遺跡から搬入したもので、材質、太さ、柱頭の彫刻が悉く違っているのが特徴である。石柱の下部に人の顔が彫ってあるのは印象的だ。

この町の人達はシスタンと呼び、現在は使用されていない。しかし水深は浅いが水を湛え、舟で貯水場の中を周遊できるようになっている。此处も観光ブームに便乗して盛況を呈し、順番を待って40名単位で入場していた。

この古都の古い歴史を如実に物語る王侯文化は、地上ばかりでなく地下にまで及んでいた。当時としては不思議な場所であり、緻密な測量、設計と考案の程度の高さには感服させられた。

ブルー・モスク

地下貯水場から道路を挟んだ反対側が、ブルー・モスク（正式名はスルタン・アフメット・ジャミ）の庭園となっている。絢爛豪華な文化の象徴として6本のミナレットが天を刺すように聳え、土地の人達の篤い信仰に支えられている。

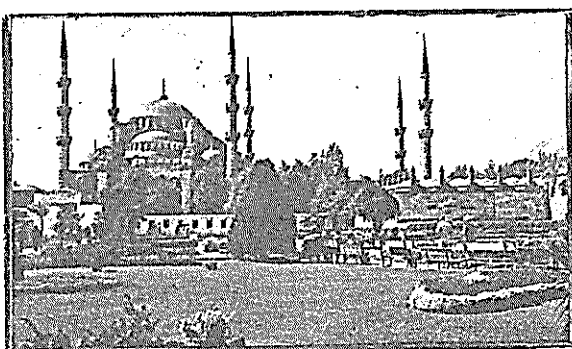
青緑色の美しい草花模様のタイルで堂内が覆われていることから、欧米人はブルー・モスクと呼び、私の網膜には強く印象に残っていた。

オスマントルコ帝国が最強を誇った1616年（日本では徳川家康の没年）に完成、

帝国の黄金時代を飾った壮麗な建築は、今もトルコ最大のモスクである。

ドームの直径27、5m、高さ43mの堂々とした建物は、イスタンブールの何処からでも遠望できる。謂わばシンボリックな存在だ。

第1、第2中庭に続いて本堂が建ち、長方形の境内の中に6本のミナレット（尖塔）が立っている。うち4本は本堂を取り巻くように4隅にあり、他の



2本は少々低く中庭の前面を飾っている。このような長方形の境内には、ミナレットを6本にする方が適切だと建築家が考えたのであろうか。（上は全景写真）

しかし伝説によると、スルタン（皇帝）が金色のミナレットを建てるように命じたが、金と6の発音が似ているために、聞き間違えた大臣が6本のミナレットを建ててしまったと云う。（普通は4本）

後日、6本のミナレットのあるのはメッカのモスクだけだと判明し、恐れ多いということで、スルタンは急遽メッカに7本目のミナレットを寄進した。

モスクの前にローマ時代の競馬場の遺跡があり、その中央に建っているオペリスク（4角の塔）は、エジプトのカルナック大神殿（ルクソールにあり、私も拝観済み）にあったものである。

前15世紀にエジプトのトトメス3世がシリアに遠征し、大勝利を博した旨の刻文がある。それをローマ時代に掠奪し競馬場の飾りとして建てたものだ。美しい淡紅色をした花崗岩の一枚岩で出来ている。

モスクの入場は自由で見学者に対しても制約はなく、写真撮影も禁止されていない。一步足を踏みいれると、敷きつめた絨毯の臭いのようなものが鼻につき、その上を歩いてみると湿っぽい感じがしていた。

大ドームの薄暗い空間には2万6千個のランプが吊るされ、参詣者の中には跪拝する人、じっと坐っている老人、ぼんやりと窓越しに外を見ている者など様々である。宗教は魂の休憩でもあり、希望であり、信者達の頼みの綱であって、信仰はあくまでも心の問題だ。

古代トルコの栄枯盛衰の歴史が此のモスクに凝縮し、その厳肅感の溢れている各所於て、敬虔な祈りを捧げている信者に感動し、一礼してモスクを去った。

振り返って天に聳えるミナレットを仰ぐと、古代が蘇ったようなロマンが漂い、自分自身が古代に迷い込まれるような錯覚に陥っていた。全体が一大芸術作品だと胸の奥で賞賛の言葉を贈り、懐かしい限りのモスクから離れて行った。

外には外人観光客を相手にした子供の絵葉書売りが屯して、片言の英語で商売に精を出していた。又、モスクの入口附近には必ず靴磨きの少年がいるのも特徴だ。一応は声を掛けるものの、しつこさから言えばエジプトや中近東諸国と比較にならず、実にあっさりとして感じが良い。

16・00にイスタンブールの観光予定は総て終了し、2度目の古都とも離別の時を迎え、名残りを惜しみながら空港へと疾駆した。

イスタンブールを発つ

イスタンブールには約250のモスクがあり、ミナレットの数は何百本であろうか。日本では昔、江戸は八百八町、大阪は八百八橋、京都は八百八寺と呼んでいたが、イスタンブールは何と形容したらよいだろうか。八百八塔とでも云えば適当かも知れないようだ。

バスはマルマラ海に沿った道路を走った。静かな波はひたひたと岸に寄せては返し、ゆっくりと航行する舟の泡沫の航跡も、昔と少しも変わらないだろう。しかしながら「行く川の流は絶えずして……」という無常感は、この古都では感じない。

この世の中は常なきものではなく、国家は隆昌し、拡張し、やがて老い、最後には朽ちる運命かも知れない。しかし嘗て世界に君臨した民族文明の歴史は、彼等が生き抜いてきた尊い記録である。誇りを堅持して文化を保持してもらいたい。

古都は今も尚、伝統に生きていたことは実に嬉しい。国や人は変わったとしても、東西を結び付けてきた歴史は簡単に私の記憶から去らない。益々愛着を感じた。文化は子宮のようなもので、人間を育て精神の安らぎを与えるものである。

東方ビザンチン文化の宝庫、中世を今日まで遺す百塔の都、この歴史の薫りをかきながら、19・30に機上の人となった。

4月21日

(土) イスラマバード着

歴史は地理を教え、地理は歴史を教えると言われるように、トルコの古代史探訪から数多くのことを学んだ。続くパキстанは同じシルクロードの地続きであり、早くもパキстанへの夢を膨らませて飛んでいた。

世界四大文明の発祥地の一つであるインダス文明のパキстан。国の中央を流れるインダス川流域は、既にBC5千年にインダス文明が発達していた。私は前回、カラチを訪れているが、首都のイスラマバードからタクシラのガンダーラ仏教や、仏教美術の発祥の地を訪れるのは初めてのことで、興味津々であった。

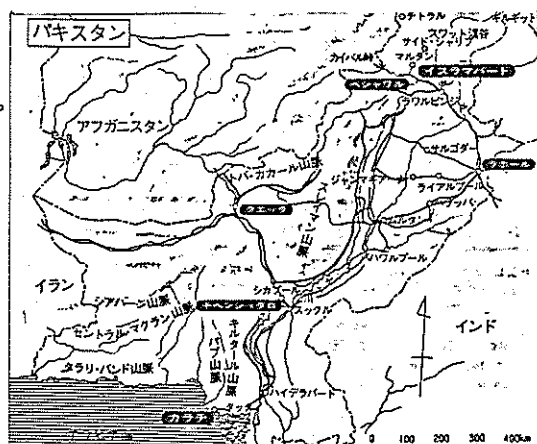
「意馬心猿」とでも表現すべきか、心は早や彼の地へと動いて欲望を抑え難く、搭乗機はラウルピンジ（イスラマバードに隣接した旧首都）のチャキアラ空港に3・30に着陸、イスラマバードのコンチネンタル・リゾート・ホテルに到着したのは4・40であった。午前中は休憩となる。

パキスタンの概要

① 『歴史』

パキスタンの歴史は紀元前2500年にまで遡る。そのころインダス川の流域には高度な文明が発祥していた。

紀元前1500年頃アーリア人（中央アジアの民族）が此の地方を制圧し、や



がヒンズー文化が広まり、その中心はガンジス川流域へと移って行った。

北部地域は紀元前5世紀から700年の長きにわたって、度々ペルシア人の侵略を受けた。紀元前327年にアレキサンダー大王の指揮のもとにギリシア軍が押し寄せ、712年にはアラブ人達が現在のカラチ周辺に上陸し、凡そ200年間、パキスタンの南部を支配した。

この間にイスラム文化がヒンズー文化にとって代わり、人々の生活様式に深く浸透して行った。

10世紀になると、中央アジアから伝わってきたイスラム文化がインド、パキスタン全土に広まり、18世紀に英国が上陸して支配が始まるまで続いた。

1940年に全インド地方のイスラム教徒達が、英国の支配から独立と分割を要求した。こうして1947年、インドとパキスタンは分離し、世界地図に新しい国が描き加えられた。

② 『社会』

古来、数多くの民族移動の通路となったため、人種構成は甚だ複雑である。主流を占めるのは紀元前1500頃、アフガニスタンを通して移動してきたアーリア人（イラン）と、原住民との混血である。概して北部ほどアーリア系の血が濃く、長頭で顔の彫りが深い。

紀元前後にはギリシア人や中央アジア遊牧民のスキタイ系（黒海、カスピ海附近）、そして中世以降にはトルコ系も入ってきた。西北部のアフガニスタンに隣接する地方の住民はパタン人と呼ばれるが、アフガニスタン人と人種や言語がよく似ており、歴史的にも極めて深い関係にあった。

宗教は大多数がスンニー派、イスマイリー派のイスラム教徒である。パキスタンはイスラム圏では文明開花が進んでいる方で、余り堅苦しいことは云わない。女性の写真撮影、異教徒のモスク出入りなども寛容である。

現代文明に汚されていない古代文化遺産は貴重な観光資源と云える。

③ 『パキスタンとインドとの関係』

パキスタンは今から43年前の1947年にインドから別れて、イギリスから独立した国である。嘗てパキスタンは、インドを挟んで2千キロも離れた東パキスタンから成っていたが、1971年の第3次印パ戦争によって分離され、東パキスタンはバングラデシュとして独立した。現在のパキスタンは旧西パキスタンである。

パキスタンはヒンズー教徒が圧倒的多数を占めるインドと異なり、人口の96%がイスラム教徒である。パキスタンのイスラム教徒の大半は、8世紀から18世紀頃までにヒンズー教から徐々に改宗した人達であった。

パキスタン文化の様々な側面を見ると、イスラム教独自の現象と並んでヒンズー教の遺産も見られる。宗教とは無関係に数百年の間にアタガニスタン、イラン、トルコなどの西方から移住してきた民族の伝統文化と、インドの伝統文化が混合している。

言わばパキスタンは混合文化の国と云うべき国だが、矢張りイスラム文化の色彩の最も濃厚であることには変わりはない。

インドとパキスタンの分離独立の対立とは、インド亜大陸の2大宗教の対立であった。インド古来の宗教であるヒンズー教と、8世紀以降に西方から侵略者と共に入ってきたイスラム教は、相容れない宗教であった。

まずヒンズー教は典型的な多神教であるのに対し、イスラム教は厳格な一神教である。前者は脱俗や出家を理想とするが、後者は現世の人間性活を重視する。前者は「カーチス制度」と云われる一種の身分制度と不可分の関係にあり、後者は「神の前の平等」説いてカーチス制度を否定している。

ヒンズー教は東南アジアにも広まっているとは云え、基本的にはインドが主体で「民族宗教」の色彩が濃厚である。他方、イスラム教はコスモポリタンな世界宗教である。これらの両宗教は本質的に妥協の余地がない。

両宗教間の相違は各々の信者達の日常生活にも反映している。偶像を禁止するイスラムの信徒は、ヒンズーの夥しい数の偶像を侮蔑の対象とするばかりでなく、心から忌み嫌っている。

ヒンズー教徒たちは自分達にとって神聖な牛を、イスラム教徒達の食べるのを憤慨する。イスラム教の唯一神であるアラーの神は、豚を不潔として食用とすることを禁止しているが、ヒンズー教にとっては豚は重要な食肉である。

宗教の根ざす相互の嫌悪は対立、衝突となって殺し合いとなり、インドの大問題となっている。その発生は百数十年ほどの昔に過ぎない。それまではイギリスが植民地として良く統治していたのであろう。

1939年、第2次大戦が勃発した。ヒンズーの会議派とイスラムの連盟派は、共にイギリスに対し戦争には協力するが、独立を要求した。会議派側はイギリスに対して「インドを立ち去れ」と要求したが、連盟側は「分割してから立ち去れ」と要求した。その後、長らく3者間で交渉が続けられ、遂に1947年8月、インドとパキスタンとが分離独立したのである。

インド大陸の二大河川であるインダス川とガンジス川、ともにインド大地を潤し、優れた文明を育てて来た。だが分離独立の前後数年間、これらの川には惨たらしい屍が浮沈しながら流れ、流水は血の色に染まったという（印パ戦争）。

イスラム教徒はインドからパキスタンへ、ヒンズー教徒はパキスタンからインドへと、それぞれ安住の地を求めて故郷を後にした。その数は両教徒合計1500万人と推定される。

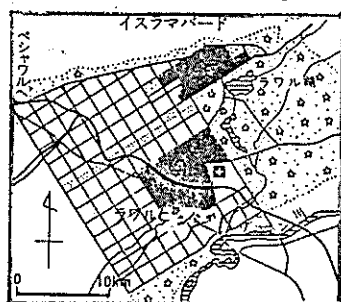
第2次大戦中、私もビルマ戦線に於て当初は米支連合軍と戦い、最後に英印軍と死闘を繰り返したが、この中にはパキスタン人、インド人、ネパール人等も含まれていた。しかし我々は英国と戦ったのであって、パキスタン人達と戦ったと云う意識は誰一人持っていない。

今、彼等と接触しても親しみは感じるものの、全く憎しみは微塵もない。又、日本が第2次大戦に旗上げた結果、彼等が独立を達成出来たなどと云う大それた考えも亦、脳の中の一細胞の隅にもないことは断言できる。

『イスラマバードとラウルピンジの関係』（右地図）

旧都ラウルピンジ（人口80万）と人工の新首都イスラマバード（人口34万）は双子の都市というべき関係にあり、街は続いている格好だ。

ラウルピンジ（パキスタン人はピンジと呼ぶ）の歴史は古く、石器時代にまで遡る。都市としての歴史は11



世紀頃、ガニス朝のムハマドが此の地を征服したのに始まる。1958年に新首都がイスラマバードと定められて以来、暫定首都として政治の中心となって繁栄した。

一方、ラウルピンジの北10キロに隣接するイスラマバードは、旧都を取り囲むような形で現在も建設が進められている。

新しく建設されたイスラマバードは20世紀の町と呼ぶのに相応しく、町の名は「イスラム教徒の都」という意味がある。長い間のインドのヒンズー教徒との対立抗争から生まれた、この国の意気込みを物語っている。

又、パキスタンとは「清らかな国」という意味である。

ガンダーラ美術と仏像

紀元前1500年頃のアーリア人以来、幾多の民族移動や遠征軍、そして隊商が、中央アジアとパキスタン、インド平原を結ぶ交易路であったカイバル峠を通り、ガンダーラ美術の中心であるペシャワールやタクシラの町を通って行った。アジア・ハイウェイはこれらの町からイスタンブールまで通じていたのである。

ガンダーラ美術とは、紀元前後頃から5世紀頃までの間に作られたギリシア・ローマ風仏教美術の総称である。

ガンダーラ美術の様式を証明するための傍証になる資料は皆無と言ってよい。そのためにガンダーラ彫刻の中で、最もギリシア的な作風を強く表わしているものは古く、地方的なものに変化して新しい彫刻が発展した。

ガンダーラ美術を代表するものは仏像彫刻である。仏教に於て仏像が作り始められたのはガンダーラ地方だと言われている。一方ではインドのマトラ地方が仏像成立の最初だという説もある。

ガンダーラ仏の特徴は、ギリシア的な表現によって釈迦像を造っていることだ。高く豊かな髪を頭上に戴き、ヨーロッパ的風貌をもち、肉体は写実的で逞しい姿をしている。インド彫刻のような官能は見られない。

それはギリシア的な男神像の理想美の表現を出発点としているからだ。(右はヨーロッパ的風貌の菩薩像)

現存するガンダーラ仏は多いが、大部分は形式化したもの、地方化したものが多く、それら全般を通じて見ると、本当にギリシア的な彫刻の美しさを持った仏像は著しく少ない。

5世紀に近い頃になると塑像の彫刻が多くなり、既にガンダーラ彫刻の作風を脱却した、独特な美しさを持ったものとなった。タクシラの塑像彫刻は其の意味で興味深く、ガンダーラの

仏像の種類は比較的に変化が多い。仏伝のさまざまな場面を表わしたものを始め、独立した釈迦如来像、弥勒などの諸種の菩薩、訶利帝、半支迦、執金剛神など多彩だ。

釈迦如来の姿にも変化した形が多く、タクシラ博物館にある苦行釈迦像のように、特殊な姿を写実的に表わしたものも見られる。

ガンダーラ仏の形式は西域を経て東方へも伝えられ、中国の仏像にも其の影響を残している。



菩薩像頭部 (4～5世紀)

タクシラ

サンスクリット語でタクシャシラと云い、元来はギリシア語である。パキスタンのパンジャブ州と北西辺境州との境にまたがる古い大都市遺跡を云う。

インドやギリシアの古い文献、中国の玄奘三蔵の記事等で知られるだけであったが、1913年以降、22年間にわたる英国のマーシャルの発掘により、年代を異にする3～4の都市と、其の周辺に散在する多数の仏教伽藍などの遺跡が明らかになった。

発掘された遺跡で確認できるのは、BC6世紀のペルシアのものが最古である。続いてアレキサンダー大王による支配がBC326年に始まり、彼の帝国の崩壊後、この地を統治したマウリア王朝（孔雀王朝、321～184BC）、特に「アシヨカ王」（3代目の王、272～232BC）の時代に仏教が根をおろした。

一方、アレキサンダー大王が残したギリシア大植民地のうち、バクトリア（シリア）が独立してガンダーラに侵入し、BC1世紀頃まで其の国を維持した。この時代からギリシア文化の影響を受けた「ガンダーラ仏」が生まれ始めた。

バクトリアのメナンドロス王と仏僧ナーガセーナの間答は、東西文化交流の象徴として有名である。

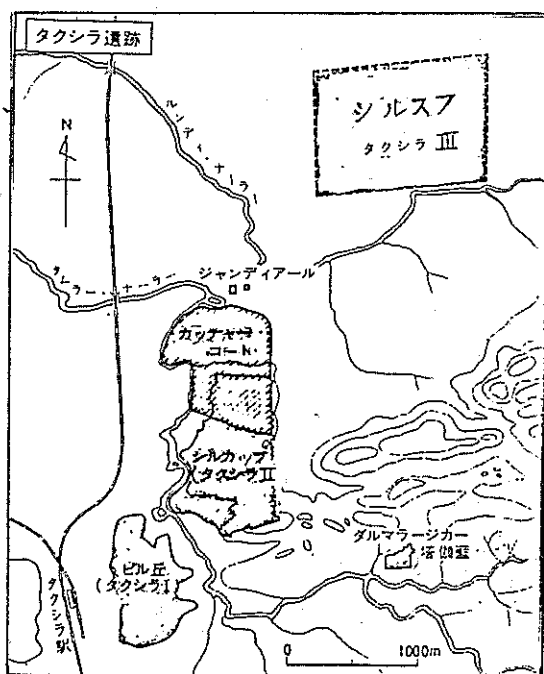
その後も幾度か支配者が交替したが仏教そのものは衰えず、50年頃、ペルシア系のクシャナ王朝が支配を確立するとその最盛期を迎えた。

遠くギリシアや中国から訪れる旅行者や仏教徒を受け入れ、約200年にわたってタクシラは、仏教及び仏教美術の中心地として栄えた。

日本への仏教伝来は6世紀と謂れているが、カニシカ王（2世紀後半に在位）の時代に生まれた大乘仏教が、此の地を発して遠く日本まで伝わったのである。

5世紀に入るとタクシラは白フン族（匈奴）が侵入し、仏像や僧院を破壊した。（右図はタクシラ遺跡の要図）

7世紀にここを訪れた玄奘三蔵は仏教の衰退を嘆き、嘗ての繁栄を懐かしむことになったのである。



タクシラ博物館

（場所は上図のビル丘、タクシラI）

14・00にホテル発ち気温35℃の中を西に向った。バスといわずトラックといわず車体を極彩色の絵のように塗り潰し、珍しく日本と同じく左側通行であった。特に日本製の中でもススキの自動車が多く、目立って眼に映っていた。

バスは一路カイバル峠（61頁地図参照）へ向かう街道を疾走した。その200キロ向うが累卵のアフガニスタンだと思うと、感慨無量であった。

暑い国の街路樹は繁々と太り、凹凸だらけの舗装の悪さは、体の骨をばらばらにするような感じだ。懸命になって耐えていた。

日干煉瓦の貧困な農村、古タイヤを売っている汚い店、砂糖黍を満載にして運搬する荷車、何の希望もなく田舎道をゆっくりと歩く人など、世界の最貧国の姿を眼にすると、同じ人間でありながら気の毒になってくる。

これに反して、生きていだけで役に立たない「行尸走肉」の私が、こうして仏跡巡りに参加する機会が与えられた。このような心の温まる思いに耽けられることは、仏の力でなくて何であろうかと、極く自然に思えてくる。

伝統や教えを受け継ぎ衣鉢を伝えるタクシラ博物館に15・00に到着した。縁なき衆生は度し難しと云われているが、館の前を彩るブーゲンビリアは信仰心を誘うように咲いていた。（上の写真はタクシラの仏塔彫刻）

最初のタクシラは現在のビル丘（前頁参照、タクシラ第1都市）であった。部分的な発掘から4つの相次ぐ居住の跡が判明し（BC5世紀からBC2世紀）、街路が交錯して住家、商店は不整形に並び、自然に形成された都市であった。位置は博物館の直ぐ南側である。

アレキサンダー大王のインド遠征当時（BC326）にも交渉があり、アシヨーカ王が太子時代（BC3世紀初期）に副王として駐留したのも此の都市であった。出土品で最も重要なものは刻印貨やタクシラ貨などの貨幣である。

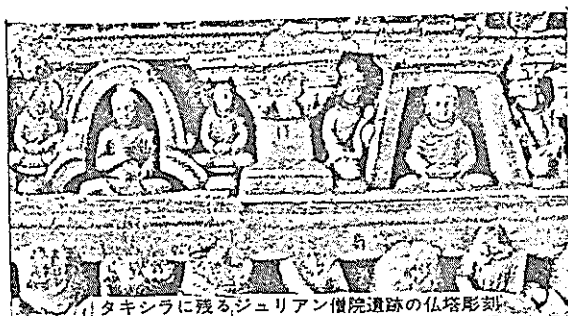
ガンダーラ美術の宝庫というべき此の博物館は仏像、彫像を始め、金銀細工、コイン、宝石など、遺跡からの出土品を展示し、我々は心血を注いだ遺物を見学することになった。

釈迦生誕の彫刻から参観が始まった。冥想、苦行、断食、涅槃などの像と、釈迦の一代記の彫刻が整然と陳列され、「蠟燭は身を滅らしても人を照らす」という、慈悲の心が肌を通して感じてくる。偉大な芸術とは魂の表現だと暫く釘付けにされていた。

多くは仏陀像だが中には菩薩像も見られた。菩薩とは悟りをひらく前の仏陀であり、装飾を着けた世俗の姿をしていた。一方の仏陀像は一切の装飾を排して光背を背負い、各々の仏像の理解も出来ない私は合掌するだけであった。

特色の中で際立っていたのは、顔の聡明な表情の美しさ、弧を描いた眉、半眼に閉じた眼、通った鼻筋、悟りを体得した者の崇高さを見事に表わしている。そして螺髮、白毫（仏の32相の1つ。眉間に生えて光を発し、無量の国を照らすというもの）、三道（迷いを持つ衆生のこと。惑道、業道、苦道で輪廻の三道を云う）など、日本の仏像の特徴を既に備えていたのは驚きであった。

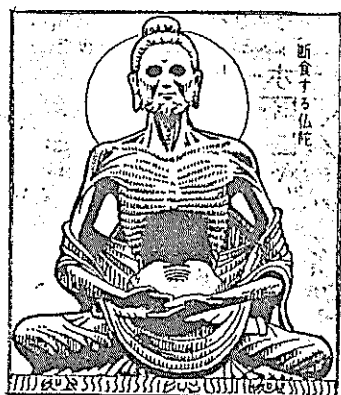
仏陀の顔を拝んで冥想に耽っていると邪念も去り、冥想こそ宗教生活の核心ではないかと、このとき感じたのである。



タクシラに残るジュリアン僧院遺跡の仏塔彫刻

珍しいものでは「ヒゲ」をつけた仏像があり、顔に民族の顔貌を重ねているように見えていた。又、仏陀の断食苦行像は、ガンダーラでは好まれた1つと云われているが、骨皮に痩せこけた現実的な表現は独特なもので、初めて拝見した仏陀像であった。

それは肉体の苦痛に耐えることも修業する者の宗教の姿であろう。人間の弱点を肯定する意志の表現で、この苦しい目にあっても人間は精神的に生きられる、と云う表現であろうか。(右は釈迦の断食苦行像)



その他、仏陀の生前物語や、仏陀の生涯の物語を基台などに彫られており、特に西欧的な顔をした仏陀の像は目を引いていた。(右下の写真、4世紀のもの)

以上の多くは片岩で作られているが、後に造られた塑像のものも展示され、ガンダーラの粋を集めたものばかりであった。

仏陀の像が初めて生まれたのは、前記した通りガンダーラであった。それまでは仏陀は「法輪」とか「蓮の花」などのシンボルで表わされていたのである。



其の意味でガンダーラ仏ほど仏教美術に貢献したものはない。

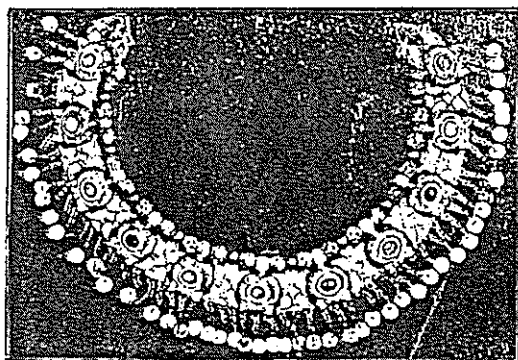
様々な民族の十字路であった此の地に発生したガンダーラ美術は、当然のように西方の影響を色濃く留めていた。その源泉はアレキサンダー大王がもたらしたギリシアの思想や文化、交易が盛んになったローマの影響の多いことを証明している。

思えば「孔子」が死去して千年も経過してから「儒教」が盛んになったことは、我々も良く知っている。それと同様に「釈迦」が入滅してから500年後に、タクシラの地で「仏教」が再興されたことを初めて知った。

仏の本質は肉体でなく悟りだと信じていた「呉下の阿蒙」の私には、釈迦の生地から遠く離れたガンダーラで、初めて仏像として出現した歴史が判らない。勿論、それは私の信仰とは別問題である。

タクシラ博物館の参観を終えると、熱心な仏教信者であった父母のことが思い出された。常住坐臥、「南無」を唱えていた両親を見習い、以心伝心、仏壇に向かって手を合わせて育った。

「南無」とはインドの「ナマス」という言葉から来ていると云う。即ち帰依するとか、信賴する、或は敬うという意味である。「南無」は命ごと帰依する信心のことで、仏像の濫觴であるタクシラ博物館を訪れて、西方十万億土の極楽を見たような喜びが湧いていた。



(右は貴石象嵌金製首飾りね^は1～2世紀のもの)

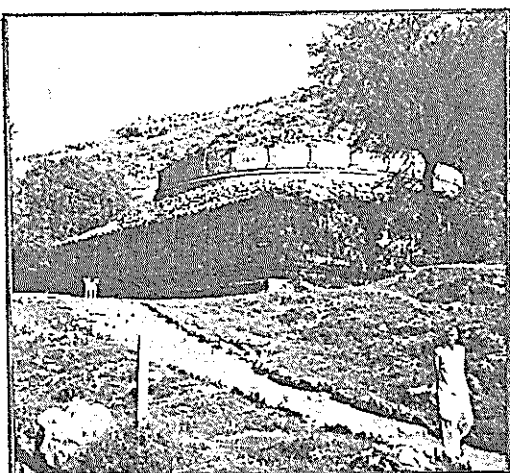
シルスフ遺跡 (タクシラⅢ、65頁地図参照)

我々は神仏の存在をはっきりと知っている訳ではないが、何かあると云うことは信じている。

天は人間に神仏を生み出すことを命じた。これは人間の理想の中に住むものであり、完全なものを我々に求めさせるものだ。だから神仏の如き芸術、神仏の如き人間と云う言葉がある。

神仏は人間の理想が生み出したものだと思ひながら、バスに揺られていた。

細い溪流の水は涼風を呼ぶように流れ、その上の丘にある遺跡がタクシラ第3の都市、シルスフの跡であった。



広い曠野の中に岩石の丘が連なり、静寂の世界に城砦のような構えが見えてきた。諸行無常の風が片田舎の野山に吹いている感じのする、聖域である。

シルスフの年代は紀元100年から500年頃で、2世紀に繁栄を迎えたタクシラ第3の都市である。最も新しいシルスフは当時、東西1・4キロ、南北1キロもあり、タクシラでは最大級の規模を誇っていた。しかし現在は堅固な城壁の一部を残すのみであった。

「不惜身命」というか、この辺鄙なところで仏法のために我が命を顧みず、懸命に修業に励んだ道場の跡、自ずから身を浄められるような靈気が漂っている。

白いパキスタンの服を着た管理人は我々を出迎え、丘の上に案内して城壁の扉を開けた。(上の写真は出迎えた管理人と煉瓦で囲んだ城砦の一部である)

一際目立った遺物としては、7つの法輪のある仏舍利であった。頑丈な鉄の格子で囲まれた中に展示されている。

仏舍利はインドで発達したもので梵語では塔婆と云い、仏塔のことである。仏教聖地に於ける中心的な信仰の対象となっている。

城壁の壁を利用した学僧達の冥想に耽った部屋が一方を占め、広場となっている中央には斎戒沐浴した池の跡がある。無味乾燥した遺跡から、浄土の世界に憧れた学僧達の凜とした厳しさが窺えるようだ。(右の写真は鉄格子の中の仏舍利と管理人)



往時の僧達が夕陽を眺めて冥想の行をした、夕陽ヶ丘のような遺跡、そこに荘嚴な伽藍の跡が深々として遺り、歴史の時を刻んでいることを考えさすのであった。

若し天に地獄があるとすれば、ここが当時の楽園だったのかと思ひながら、短時間の見学は終わり、次ぎの場所へと移動した。

シルカップ遺跡 (タクシラⅡ、65頁地図参照)

湾曲して細長く伸びる田舎道は、今なお幽玄の境地のように眼に映っていた。ジャンディアールの遺跡を眺めながら、タクシラ第2の都市であったシルカップに案内された。

紀元前2世紀から後2世紀にかけて栄えたギリシア朝、クシャン朝（貴霜朝、5世紀半ばまでの約470年間、中央アジアを領有した。大月氏5族の1）時代のもので、往時は高さ9mの城壁が、全長5・5キロにわたって取り巻いていた。

城門の跡を入ると、現在も幅6mの広いメンストリートが真っ直ぐに伸び、凡そ500mはあるだろうか。両側には住宅や商店などがあった石積みの土台跡が整然と並び、その景観は実に壮観である。（上の写真はメンストリートの一部）

左手にドーム型をしたストゥーバ（仏塔）が見えている。その隣に、高く石を積み上げて出来ているスーパーマーケットの基台も遺っていた。

右側の一面に日時計の跡がある。円形に土地を掘り下げ、その中心から後光が指したように何本かの石積みの線を造り、中央に棒を立てて時刻を知ったのであった。当時の世界では素晴らしい発想であり、智恵の働く人材の多かった事を証明している。

一直線に伸びた大通りの突き当たり周辺が王宮跡で、繁栄の面影を僅かに遺していた。其処には双頭の鷲をもった霊廟や、丸屋根の寺院もあったと云われている。

シルカップの出土品である貴石象嵌金製首飾りが、タクシラ博物館に陳列されていたが（67頁）、当時の高度な文化も知ることができる。

見晴らしのよい山野は寂然と静まり返り、四方の眺めは昔に想いを馳せる絶好の場所であった。朽ち果てた遺跡も見方を変えれば優雅な趣を伝え、心の問題だろうが極楽を彷彿させるものがある

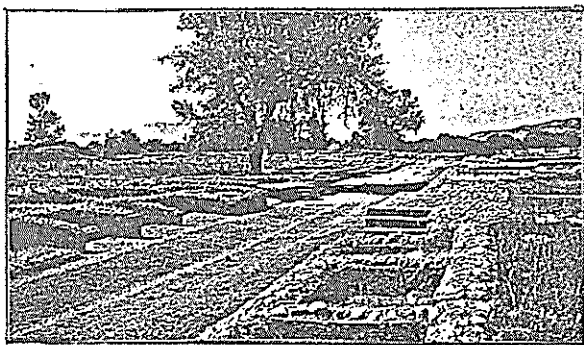
一方、鄙びた遺跡は我々に「強きものは勝つが、心正しければ亡びない」と、論しているようにも見えていた。そして自分の靴音が気になるほどの静けさの中を、鮮烈な印象を受けながら来た道に戻って行った。

一軒の人家もない荒野となった遺跡、一人の人影も見えなかった遺跡、その中に天から降って湧いたようにと云うか、地の底から玉が出たと云うか、数人の農夫らしい影が飛び出して来た。好機到れりと待ち構えていたのであろう。

地獄を見て来たような顔付をして、我々に本物の発掘品だと思わせるように声を掛けてきた。一寸隠すようにしながら、仏頭や彫刻品を何ドルだと称して商売開始だ。

彼等は造った物を長い間、土の中に埋めて置き、本物らしく見せ掛けた「にせ仏像」は実に精巧に出来ている。シルカップの記念だの一つ買ってやったが、ガンダーラ美術の後裔が未だいるのかと錯覚するほど精巧であつた。

「見ぬは極楽、知らぬ仏」と云う諺が脳裏を掠めた。誰も極楽を見てきた者はなく、仏様を知っている者もないが、買った掘出し物（？）から、仏を感じるような心に



なりたいと考えたことは確かである。そして後生（来世）が大事で、菩提の種を蒔きたいと思いながら乗車し、タクシラ博物館の方向に戻った。

ダルマラージカ仏塔を遠望（65頁地図参照）

カイバル峠からイスラマバードに通じる道路の北側に、アショカ王の建立した仏塔が高く聳えていた。ダルマラージカ（法王）の塔伽藍の跡だ。マウリア（孔雀王朝、321～184BC）時代の古塔を1世紀に増広した大ストゥーパは、タクシラ最大の仏塔である。

往時は此の古塔を中心に小ストゥーパ、仏堂、僧院などの多数の建築が群在していた。古いものは1世紀末から2世紀初期まで遡るという。現在は、塔伽藍は珠玉の瓦礫に在るが如しと形容する状態らしい。

「仏の心、凡夫知らず」というか、運転手はブレーキを踏むこともなく、通り過ぎて驀進して行った。振り返って遠望しながら、この世は無常迅速だと溜息をつき、熱い焼印を押したように、悔し涙が流れる思いだった。

しかし、一億総浮かれの時代に仏跡を訪れたことは意義深く、歴史の重みを痛切に感じさせた。古色蒼然とした中に、全身全霊を傾注して究めた仏像から遺跡まで、もう一つの世界、深層というべきものを教えられたのであった。

会者定離は世の常。遺跡を去るに当って感想はと問われれば、精神世界の静寂な心に染まった遺跡から、たった一度しかない人生と、一つしかない自分を感じたと答えたい。

人間は生きるために生まれたのではないと云うことだ。それが菩提樹下の釈尊の心の静けさに通じるのだと考えると「人生は今日が始まり」だと跪坐したくなってくる。

『大唐西域に見るタクシラ』

玄奘三蔵が、アレキサンダー大王時代から北インドの重要な都市として繁栄していた、タクシラを訪れたのは631年である。当時は緑豊かで果物も豊富だったようで、インダス川を渡ってタクシラに向かうところに、次ぎのように書かれている。

これよりまたウダカンダ城に還り、南して信度河を渡る。河の広さは3～4里（支里で1里は約500m）で西南に流れる。清く澄んで鏡のようで急流はただよい流れている。

毒龍、悪獣が河の中に穴をつくって住み、宝石や珍しい花果の種や仏舍利を持って渡ろうとすると、船は沈没することが多い。河を渡って咀叉始羅国に至る。

咀叉始羅は周囲2千余里、国の大都城は周十余里、酋長は力を競い、王族は後継者を絶っている。さきにカピシー国に服していたが、近頃はまたカシュミール国に付属している。

地味はよく農業は盛んである。泉や川が多く、花果が茂っている。厚く三宝を敬い、伽藍は多いが、すでにひどく荒れている。僧侶は数少なく、みな大乘を学んでいる。

以上から玄奘三蔵が訪れた時は、タクシラの仏教は衰微していたようだ。

シャー・ファイサル・モスク

タクシラからラウルピンジの市街を通過して、イスラマバードとの境界線上にある「シャッカル・パリアン・パーク」の中を疾走して行った。

緑の少ない無味乾燥の遺跡から公園内を進むと、4月とはいえ濃い緑樹の上に夏の輝きがみなぎり、吹いて来る風に緑の香りが息づいて爽快な気分だ。

台上の公園からイスラマバードの新市街や、ラウル湖（63頁地図）の景観が豁然と足下に展開し、伸び行く首都の姿を眺めていた。

暫くの撮影時間を与えられた後、バスは公園を下って新市街地を走り、区画整然とした別の公園内に入った。前方のマルガラ連山の麓に横たわる大殿堂、それが世界一の規模を誇るシャー・ファイサル・モスクであった。

高さ90mにも及ぶロケット形の4本のミナレットは、天を刺すように高く聳え、接近して行くと更に規模の壮大さに唖然とさせられた。イスラム世界で言うクスメック、即ち神の思召しであろうか、ガイドは天下に冠たるモスクを見せなければならなかったのだ。

モスクの参道の途中に建つ透し彫りの大理石の廟は、故アユブ・カーン大統領の墓廟であった。彼は1958年、無血クーデターによって政権を掌握し、国民統一の象徴として新首都建設に貢献した功労者である。

廟を右に見てモスクに急いだ。サウジアラビアからの援助を含めた総工費5000万ドルをかけて、1985年に完成した此のモスクは、モスク内で1万5千人、周辺の芝を敷きしめた敷地内を含めると、約11万人を一堂に集めることが出来る。

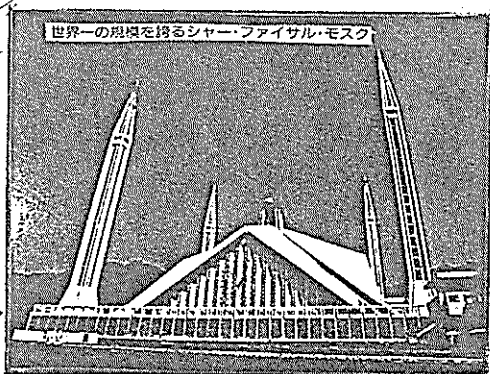
カシミールの帰属問題を始めとして宗教の異なるインドと対立し、数次の印パの紛争から、ここにイスラムの団結を結集した感じがしている。

素足になってモスクの階段を昇って見渡すと、大モスクは総て大理石で造られており、床は鏡のように影を映して眼を見張るばかりだ。しかし本堂の中は閑散として余り人影は見えない。

メッカに向かった礼拝壇の両脇に大コーランが飾られ、上にはイスラムの金文字の掲額が燦然と輝いていた。礼拝堂を取り巻くサイドは数多くの小部屋となっている。私一人で静々と廻っている時、中年の男性が小部屋の中から呼び止めた。写真撮影を要求したのであった。イスラム世界では実に珍しい現象である。

カメラを向けると早速コーランを繙いてポーズをとり、次ぎの部屋でも同じように催促されたが、異教徒に対して割合に寛大で茶目気があるようだ。

拝観が終わってバスの位置に戻ったものの、ガイドも運転手も我々を無視して動く気配を見せない。暫くしてから漸く気が付いた。今はラマダン（断食）の月だったので。彼等は陽の沈む礼拝の時を待っていたのである。



黄昏の赫くきらめいていた陽は次第に陰り、豊かな緑も黒ずんで気が遠くなるほど静寂が深まった。モスクを飾る莫大な数のイルミネーションは、建物全景を浮き彫りにして幻想の世界へと変貌して行く。

夜気の中に浮き立つように見えるモスクは、舞台装置のように輝き始め、コーランの響きが静けさを破ると、彼等は一斉に敬虔な祈りを始めた。

信仰こそ人の善き伴侶であり、この世の旅路の糧であり、この上ない富である。ガイドも運転手も、我々に此のシーンを経験させてやりてい一心であったと思うと、誠に感謝に堪えない次第である。

『ラマダン』

イスラム世界では何処の国でも見られる断食の習慣がラマダンである。

その教えは日中は一滴の水も一口の食物も取ってはならない。彼等は早朝2時頃に起き始め、先ず水浴をして身体を清めてから朝食をする。そして第1回目のお祈りの声がスピーカーで流されてきた後、夕方の7時頃のコーランの声やサイレンの音が鳴るまで、一切食事をとらずに日常生活を送る。

漸くサイレンやコーランの声が鳴り始めると、人々は一斉に食堂に駆け込み、少量の食物と水を口に入れてから、又お祈りをする。その後に本格的な御馳走を食べる。このような事を29日間も繰り返すのだから、その我慢強さは大変なものだ。

この期間中はレストランはもとより、パザールの食品売り場なども店を閉じ、何処へ行っても口にすることは手に入らない。外人旅行者は対象外とされている。

ラマダンの期日はイスラム暦（マホメットが没した7月16日がイスラム暦の紀元と定めている。陰暦）に従って決められるから、毎年10日ずつずれて行く。

『お祈りは場所を選ばず』

イスラム教徒は1日5回のお祈りは、日常の中で大切な行事となっている。通常は朝日が昇る前に10分ほど、13・30に約20分、15・30頃に数分、日の沈んだ後、そして其の後1時間30分ほどしてから長いお祈りに入る。

しかし仕事によっては其の時間通りに出来ない人もおり、現実には時間は人によって異なっているようだ。

その時間になると思い思いの場所ですぐにお祈りを始めるから、宗教心の薄い日本人は驚いてしまう。例えば険しい峠の途中の道路の隅であったり、トイレの中であったり、道路の上であったり、場所を選ばずメッカに向かってお祈りをしている。

熱心な信者は床に額を擦り付けて祈るから、額の一部が擦れて変色している。そういう人に出会ったと、その信仰の深さに驚嘆させられる。

『スンニ派とシーア派』

イスラム教はスンニ派（正当派）とシーア派（分派）に分かれ、同じイスラム国でも、それぞれに派閥がある。サウジアラビア、アラブ首長国連邦、クウェートはスンニ派が多く、パキスタンはスンニ派が主流である。

この2つの派閥に分かれた経緯は、宗教的な違いというより極めて政治的な闘争だ。マホメットの従兄弟であり、マホメットの娘と結婚した「アリー」は、マホメット

の死後の後継者は自分だと思っていた。しかし、現実には違う人物が選ばれ、その次ぎも又、別の人間が選ばれてしまった。

漸く自分の番が廻って来た時には、かなり年を取っており、もう後はない状態であった。そこへ強敵として現われたのが、後にウマイア朝（現シリア）の開祖となる「ムーアウィヤ」で、その争いで「アリー」と其の息子の「ファイセン」は暗殺されてしまった。

そこで予言者マホメットから4代目「アリー」までをカリフ（宗教的権威者）とし、その後の後継者は正統と認めないことを前提としているのが「シーア派」である。

それに対して「スンニ派」はアリー後に続くカリフもずっと認めており、これを正統としている。

更に複雑なことは、スンニ派は教義の違いから4学派に分かれ、シーア派は更に沢山の学派に分かれているから、問題は容易ではないようだ。

寝耳に水の果報

ガンダーラ仏教美術の里タクシラから、ファイサル・モスクの観光も終わり、満天の星空の中を19・30にホテルに帰着した。ターバン姿で玄関に立っている守衛は、45年前のビルマ（現ミャンマ）戦の死闘を想い出させる。

彼等は戦場に於てもターバン姿であった。実に懐かしく戦友と再会したような喜びで、昨日の敵は今日の友の感じがしていた。しかし若い彼は戦闘の経験はなく、私の心情が通じる筈がない。

明朝7・30発のパキスタン航空で帰国の途に就く予定が、1日延期されたと添乗員から告げられた。理由は航空機の故障である。成田出発の1日延期も天候の関係ではなく、恐らく故障のための欠航に違いない。途上国や共産圏では予備機を保有する余裕もなく、欠航の多いことは珍しいことではない。日本では考えられないことだ。

トルコの日程が1日短縮された事の埋め合わせとなったものの、明1日イスラマバードに滞在しても既に予定観光も終了し、実際は余り意義が薄い感じだ。

その後、現地旅行社の好意であろうか、明日は希望者を募り、イスラマバード東北約200キロの「マリ村」の観光を告げられた。標高2500mの高地から印パ国境も遠望され、カーデガンの用意まで通達された。

一行の中には思いがけない幸運を掴んだように、欣喜雀躍している者も見掛けた。私は景色の観光よりも遺跡探訪を期待し、可能ならば、カイバル峠の手前にあるペシャーワル遺跡の見学を、微かに心の中で期待していた。距離も同程度である。

しかし我が儘は許されず、参加を申し込んだがOPだと聞かされた。延期の原因はパキスタン航空にあり、当然ながら該航空が経費を負担すべきだ。一方、日本の観光会社も、トルコ観光が短縮された1日分の余剰金がある筈だ。当然これも経費負担に応ずべき責任がある。口にはしなかったが、参加者に負担を強要し会社の利潤追求のがめついことには、呆れるばかりだ。

それにしても考えても見なかった印パ国境近くを訪れることは、「牛に引かれて善光寺詣り」の諺の通りで、考え方によれば「寝耳に水の果報」である。早速、地図を開いて調査したが、一寒村が図上に明示される訳がない。

(目) マリ村観光 (印パ国境近く、標高2500m)

乾燥した空気で咽喉を痛め、昨夜は咳に悩まされて寝不足も祟っていたのであろう。

華美に化粧した大型バスや小型バス、トラック野郎のあくどい色彩が眼を刺激していた。

所々に古い遺跡が遠望される。道路の傍らではスコップで土をトラックに積み込んでいた。ショベルカーもない最貧国の労働者は、焦熱地獄の炎天下でテント生活をしている。自然に同情心が湧いて来るのも当然であった。

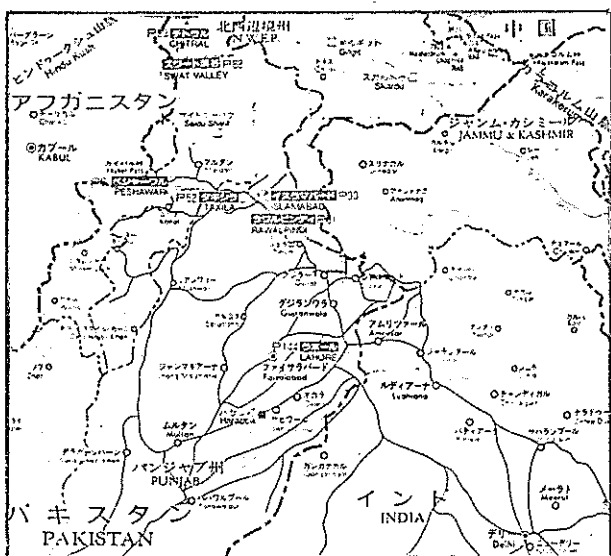
赤貧を洗うような生活の世界に、豪華に見えるミナレットだけが白く輝き、イスラムの情緒を味わいながら、過ぎて行く一瞬一瞬を大切に眺め続けた。

谷底や山頂にも家が建ち、岩山に生えた僅かな草を求めて食んでいる羊の群れ、長閑な景観は箱庭のように眼に飛び込んできた。

高度が増すものの一向に温度計の針は下らず、漸く入れてくれたクーラの吹き出す冷氣だけが頼りの綱だった。4月とはいえ麦の穂は色付き、花盛りの大樹の彩りは無聊を慰め眼を楽しませていた。

トイレ休憩となり、澄んだ山の空気は自然に深呼吸をさせていた。小さな枇杷を並べた2軒の露天の店が休憩地、トイレの設備は勿論ある訳がない。満緑に覆われたインダス川の支流だけが滔々と石に砕け、足を万里の流れに濯ぐ気分浸っていた。

鈴なりに小さな実をつけた野生の枇杷の樹、美しい花卉で飾られたアンズの木、見事に垂れ下がった紫紺の藤の花には気品があり、矢張り野におけ蓮華草だ。このよう



な自然の美にこそ価値があり、自然は常に正しく動いて誤りはない。

溪谷を流れる水音が木立の間から響きわたり、バスは坂道をエンジンを噴かして進んだ。山岳の中腹を走る険しい急坂、清緑の山里の谷間に佇むミナレット、世に死滅しないものがあるとすれば、それは自然であり、鄙びた美であろうと思えてくる。

標高が高くなるにつれて、気の遠くなるような静寂の世界は景色が変化し、松の巨木が鬱蒼として天高く重なり、車中まで和風な木の香りが漂って来るようだ。

深山幽谷の秘境の風情をたっぷりと楽しみ、数軒の自動車修理店の並んだ鞍部の広場で、再び休憩した。水が崖から孤を描いて流れている絶好の休憩地、トイレの設備も完備していた

山岳道路ではエンジンが加熱する。そのために往来するドライバーはラジエーターの水を入れ替え、顔を洗い口をすすいで涼をとっていた。珍しく簡単な1軒の散髪屋も店を開き、高山砂漠の中のアアシスの感じがしている。

美しい山並みに千仞の溪谷、清浄な水と豊かな緑の環境は、揺らぐ葉ずれの微かな音しか鼓膜に届かない。樹間からひんやりと乾いた涼風が吹き抜けてきた。アレキサンダー大王もこの街道に駒を進めたのかと、古びた山中の一隅で往時を偲んでいた。

再出発した車窓から、松の枝越しに万古の雪をのせた連峰が遠望され、既に標高は2000mを超えていた。焼畑の麦は出穂したばかりだが依然として夏の暑さである。この辺りの山岳民族は、林業と養鶏を生活の基盤としているように見受けらる。

野生であろうか、オリーブの樹も急坂の各所に見え隠れして、白い5弁の林檎の花は、一際目立って緑の中に咲いていた。

反対側の溪谷の向こうに見えてきた山は、アフガニスタンの戦場となっている岩山を連想させ、刻一刻と変貌する山景の眺望に応接の暇がない。

急に右折したバスは本道を離れて危険な崖道を登攀するように進んだ。葛折りの急坂はリフトに乗るためであった。ガイドは文明の利器に乗せたい一心で案内したのであろうか。彼等にしてみれば最新の乗り物に違いない。

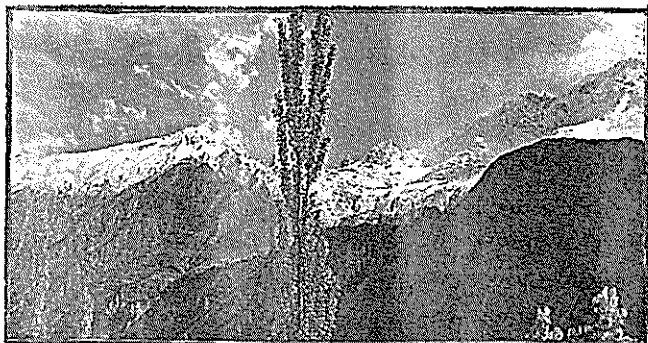
長期の間使用しなかったと見えて、我々を迎えても未だ修理を続け、しばらく回転すると直ぐ止まるような状態では、危険千万で尻込みしなければならない。

溜息をもらして2人乗りのリフトに乗り、背高く伸びた松林を通るリフトから振り向いた。次第に視界が遠方へと拡がって行く。これを「尺山寸水」と云うのだろうか、箱庭のように小さくなって行く眺めは快適であった。

リフトを降りると揃い踏みをしたように白馬が数頭、客待ちしているように整然と並び、そこに標高2500mの標識が立っていた。(下はカラコルム山脈白雪)

豁然と眺望が開けて青い虚空が覆っている。東方の一角に万古不易のカラコルム山脈が白雪を頂き、網膜が心よく反応して快哉を叫びたい心地だ。

これを将に山河襟帯と云うのであろうか、素晴らしい景観であった。一行は気高い山容を指差して、どよめきながら秘境の



景観にうっとりで見惚れていた。

独自の小宇宙と自然が溶け合った高山の美観は最高の芸術。遠く人里を離れて争いごともない此の別天地を「武陵桃源」の里と云うのであろうか。

魅力を満載した小旅行は、この鳥瞰で締め括ったような行雲流水の感じがする。

緩やかな稜線を連ねる道を散策しながら進んだ。瑞々しい緑、森羅万象は生き生きとしており、心の楽しさは疲労を忘れさせてしまった。其処を現地の人達は白馬に乗り、鞍上に人なく鞍下に馬なしとばかり飛ばして通り過ぎた。

再び乗車して展望台に移動した。カシミール（74頁地図参照）の皚々とした白雪の光景は、悟りを開いた幻の空中模様のような。我々の生存する世界は我々の手で、何時までも保存しなければならない。それは人間にしか出来ないことである。

近くの山小屋のような一軒屋にも人が棲んでいた。仙人のように霞を吸って生きているような感じがする。「一樹の蔭一河の流れも他生の縁」とばかり近寄り、ライタを送って撮影をお願いした。

カシミールの白峰をバックに黒い山羊と一緒にシャッターを押した。会話が通じれば記念に贈呈したいものの、儘ならぬは浮き世の常である。其処で暫く息をのむように自然美を楽しみ、山の虜になって佇んでいた。



このような神経を人間に与えたのは自然のような気がする。自然は人間に快楽や喜びを与え、我々は其の快楽を求めるのは当然である。

想像していた以上の美景は山水画と見まごうばかりの夢幻美で、昼食の時間となって山頂のシエシール・ホテルに向かった。（上の写真は、カシミール連山と住民）

雄大な自然と一体となつた素朴なホテルで昼食を味わった。野鳥が窓の直ぐそばまでくるような静かなホテルは、避暑に最適だ。ホテルの庭園から高峰の大パノラマを展望し、爽やかに吹く風に木々の梢は揺れていた。飽くことのない環境の中で至福の醍醐味を堪能し、2度と来れない俯瞰に名残りを惜しみつつ帰途についた。

暫くしてバスは停車した。ヒマラヤの西端が太い針葉樹の間から遠望できる唯一の場所で、人懐っこい運転手の好意の現われであった。マリ村観光は、カラコルム山脈からヒマラヤの霊気の溢れた展望の極致、彼等が推奨して案内してくれたことに感謝しなければならない。

印パ国境の鳥瞰に郷愁を覚えながら急坂を下り、茶碗もない「鎌で水を呑む」ような貧しい山岳民族の生活を眼にしながら、マリ村のマーケットで停車した。

このマーケットの並ぶ街道は山深い秘境のオアシス、シルクロードの隊商路の宿場町だったのだろうか。現地の人達を相手にした商店街は坂道を埋め尽くして盛況を呈していた。余り見慣れない日本人を奇異の眼で見詰めている商人達は、誰を呼ぶのか呼び込みの声で喧騒を極めていた。

貧しい生活の現地の人を対象にした商品には食指が動く筈もなく、一瞥しながらバスの乗車地へと坂道を下った。

其処に屯していた青年たちが私をじっと眺めて、「日本人、日本人」と訛のない日本語で呼びかけてきた。深山幽谷の貧村のことであり、吃驚仰天したのは当然だ。

更に続けて「日の丸、日の丸」と笑顔で喋り出し、手招きしたのは驚いてしまった。今度は「腹切り、腹切り」と明瞭な発音で話しかけた。

彼等青年は私を揶揄している態度でもなく、視線が一致すると親しみの表情を含めて苦笑していた。

果たして意味を理解しているのだろうか。理解した発音のように見受けられたが、何処で習ったのであろうか。其のような言葉を学校で教えることはないだろう。

ビルマ戦線に出陣した彼等の祖父達が、日本軍の凄まじい勇敢さに怖れを抱いていたことは確かであった。日本軍の精神力の強さを祖父達は「日の丸」や「腹切り」の言葉で覚え、日本軍のことを子供や孫に伝えたといしか考えられない。

ビルマの各方面の戦場では悲惨な玉砕が相次ぎ、責任感から自刃した人も枚挙に暇がない状態であった。そのことが只今、代わった言葉で彼等の口から耳にしたのだ。

嬉しいことか、それとも悲しいことか、私の今の心境では戦争のことは語りたくないのが本心である。それは一言で申せば責任感が然らしめるのである。

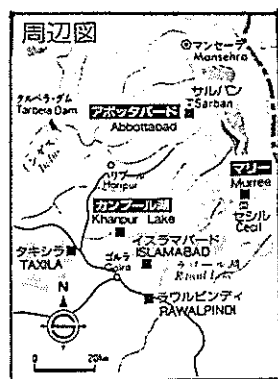
思いもよらない意外な言葉に余韻を残し、バスは一瀉千里に帰路を疾駆した。途中、夕暮れの外気を静かに反映した塩湖の水面が、夕焼けの色をレンズに集めたように、赫みを含んだ光景に眼を注視して、18・30に帰館した。

空路、帰途につく

此の世は「因果の^オ小車」というか、出会いがあって旅で親しくなった人達とも別れる時を迎えた。旅にたとえられた人生は同じことの繰り返しだが、別れは矢張り寂しいものである。このような気持でホテルを発って空港に向かった。

イスラマバードのチャキアラ空港を22・00に飛翔する予定が、エンジン修理のために遅延し、漸く23・30に離陸した。

途中、北京空港に立ち寄り、翌4月23日、11・15に成田空港に着陸、当日中に我が家で旅の疲れを癒したのであった。



あとがき

春秋を重ねるに従って心中に「1日に再び晨なし」という風の音が吹き捲っていた。「生きて海月の骨いためず」の名言の通り、生きているうちに未知の世界を見聞することは、心身の充電であり、1病が2病となっていく我が身の胸中には、サイコロに譬えた「一の裏は六」だと運にまかせて旅に出た。

東西の接点、南北の接点でもあったトルコは古代文化の宝庫であった。人類の歴史が始まって以来、民族の往来の激しい所に文化が発達したことは、古代史を繙けば明瞭である。

紀元前7世紀にはペルシアの「王の道」となり、紀元前4世紀のアレキサンダー大王の東征路、それに古代東西文化の交通路となったシルクロード等、世界はトルコを中心に動いた。世界史を語る時には先ずトルコを知らなければならない。

古代トルコの統一国家はヒッタイト帝国に始まり、ビザンチン帝国、セルジューク・トルコ帝国、オスマン・トルコ帝国と変遷し、文化が文化を生み文明が文明を生んだ歴史は、世界に類を見ない国であった。

ペルガモンにしてもエフェソスにしても、遠いヘレニズム時代からローマ時代に栄え、その遺した文化遺産は驚嘆するばかりであった。

紀元前325年にコンスタンチヌス帝が創建したコンスタンチノーブル（イスタンブール）は、歴史の歯車の早く回転する中に今も尚、昔の姿を留め、東西文化を合わせ持った世界唯一の古都である。

カッパドキアも亦、紀元1世紀頃からキリスト教の修道士が住みつき、日本の隠れキリシタンの先駆者のように、岩窟の中に礼拝堂を作って信仰に生きたことは、奇観もさることながら、胸を衝くのであった。

険ヶ峰に立たされたトルコの英雄アタチュルクは、「運を待つは死に等し」と乾坤一擲、蜂起して劣勢の中から独立を勝ち取り、その名を竹帛に垂れた名將軍である。

一方、紀元前後に仏教を再興させたパキスタンのガンダーラ、5世紀に入って白フン族（匈奴）に破壊され、その跡を見た玄奘三蔵は嘆き悲しんだ。我々仏教国に育った者にとっては、ガンダーラは心の祖庭のような愛着を感じたのであった。

以上のような今次古代史探訪の旅は、一体何を私に語ったであろうか。何れの地も「鼎の沸くが如し」という熱い血を流した戦いの爪痕であった。即ち平和こそ人類最高の理想だと教えていたのである。

平和が見付からないと言うことは、見付けようとする人類の努力の怠りである。歴史は地理を教え、地理は歴史を語っていた。平和への希望は強い勇気が必要であると共に、常に新たな意志でなければならない。

英雄は確かに我々の真似の出来ないことを成し遂げた。しかし人を生かす道を知らない方が多かったのも事実である。相手を屈服させることは生かしたことではない。そこに聖人の偉大さがある。そのことを知ったことは此の旅の成果だと言える。

旅は私に生き活きとしたもの、新しいもの、自由なもの、真実なもの等を与え、旅に出ると本当の私になれるような気がする。人生をより豊かに彩りを添えてくれる旅、生涯忘れられない旅先での感動は、何時までも心の糧となって残っている。

生き身は死に身である。「年間わんより世を問へ」と言いたい。今頃になって年齢

を聞くのは愚の骨頂である。世の生き方が問題であり、長寿社会も人生の中身を問題としなければならない。

私には命よりも名を惜しんだ過去がある。今では「命は万宝の第一」と思う年に達した。月日に関守はなく無常の迅速を感じる。「思うこと一つ叶えば又一つ」と、更に楽しい開放感を求めて旅を続けることだろう。

本当に文章を書くことの苦手な私だが、旅の回顧を楽しみながら、「ボケ」防止の一策として今回も亦、無用無能というか行尸走肉の拙文を綴ってみた。古代史探訪の旅に相応しく、歴史を主体に記述した積りである。

(下の写真はイスタンブールのブルー・モスク)



